

上C群1号墓土器出土状況(1)

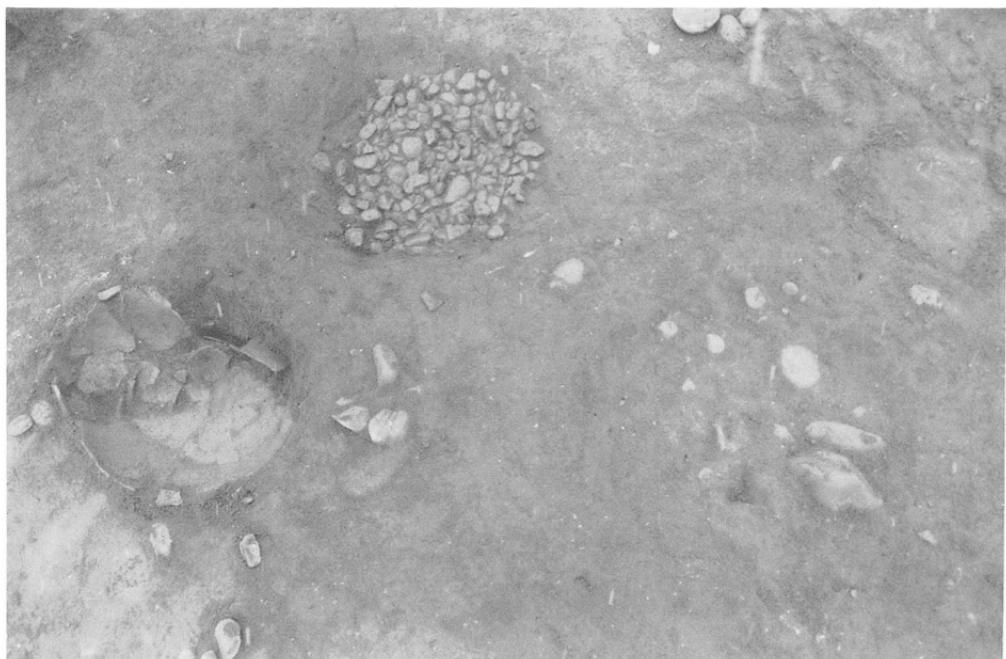
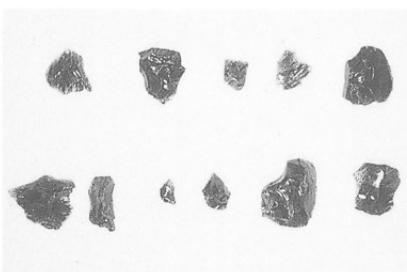
中右C群1号墓土器出土状況(2)

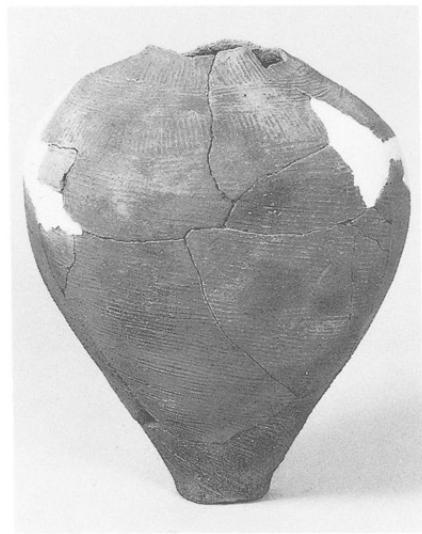
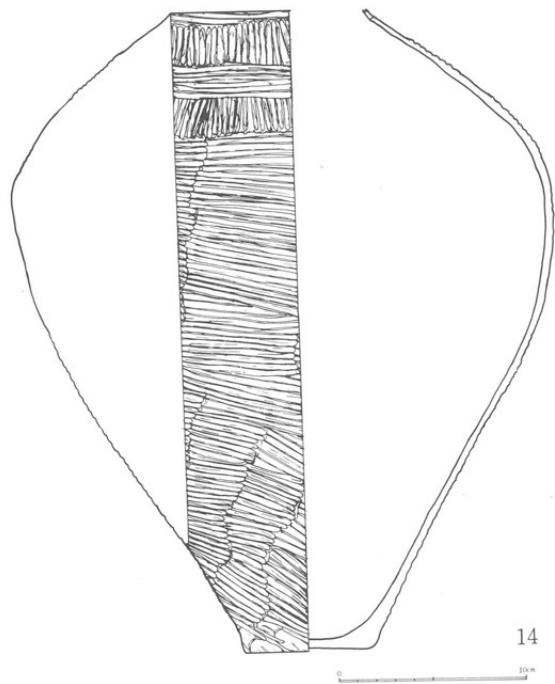
中左C群2号墓出土黒曜石剝片

(下部礫床に散りばめられていた)

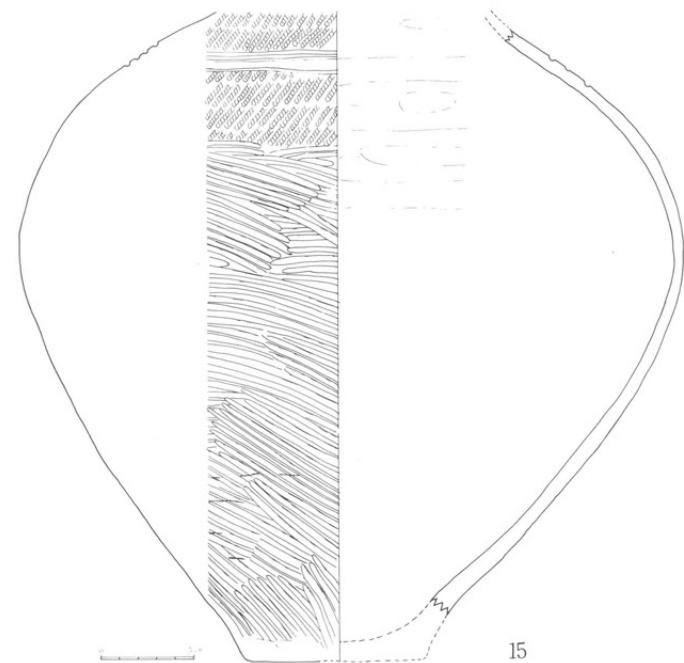
下C群再葬墓掘り上がり

(手前右1号、中央奥2号、手前左3号)

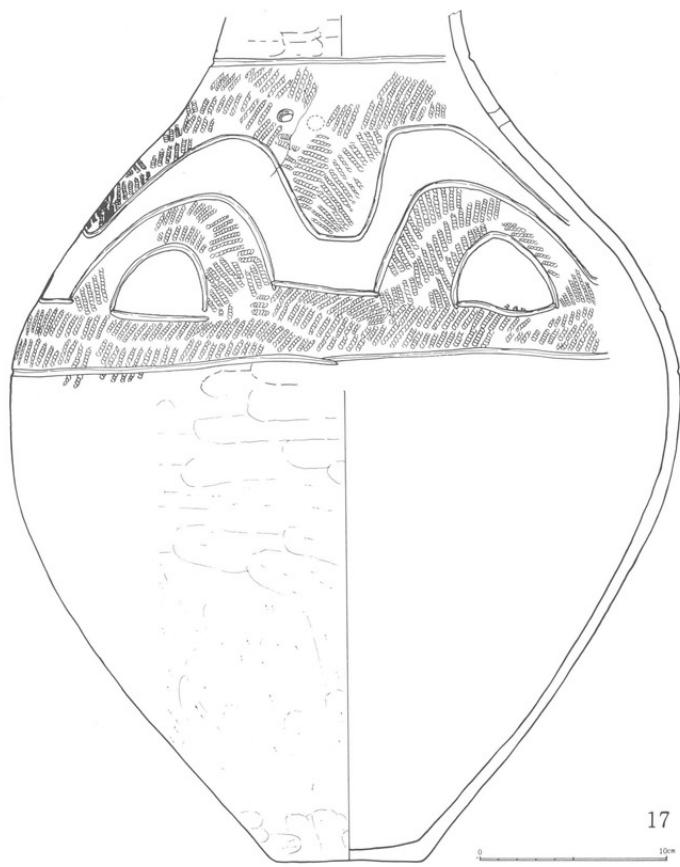




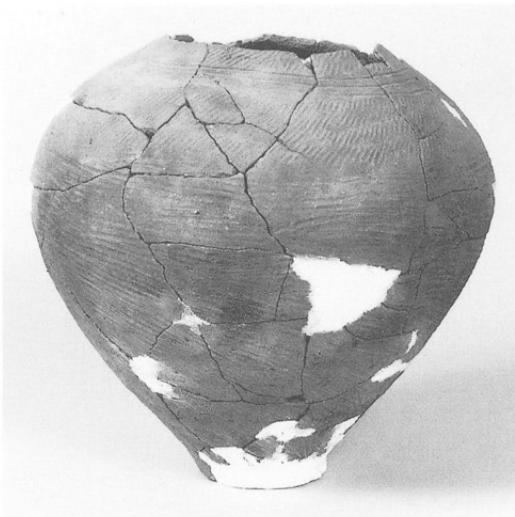
第78図 C群1号墓出土土器(14) (1 : 4)



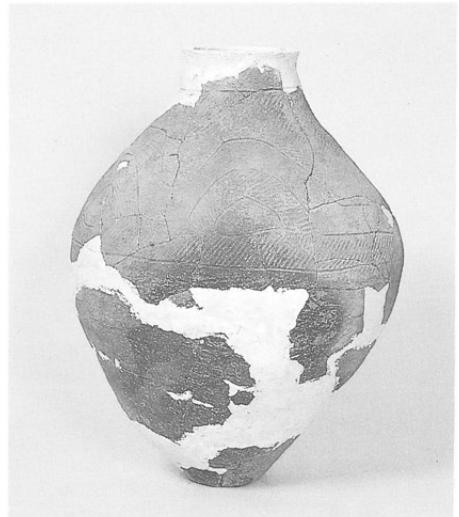
第79図 C群2号墓出土土器(15) (1 : 4)



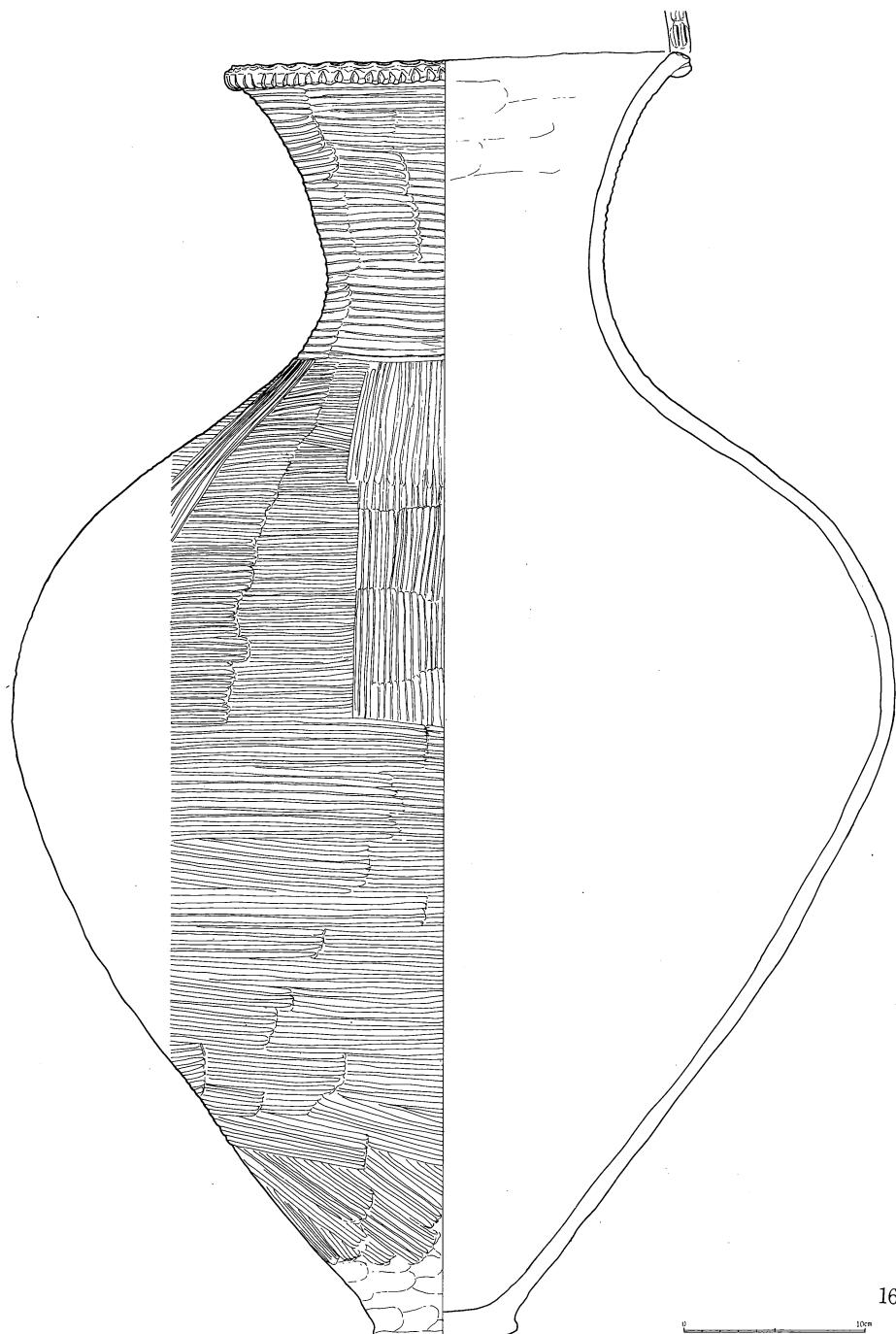
第80図 C群3号墓出土土器(17) (1:4)



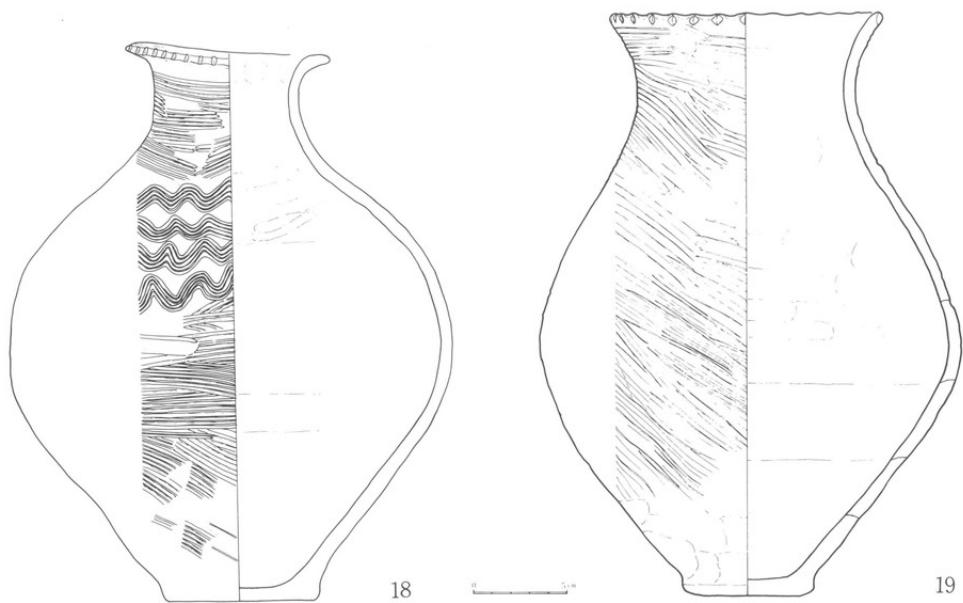
C群2号墓土器(15)



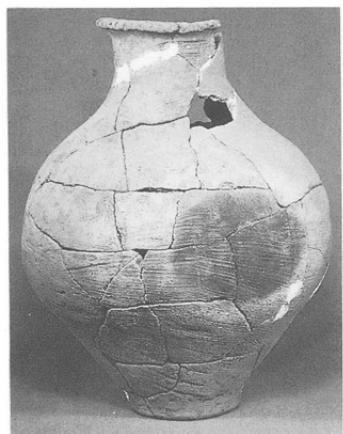
C群3号墓土器(17)



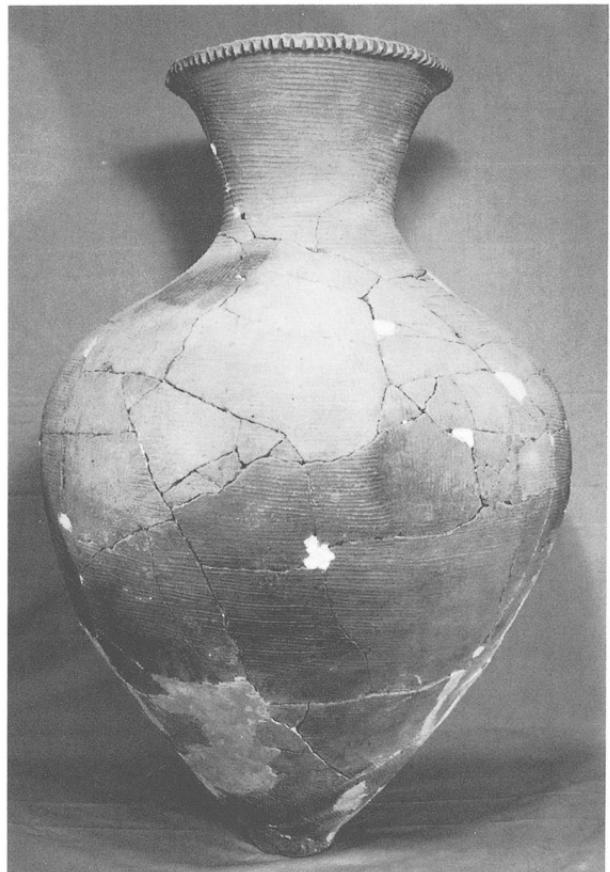
第81図 C群3号墓出土土器(16) (1:4)



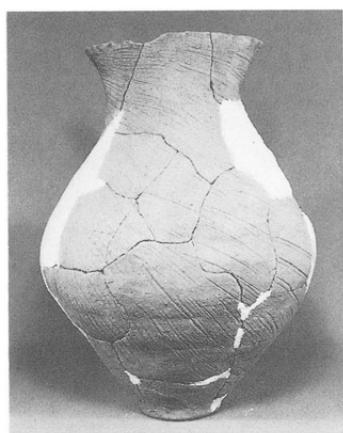
第82図 C群3号墓出土土器(18、19) (1:4)



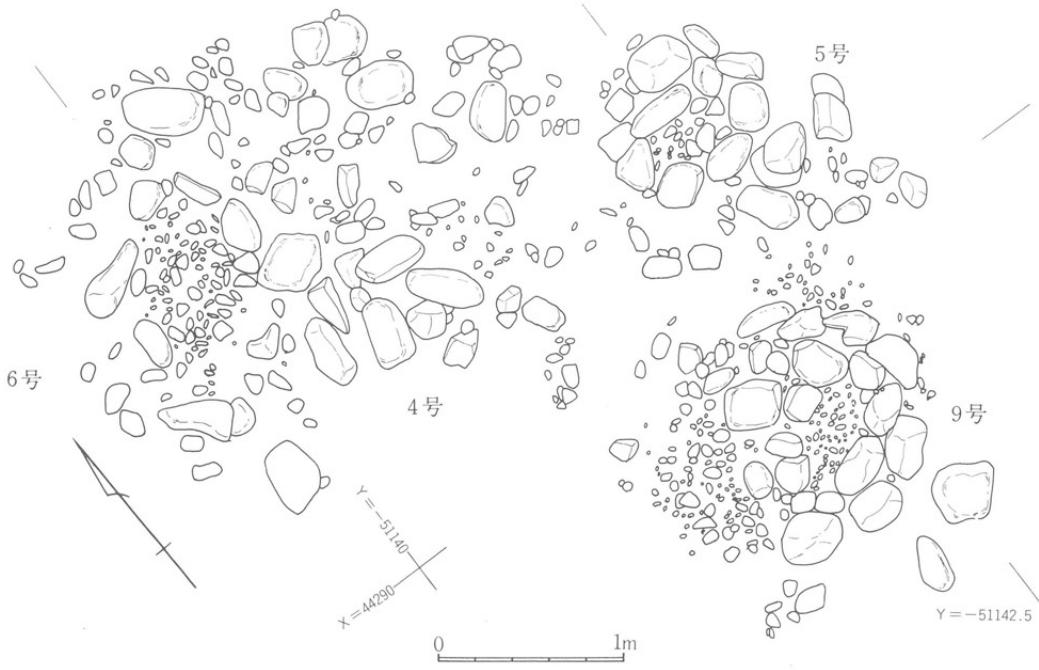
C群3号墓土器(18)



C群3号墓土器(16)



C群3号墓土器(19)



第83図 C群4～6号、9号墓上部配石



C群4号墓上部配石



C群5号墓上部配石



C群6号墓上部配石



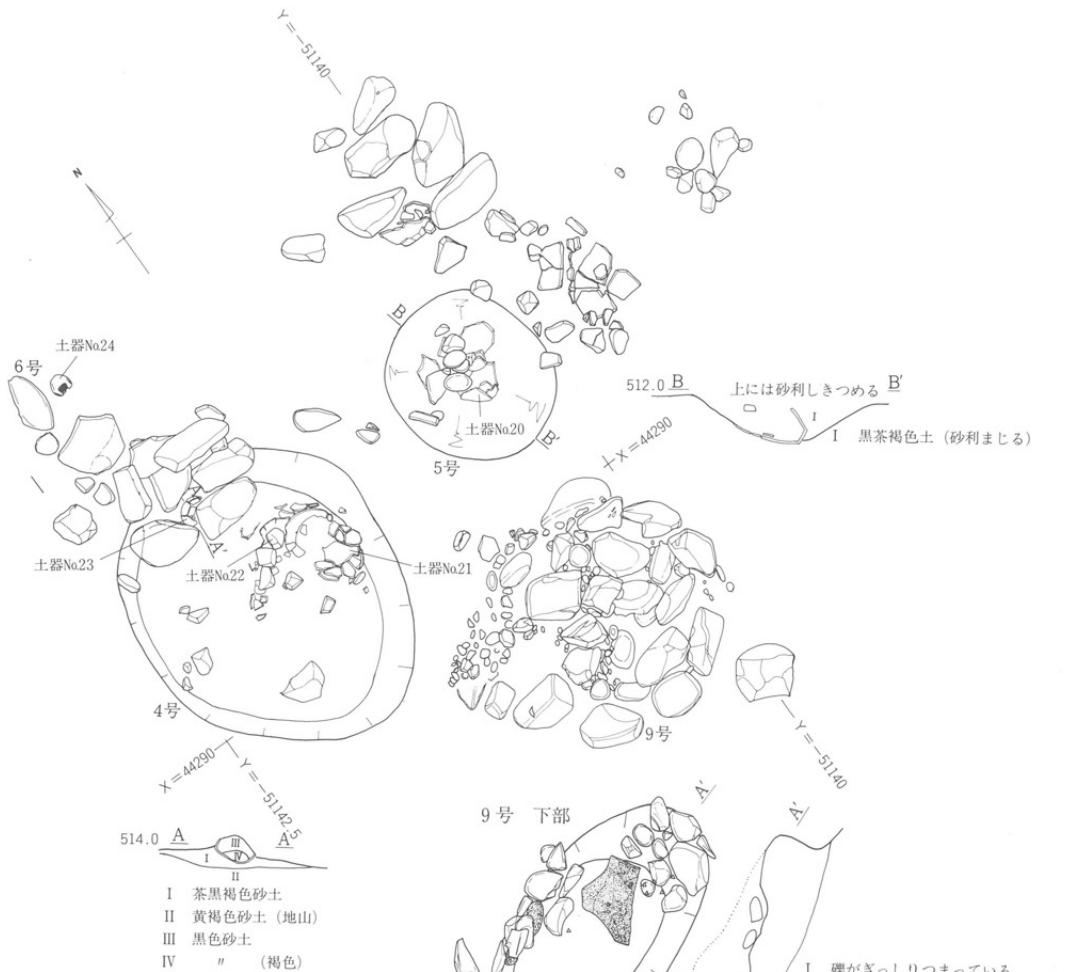
C群9号墓上部配石

4号墓 3号墓から南側へ1.5mほど離れた、C群で最も南に位置し、6号墓と接する。上部の配石は1.3m×1mの卵形に、30~50cm程度の礫を並べる。下部の土壙は配石よりかなり南側へ張り出している。土壙中に3個体の土器がいずれも正位直立のままつぶれて検出された。大型の壺2基は並び、小形壺はやや離れ、配石の中心部の直下にある。(21)は、現高28cm、最大径35cm、底径8cmを測る大型の壺で、色調は赤褐色~茶褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。焼成は良好である。土器は胴上部のほとんどを失っているが、頸部までの若干の破片が残る。胴部は横位から斜位の羽状条痕文が施される。胴上部から肩部にかけては地文にL Rの縄文を付し、その上を太い竹管で変形工学文を付しており、突起には竹管の押圧もみられる。頸部はヘラミガキの無文帶になり、赤色塗彩が施されている。(22)は現高37.5cm、最大径40cm、底径8cmを測る大型の壺で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土は、2~3mmの砂粒が目立つ。焼成はあまく、裏面に剥落が目立つ。土器は胴部から上を欠く。胴部には斜位の条痕文が施され、底部近くは指頭押圧の痕を残す。底部は木葉痕らしいが磨滅が著しい。(23)は、現高16cm、最大径19cm、底径7cmを測る小型の壺で頸部から上を欠く。色調は茶褐色で胴部に黒変がみられる。胎土は微細砂粒が多く雲母の混入もみられる。焼成はややあまい。全体によくヘラミガキが施されており、若干残る頸部には赤色塗彩がみられる。

5号墓 5号墓は4号墓の東側にあり、C群中で9号墓とともに最も形の整った配石がみられる。配石は100cm×70cmの楕円形に20~40cmの礫を配し、中に砂利を充たしている。配石と南へやすり下層に土壙があるが、堀り方は浅い。中に壺が横倒してつぶれていた。(20)は現高30cm、最大径27cm、底径7.5cmを測る壺で、色調は黒褐色~茶褐色を呈し、胎土には微細砂粒が多い。焼成は良好である。土器は頸部以上を欠く。肩部に磨消縄文の結紐文が、上段6単位、下段9単位の2段に施され、縄文部分は赤色に塗彩される。胴部は丹念にヘラミガキが施される。底部は木葉痕。

6号墓 4号墓の西に接する。上部の配石はだいぶ形が崩れているが、140cm×100cmの楕円形に20~50cmの礫を並べ、中に砂利をつめる。下部の土壙は配石とずれ100cm×80cmの楕円形の浅い堀り方となる。土壙中に土器は検出されなかったが、配石の間から、小型壺が出土している。(24)は現高12.5cm、最大径14.5cm、底径6cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多量に含まれる。焼成は良い。土器は頸部以上を欠く。頸部近くから胴部にかけて地文に縄文が付され、頸部近くは2条の平行沈線、肩部は4単位の2重の方形区画を沈線でつけ、区画外を磨消している。区画は稚拙で不揃いである。

9号墓 5号墓の南にあり、C群の最も南側となる。上部の配石は5号墓よりひとまわり大き



第84図 C群4～6号墓9号墓土器等出土状況



C群9号墓出土黒曜石剥片

C群9号墓 下部遺構



左上C群4号墓
土器出土状況

右上C群6号墓
土器出土状況

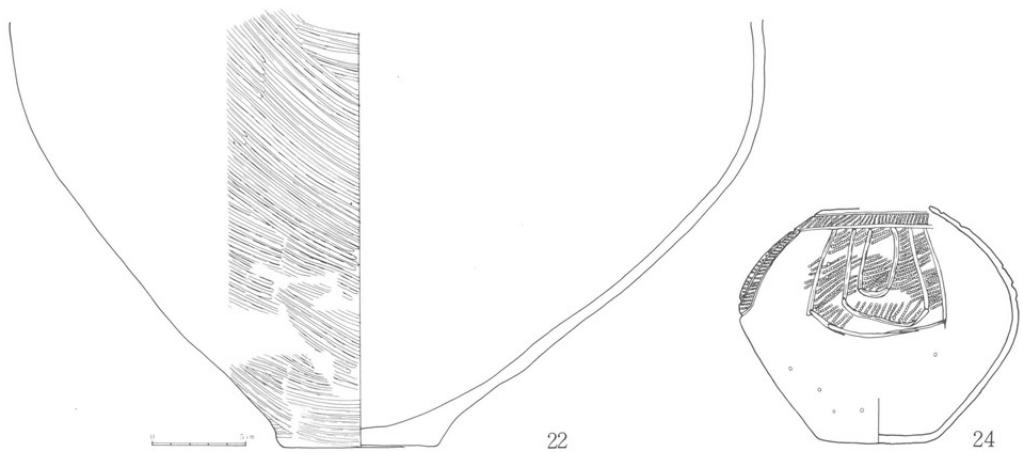
左C群5号墓
土器出土状況

く形も整っている。プランは150cmのはば円形で20~40cmの礫を2重にめぐらし、内側に砂利を充たしている。砂利は配石の外側にも見られたため別の遺構の可能性も考えたが、下部は単一の土壙であった。土壙は150×85cmの楕円形を呈し、中には大きな板状砂岩が敷かれている。埋土の中や土壙底部から黒曜石の剥片が8片検出されている。

7号墓 2号墓の西にあり、プランは明確ではないが20~50cmの礫を110cmほどの円形に配した上部配石を持つ。下部の土壙については把えられなかった。遺物整理の段階で7号墓中より2個体分の土器が確認された。(25)、(26)

8号墓 7号墓の西にあり、C群中最も西側に位置している。150cm×115cmの不整な楕円形に20~50cmの礫を配し、内側に80×50cmの範囲で砂利を25cmの範囲で充す。下部は浅い土壙状の堀り込みがあったが、遺物は全く検出されなかった。

礫床墓 9号墓東側5mにあり、2群数基から成るものと思われるが数は判然としない。にぎり拳大から親指ほどの大きさの小礫をぎっしり敷きつめてある。一応礫床墓としたが、小礫は上



第85図 C群4、6号墓出土土器(22、24) (1 : 4)

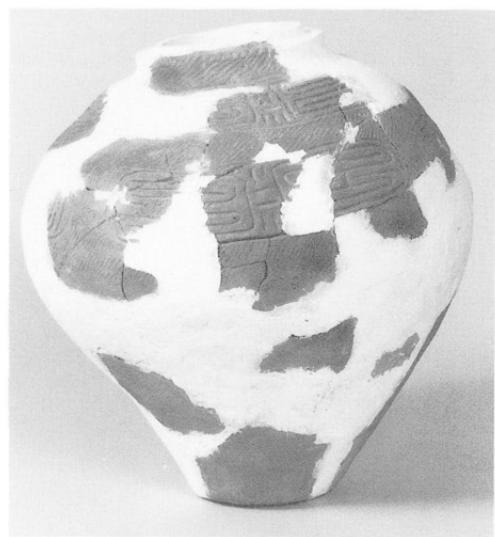
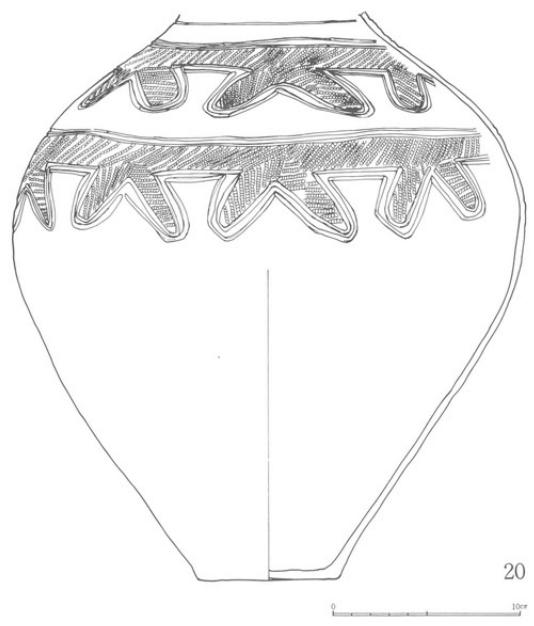


左上C群4号墓出土土器(21)

左下C群4号墓出土土器(22)

右上C群4号墓出土土器(23)

右下C群6号墓出土土器(24)



第86図 C群5号墓出土土器(20) (1:4)



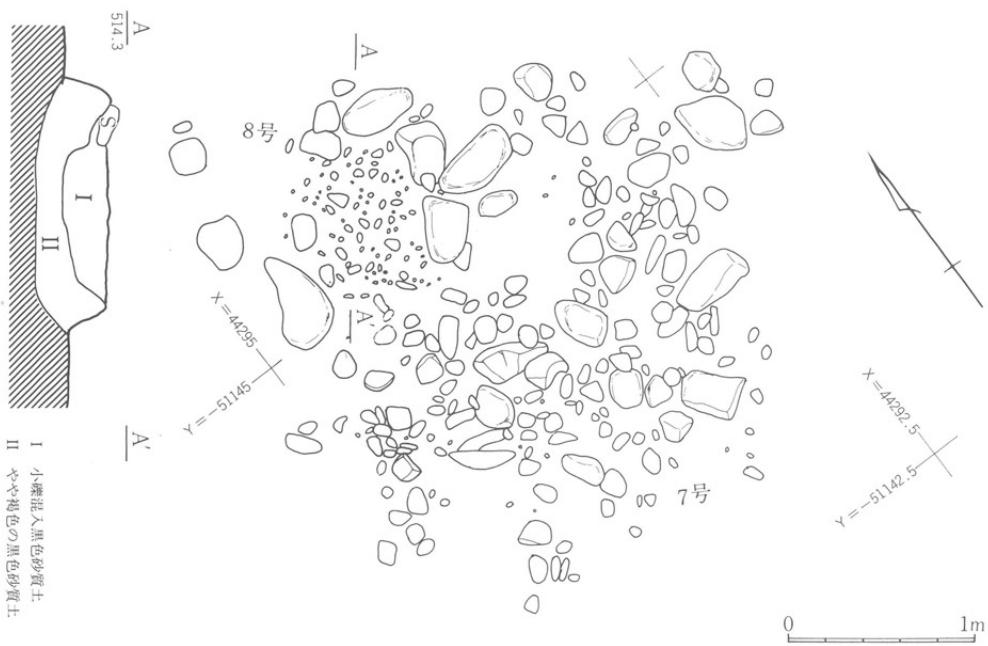
左C群5号墓出土土器(20)



右上C群5号墓近出土土器(27)

右中C群7号墓出土土器(25)

右下C群7号墓出土土器(26)



第87図 C群7、8号墓上部配石

C群7号墓上部配石（比較的大きな礫を用いている）



C群8号墓上部配石（破壊されているが礫間に砂利をつめる）



同墓断面

部配石の可能性もあり、判定しがたい。西側の群から副葬品らしい小形壺(28)が出土している。



C群南礫床墓



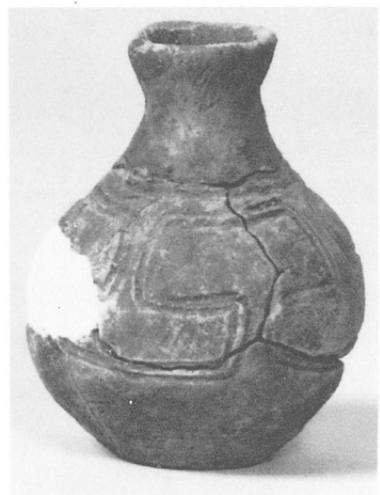
同 断面



同 土器出土状況



同 土器出土状況



出土小形壺28

D群（第88図）

第2次調査時にA-10、11グリットから検出された。4基の墓壙からなる。遺構検出中に茶褐色土中に暗茶褐色土の落ち込みを検出、3号、4号墓に弥生中期初頭の土器を発見し再葬墓と判断した。4基は南西から北東方向に直線的に並ぶ。上部配石は表土削平時に削られたためか検出されなかった。

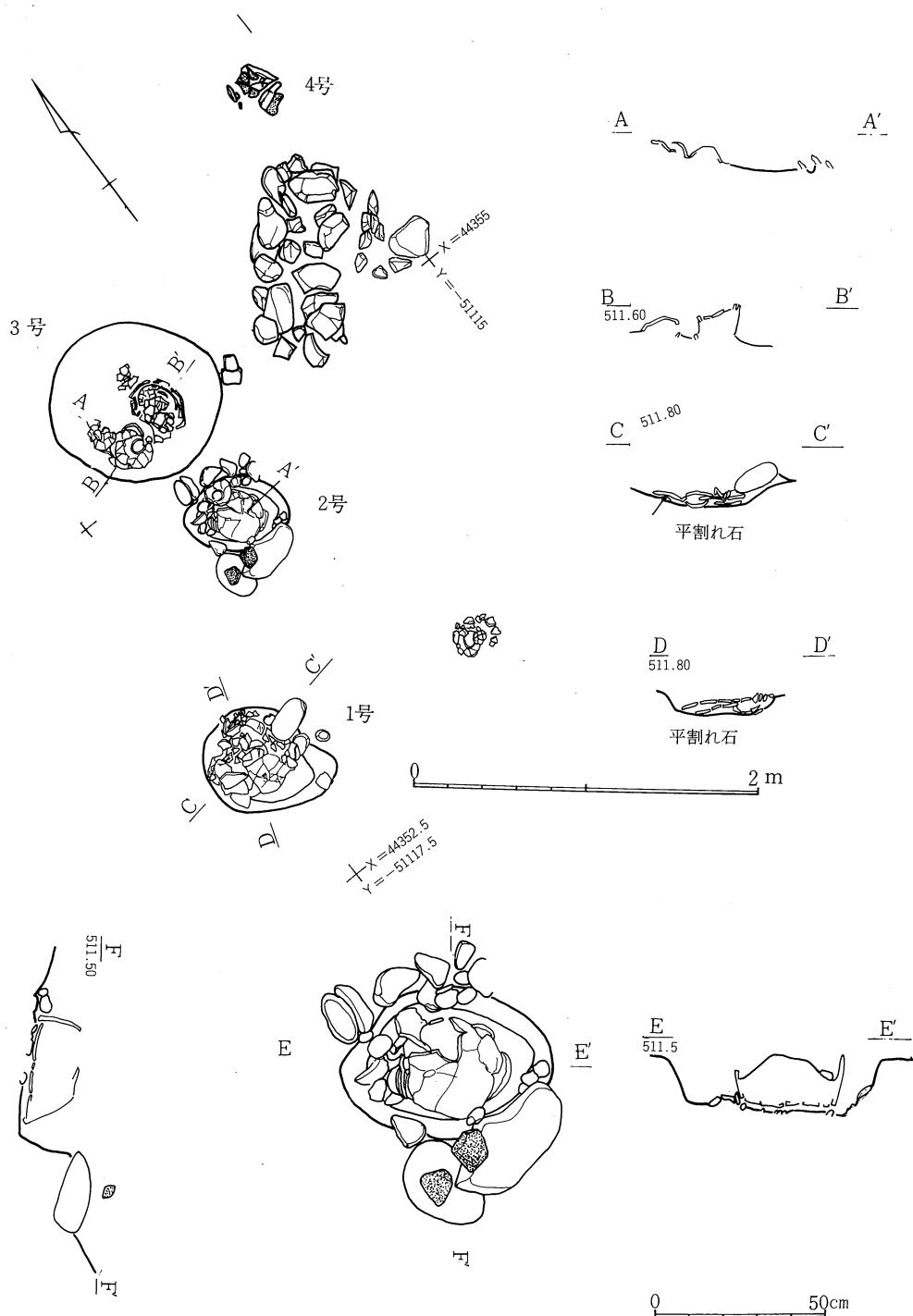
1号墓 D群中最も南にあり、80×60cmの卵形に近い不整円形を呈す。堀り方は浅く約10~15cmである。大型壺が土壙中に正位で押しつぶされ出土している。土器の下面には硬砂岩の剥片が敷いてある。(29)は大形の壺で器高49cm、口径14cm、最大径39cm、底径10.5cmを測る。色調は赤褐色～茶褐色～灰褐色を呈し、胎土は砂質で白色微砂粒を多量に含み、焼成は普通である。口縁部は6単位の波状口縁で、ひとつおきに凹みを持つ。口唇部には沈線を巡らす。頸部にはナデを施す無文帯で、肩部にはRLの縄文を付し太い沈線による削り出しで変形工字文を施している。工字文の両端には明瞭な盛り上りがつく。胴部はRLの縄文が7段につけられている。

2号墓 1号墓の北にあり、3号墓と隣合う。土壙は60×45cmの卵形で土壙の回りを礫で囲んでいる。土器は遠賀川系統の在地の壺で、正位のまま斜めに押しつぶされている。壺の周囲は硬砂岩の大きな剥片で囲んでいる。(30)は器高36.5cm、口径16cm、最大径25cm、底径8cmを測る。色調は淡赤褐色～黄褐色を呈し胴部から底部にかけて黒変がみられる。胎土は白色の砂粒が多くやや砂質である。焼成はややあまく、表裏ともにもろい。器面がもろく調整痕は失われているが、ヘラナデが行われたと思われる。口縁部は外反し、裏面に3条の平行沈線を施す。表面は頸部に5条、肩部に4条、胴部に4条の平行沈線が施されている。底部は磨耗が著しい。

3号墓 2号墓の北に隣接する。土壙はごく浅く堀り方は判然としないが直径1mほどの円形と思われる。土器は3個体が重なるように出土している。(31)、(32)ともに逆位でひっくりかえっており、隣に(33)が正位で置かれている。(31)は現高15cm推定高25cm、最大径20cm、底径8.5cmの壺で、色調は淡茶褐色を呈し、胎土に微砂粒が入る。焼成は普通だが、器面はもろくザラつく。胴部から上のほとんどを欠くため文様は判然としないが、肩部には横位の磨消縄文帯が施され、赤色塗彩がされる。(32)は、現高15cm、最大径20cm、底径6cmの小型壺で、色調は黄褐色～灰黄色を呈す。胎土は砂質で微小砂粒が多量に入る。焼成はややあまくもろい。土器は胴部より上を欠くため文様構成はわからない。(33)は胴部の一部分を欠く。推定高40cm程度、最大径30cm、底径9cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土はやや砂質で微小砂粒を多く含む。焼成はややあまくもろい。器面は荒れてザラつく。口縁部は外反し、頸部にかけて縄文帯となる。肩部は3cmの幅で横位の磨消しを3条めぐらす。胴部以下は無文帯となる。底は木葉痕1枚

4号墓 D群の最も北にある。表土削平時に削られ甕が露出していたためプラン等は判然としないが円形に近いプランとなろう。34は現高35cm、口径27cmを測る。色調は茶褐色を呈し、胎土

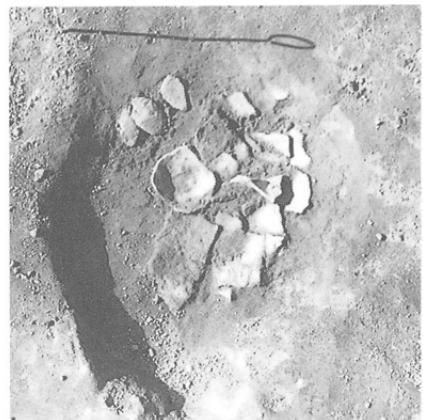
は砂質で微砂粒を多量に含む。焼成は良好だが器面はザラつく。口縁部は指頭圧痕による押圧突帶となる。頸部は縦位の条痕文、胴部は斜位の条痕が施される。



第88図 D群土器出土状況



D群1号墓土器出土状況 上部



D群1号墓土器出土状況 下部



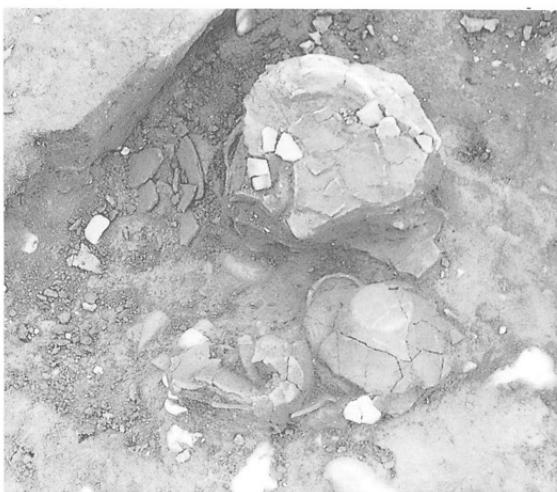
D群2号墓土器出土状況
土器のまわりを囲む硬砂岩の剥片が見える。
土壌は地山の砂礫層に堀り込まれている。



D群2号墓で土器の上半部を取り除いたところ硬砂岩の剥片がわかる。



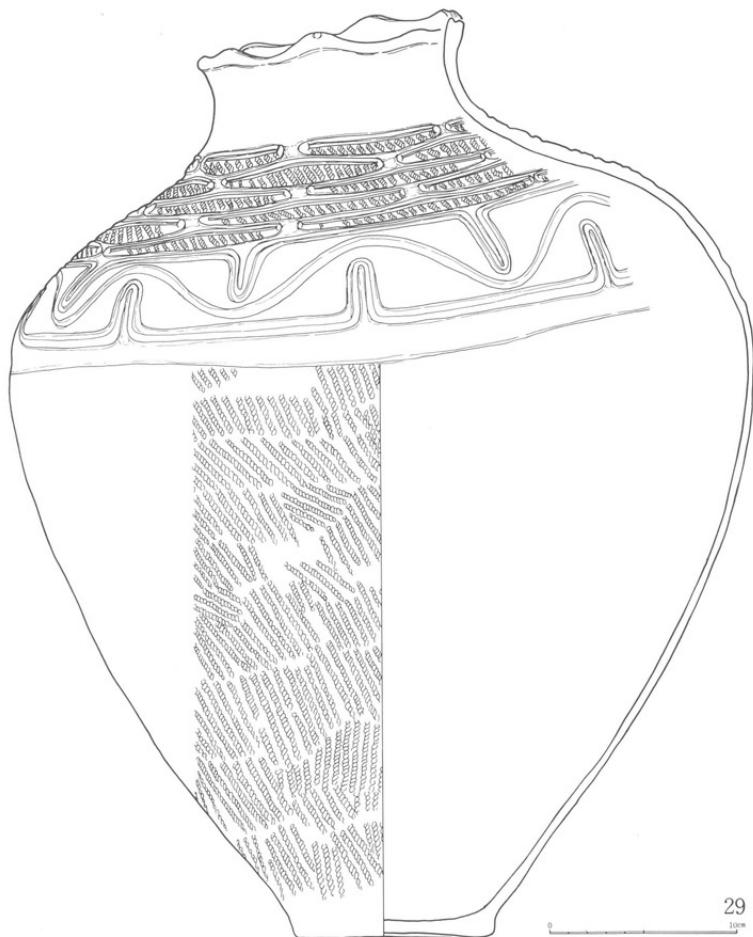
D群2、3号墓土器出土状況
右側の壺の口縁部が見えるのが2号墓、左側に2個体分の土器の底部と土器の塊がみえるのが3号墓



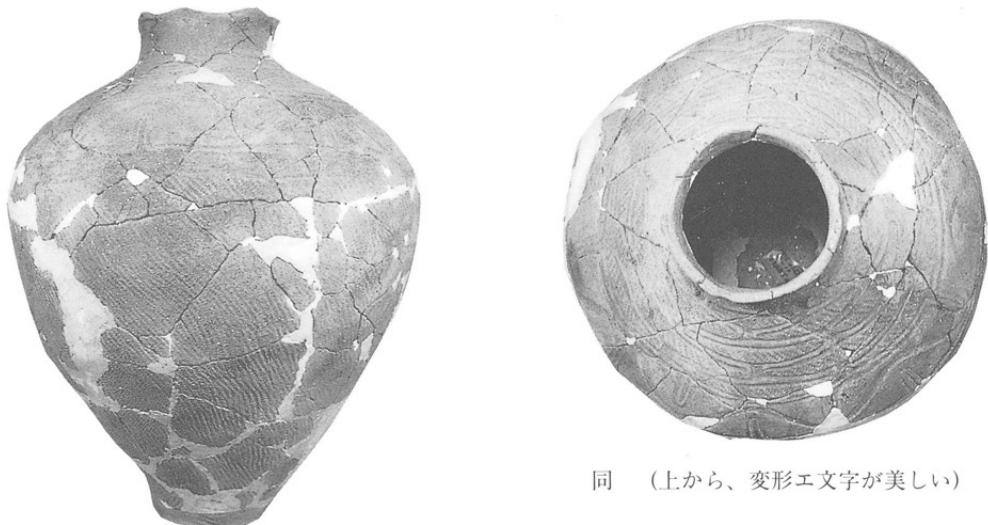
D群3号墓土器出土状況
手前右側が(31)、左側が(32)、
いずれも逆位、写真上の土器の塊が(33)、大型壺で正位



D群4号墓土器出土状況
破壊が著しく
土壙などはわからぬ

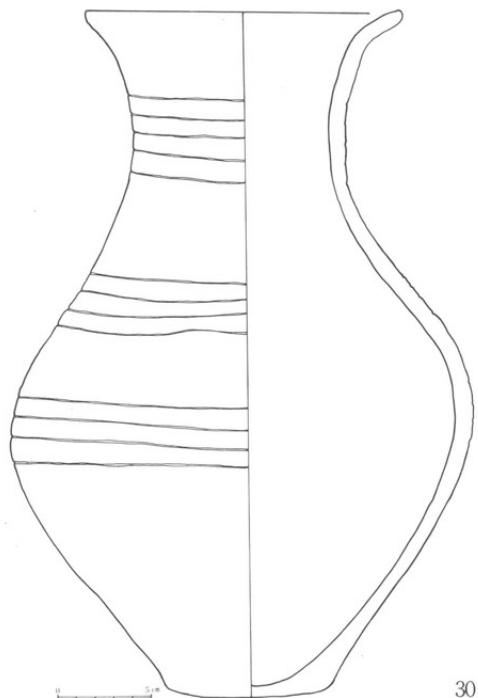


第89図 D群1号墓出土土器(29) (1 : 4)



同 (上から、変形エ文字が美しい)

D群1号墓出土土器 (横から)



30

第90図 D群2号墓出土土器(30) (1:4)



D群2号墓出土土器(30)



D群4号墓出土土器(34)



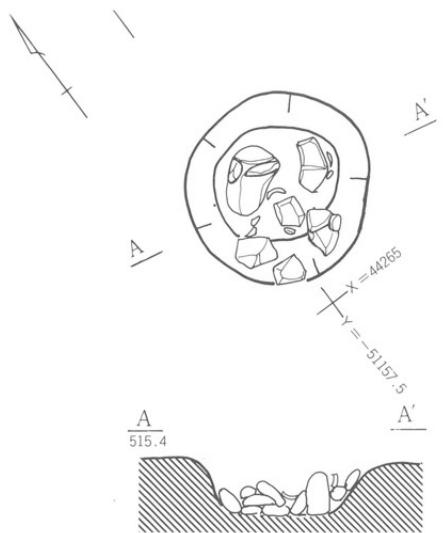
D群3号墓出土土器(31)



D群3号墓出土土器(32)



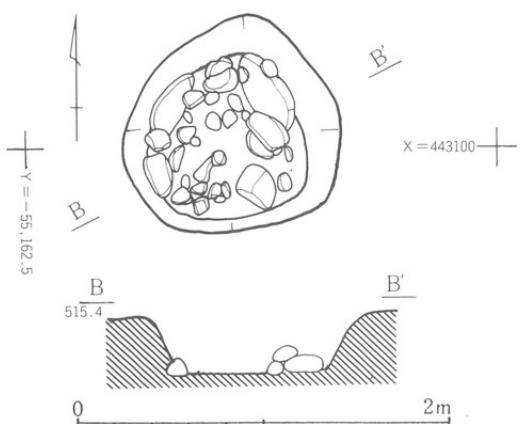
D群3号墓出土土器(33)



第91図 C-1 グリット J 26号住内土壙



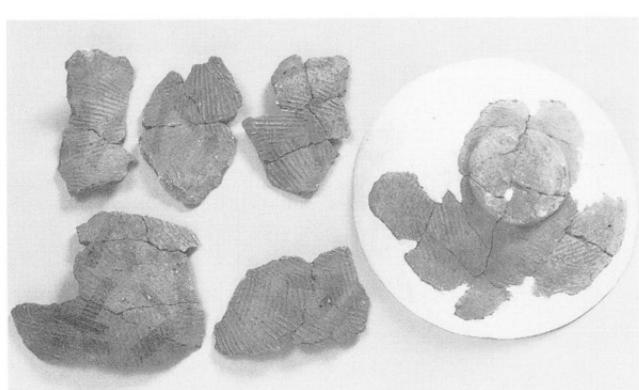
C-1 グリット J 26号住内集石土壙
(35)の土器が出土している



第92図 Z-5 グリット 土壙



Z-5 グリット 集石土壙
(36)の土器が出土している



C-1 グリット 集石土壙内出土土器(35)



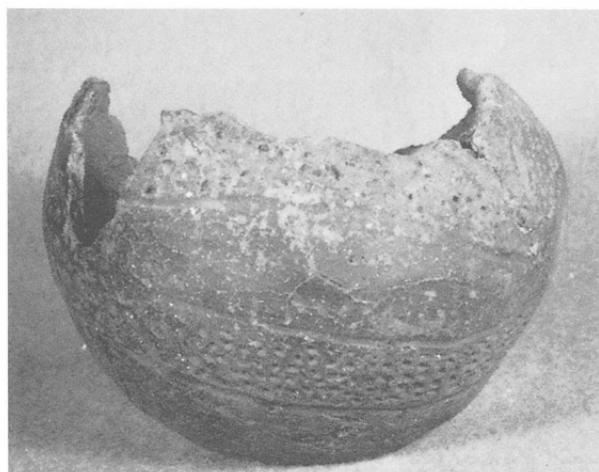
Z-5 グリット 集石土壙内
出土土器(36)



F-5 グリット出土 配石の
上面から出土した。遺構は判
然としないが副葬品か？



F-5 グリット出土 第36号石棺
墓付近から出土したが、遺構に伴う
かどうかは不明、やはり副葬品か



E-2 グリットから出土、遺構は不明

第4節 古代の遺構と遺物

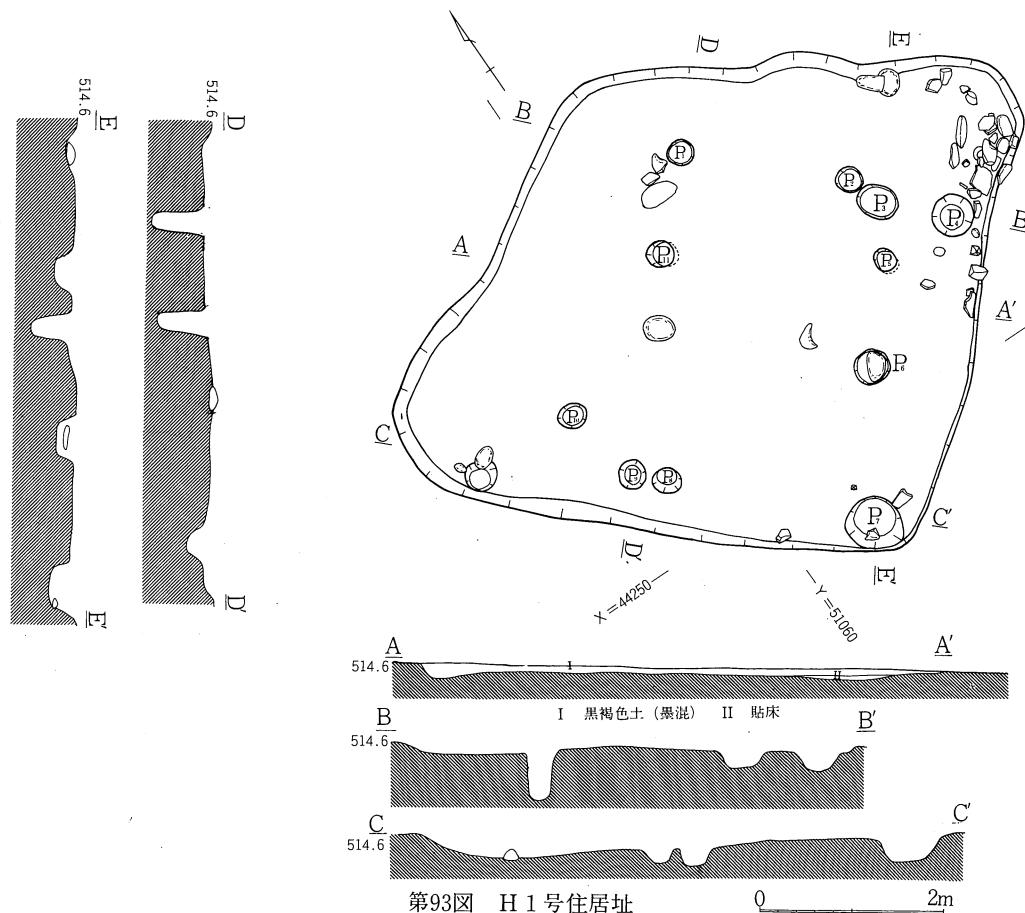
(1) 住居址

H 1号住居址 (第93図)

検出 第1次調査区K-5、6グリットにあり、J30、32号住居址の上部につくられている。

規模・形状 4.8m×6.6mの隅丸長方形で、カマドのある北東方向と対角の南西部がやや張り出している。縄文の住居上にあるためプランがつかみにくくやや不整形となっている。主軸はN120°

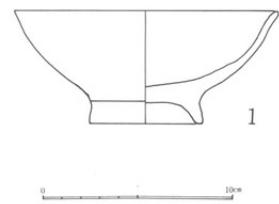
E 埋土 炭化物の混じった黒褐色土の単層で礫はみられない。床面・壁 床は地山のブロックが混じる茶褐色土層に構築され、南西の隅を除き比較的しまった床面となり、部分的に貼床もみられる。壁は遺構検出時にバックホーでかなり削平されており、10cmほどしか残っていないが急角度の立ち上がりをみせている。カマド 北東隅に設けられている。残存状態はあまり良くない石組みだけが残る。柱穴 P₁、P₄、P₇、P₁₀の4本と思われるが、P₅、P₁₁を使っての建て替えの可能性もある。遺物の出土状況 床面から10cmほど上部に、灰釉陶器、土師器壺、黒色土器Aなどが出土している。遺物 土師器碗(1)図示できないが黒色土器A壺片、紛失した遺物として灰釉陶器碗がある。時期 平安時代9世紀後半



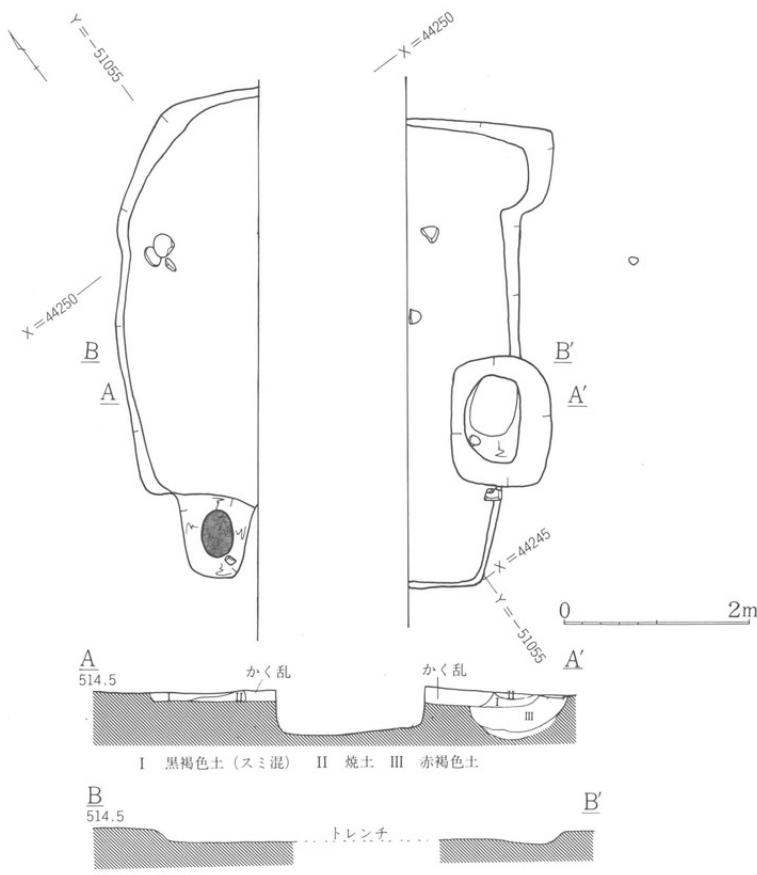
第93図 H 1号住居址



H 1号住居址



第94図
H 1号住出土土師器椀 1
(1 : 4)



第95図 H 2号住居址

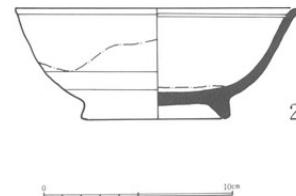
H 2号住 (第95図)

検出 L-5、6グリットにある。土層確認のトレンチのセクションに落ち込みを認めH 2号住とした。住居の中央がトレンチで切られている。規模・形状 5.5m×4.3mの隅丸長方形、主軸はN34° E。埋土 黒褐色砂質土の単層 床面・壁 床面は地山の黄灰色砂質土上に築かれているが硬化面ははっきりしない。壁は堀り方がわずかに残るだけであるが立ち上がりは比較的に

急角度である。カマド 南西の隅にやや張り出してある。底は丸く堀り凹められており底に焼土がみられる。柱穴 なし 遺物の出土状況 床面精査中に灰釉陶器片や刀子、鉄鎌、砥石などが出土している。遺物 灰釉陶器碗(2)図示しないが、土師器壊Aの破片が3個体分、刀子、鉄鎌、砥石が出土している。時期 平安時代11世紀末



H 2号住居址



第96図
H 2号住出土灰釉陶器碗 2
(1 : 4)

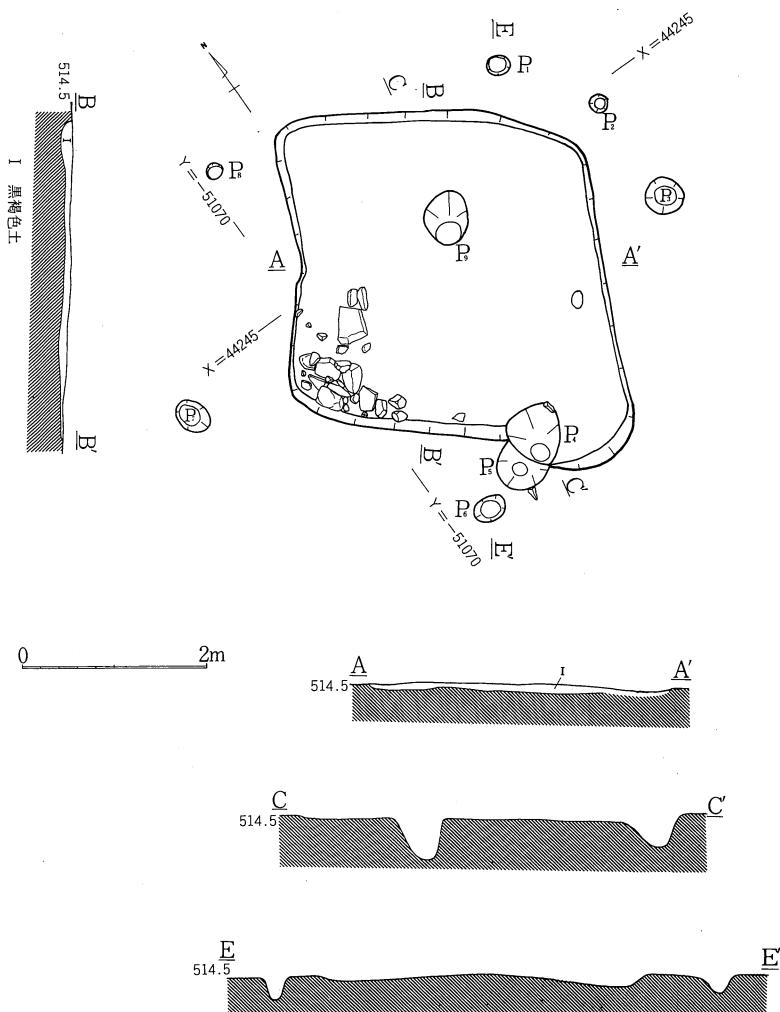
H 3号住 (第97図)

検出 K-4、5 グリットにある。表土削平時に黒色土器Aなどが出土したため、精査したところわずかに黒褐色土の落ち込みがあるためH 3号住とした。規模・形状 3.5×3.4mの隅丸方形と思われるが表土削平時に若干削られている。主軸N36° E 埋土 黒褐色土の単層 床面・壁 床面は全体に硬化面がみられ良好、壁は削平のため10cm前後を残すだけであるが、ゆるやか

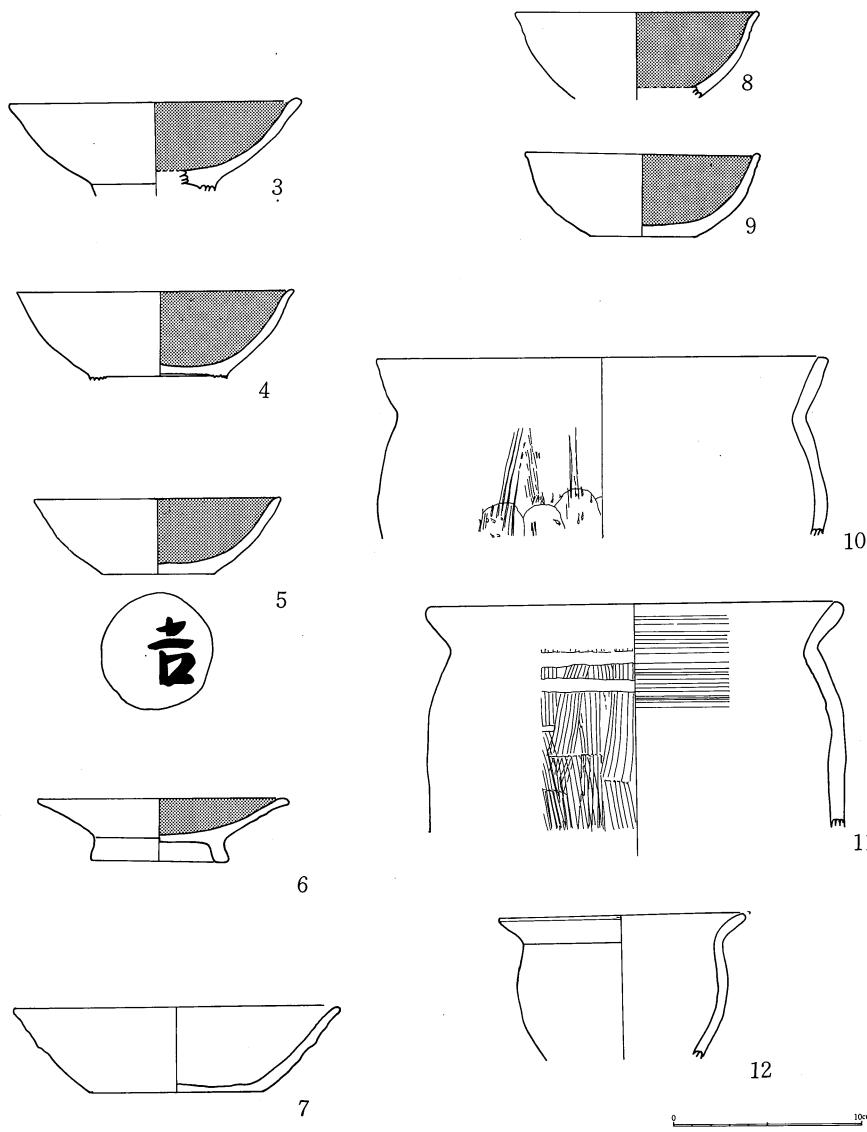


H 3号住居址

な立ち上がりとなる。カマド 南壁西側隅にある。石組みだけが残る。柱穴 周辺部を含めて9ヶ所のピットを確認しているが主柱穴は不明。遺物の出土状況 床面から若干上で黒色土器や土師器の壊、椀などがカマド周辺から出土し、カマドの石組みの付近には土師器甕が3個体ほど出土した。遺物 黒色土器A椀2(3、4)黒色土器A杯3(5、8、9)黒色土器皿(6)、黒色土器A椀2(3、4)土師器皿A(7)ロクロ甕(10)長胴甕(11)小形甕(12)この他黒色土器A杯の破片などがあるが図示できない。時期 平安時代9世紀後半



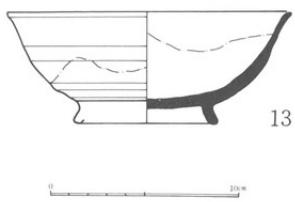
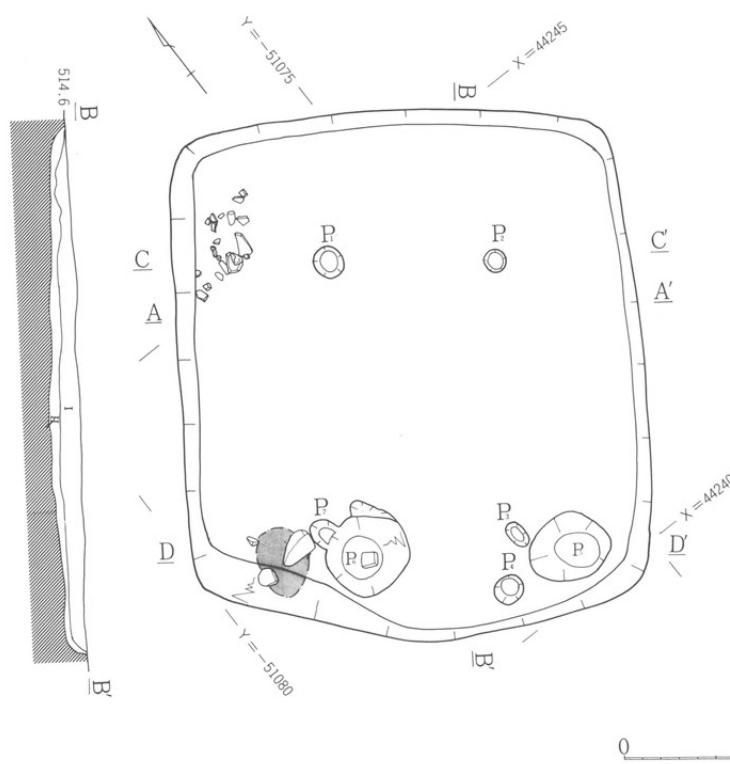
第97図 H 3号住居址



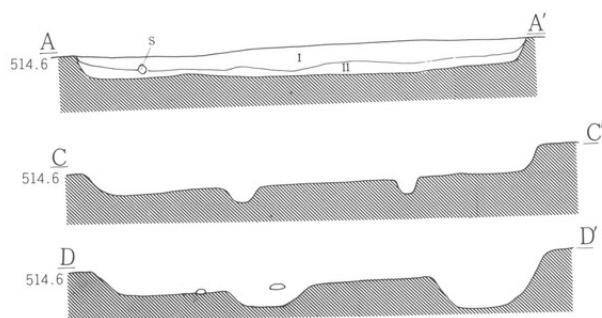
第98図 H 3号住居址出土土器 3~12 (1:4)

H 4号住 (第99図)

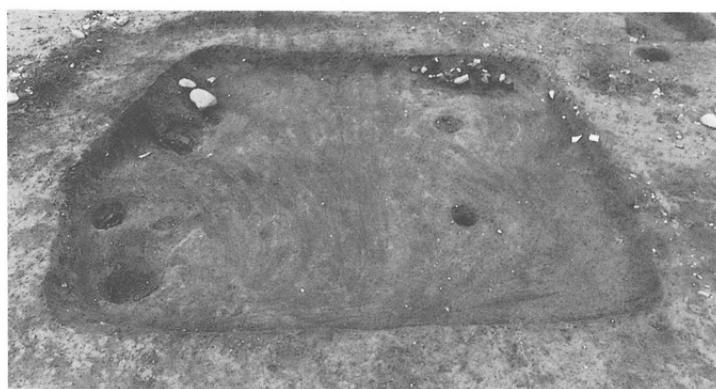
検出 J、K-4 グリットにある。表土削平中大きな黒褐色土の落ち込みがあり H 4号住とした。規模・形状 5.6m×5.0mの隅丸方形プラン、主軸はN36° E。埋土 2層に分層できるが上層、下層の差はわずかである。床面・壁 床面は地山の黄褐色砂質土上に築く。硬化面はほとんど見られない。壁は堀り込みが15~24cmとよく残り急角度で立ち上がる。カマド 南壁の西隅に築かれ、石組みの石2ヶと焼土が残るのみである。柱穴 P₁、P₂、P₄、P₇の4本としたいが、P₇には若干疑問が残る。遺物の出土状況 遺物の出土は極めて少なく、カマド周辺で灰釉陶器碗が出土しただけである。遺物 灰釉陶器碗(13)(大原10号式)図示できない土師器甕、灰釉陶器碗、破片などが出土している。時期 平安時代11世紀後半



第100図
H 4号住出土灰釉陶器椀13
(1 : 4)



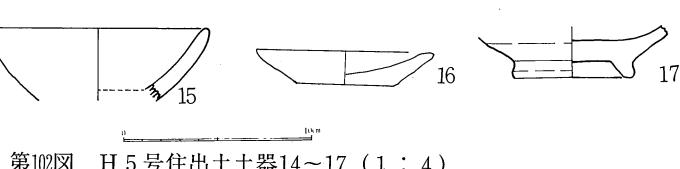
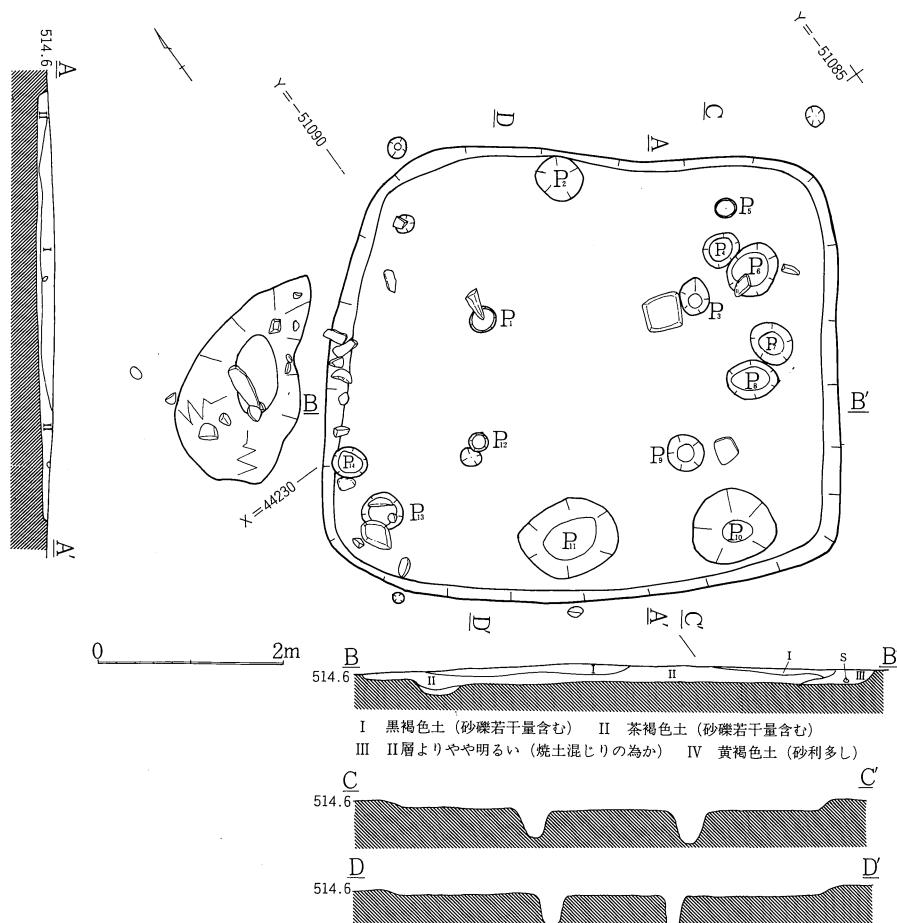
第99図 H 4号住居址



H 4号住居址

H 5 号住（第101図）

検出 J、K-2 グリットにある。地山への黒褐色土の落ち込みがあり、H 5 号住とした。規模・形状 5.4m × 4.8m の隅丸長方形、主軸は N52° W 埋土 2 層に分層される。上層は黒褐色土、下層は茶褐色土となる。床面・壁 床は黄褐色土上にあり、平坦で全体に硬化面がみられ良好である。壁はあまり残っていないが、立ち上がりは比較的急角度である。カマド 西壁ほぼ中央に築かれているが、破壊が著しく石組みが若干残るだけである。煙道は痕跡がわずかに認められるが、縄文土壙と切り合うため判然としない。柱穴 P₁、P₃、P₉、P₁₂ の 4 本 遺物の出土状況 床面上に土師器や灰釉陶器、鉄器などが見られ、主柱穴の P₃ に沿って作業台が置かれている。遺物 土師器坏 A 3 (14、15、16) 灰釉陶器椀(17) 鉄製鎌、作業台のほか図示できない土師器坏数個体分などが出土している。時期 平安時代11世紀末

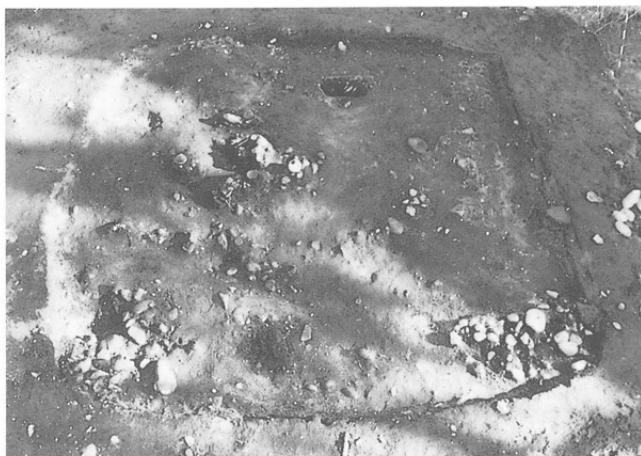




H 5号住居址

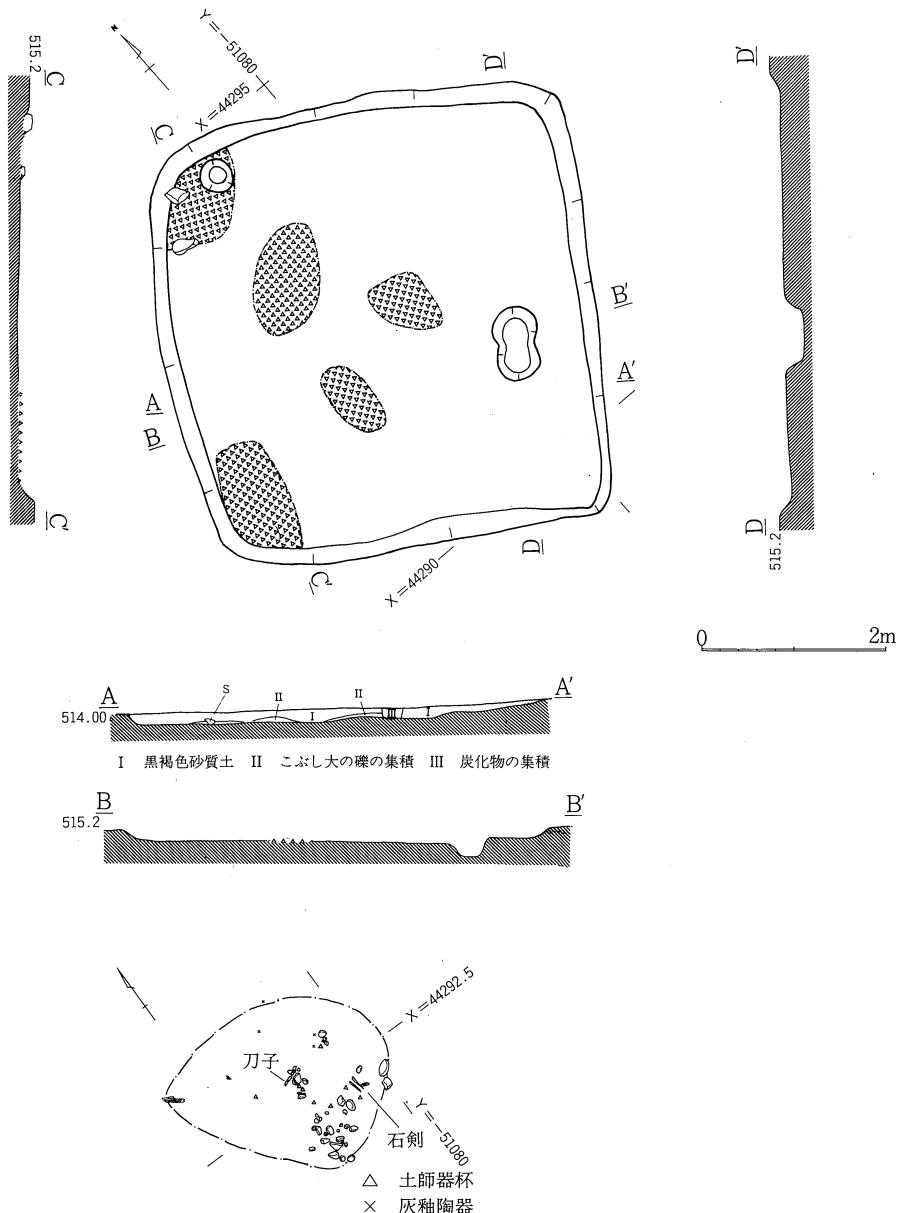
H 6号住（第103図）

検出 G-7、8グリットにある。表土削平時に焼骨の入った灰釉の小形の広口瓶が出土した。付近を精査すると、2.4m×1.9mの水滴状の焚火のあとを考えられる炭化物の集積がみられ、小形の土師器壊が集中して出土したため、火葬施設と考えた。さらにこの遺構を中心に茶褐色砂礫土を堀り込んだ5m四方ほどの落ち込みがあり、H 6号住とした。規模・形状 4.8m×4.6mの隅丸方形プラン、主軸の方向はカマドの位置がはっきりしないがN30° Eと考えられる。埋土 黒褐色の単層 床面・壁 床は茶褐色砂礫土上に築かれているが硬化面はない。壁は11~14cmを計り、立ち上がりは比較的急角度である。カマド 検出できなかった。両壁の北と南の隅に2ヶ所集石があるがカマドとは判断できない。柱穴 ない 遺物の出土状況 住居址上部の火葬墓の炭化物の中から土師器壊7、骨片のつまた灰釉陶器の小形瓶、刀子などが出土している。住居址中の遺物はかなり火を受けており灰釉陶器、須恵器壊、土師器椀などが出土している。遺物 火葬墓出土は、灰釉陶器の大ぶりな小瓶(18)、土師器壊5(19、20、21、22、23)黒色土器B壊(24)時期若干違うが灰釉広口瓶(25)がある。住居址のものとして須恵器壊(26)この他に図示できない土

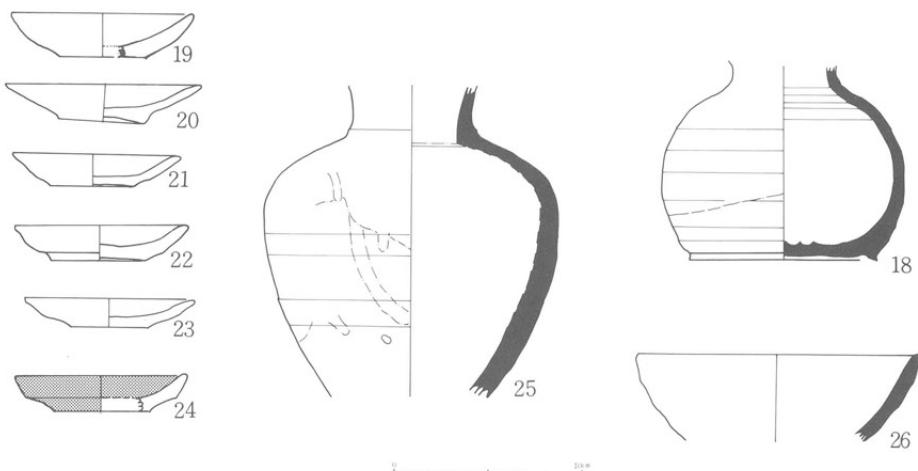


H
6号
住居址

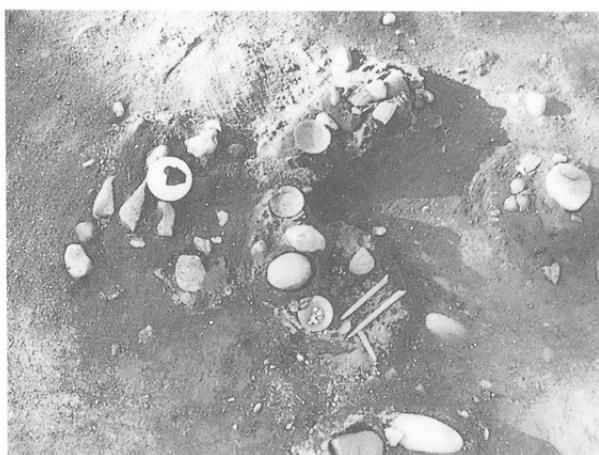
師器坏、椀など、刀子、紡錘車が出土している。時期 火葬墓平安時代11世紀末、住居址平安時代9世紀後半



第103図 H 6号住居址、同址上部火葬墓



第104図 H 6 号住、火葬墓出土土器18~26 (1 : 4)



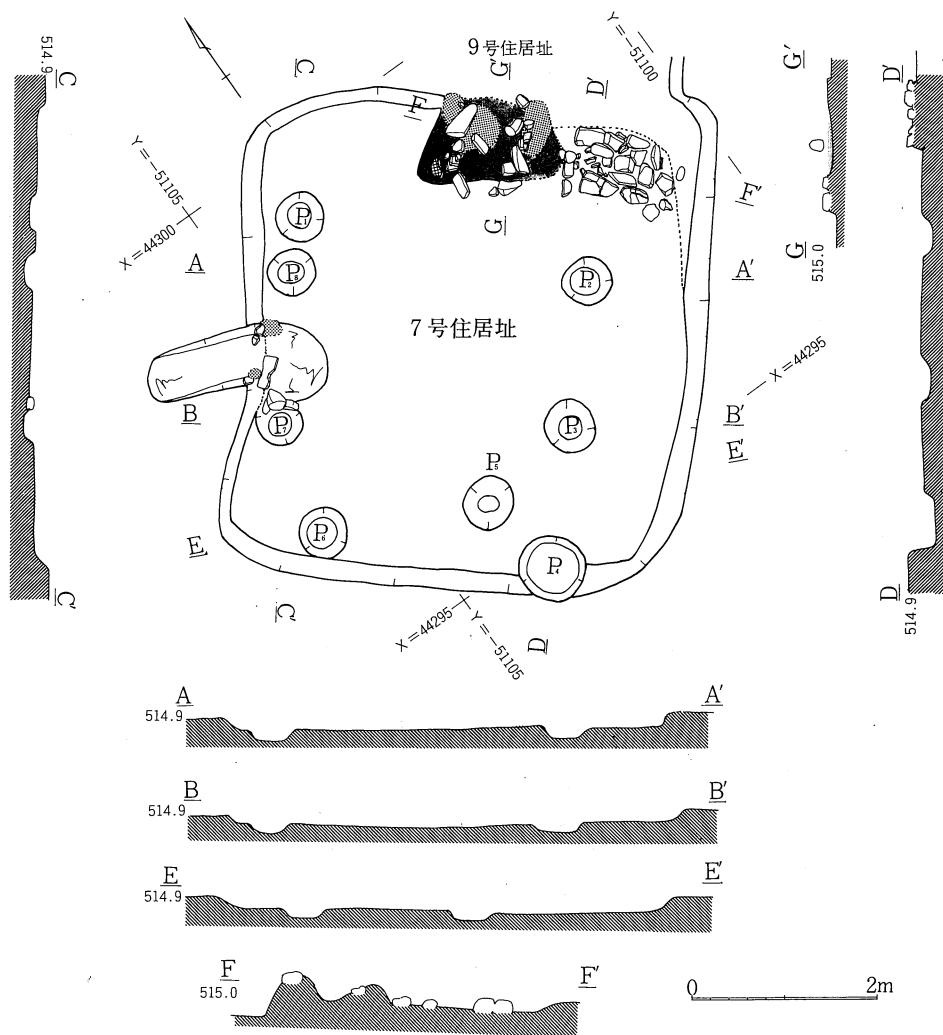
H 6 号住居址上部火葬墓
プランははっきりしない
が土師器杯などの遺物が
散乱しており葬送の儀礼
のあとか?



同部分
縄文時代のものと思われる
石剣も火を受けてバラ
バラに割れて土師器杯と
いっしょに出土した。

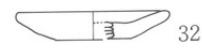
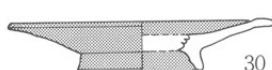
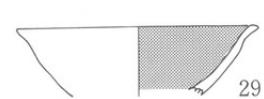
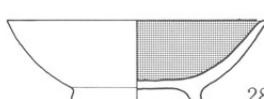
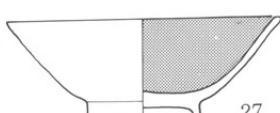
H 7、9号住（第105図）

検出 E-7 グリットにあり、H 8号住と隣接する。表土削平的に黒色土の落ち込みがあり H 7号住とする。埋土を堀り下げるに新旧2つのカマドが検出されたため、旧カマドをH 7号住、新カマドをH 9号住とした。規模・形状 5.3×4.9mの隅丸方形プラン、主軸方向は7号住、N 54° W、9号住はN 36° E 埋土 黒褐色砂質土の単層 床面・壁 床面は茶褐色砂礫土上に築かれているため砂礫の凹凸が目立ち極めて軟弱。9号住にともなう粘土の貼床らしき部分が住居址ほぼ中央部カマド寄りに残る。壁は砂礫層を堀り下げたことと耕作による破壊のためだいぶ崩れていたが、5~20cmの高さを計り立ち上がりは急角度である。カマド 7号住 石組み粘土カマドであるが破壊されほとんど残らない。煙道は痕跡残る。9号住 比較的残存状況は良好であり、石組み粘土カマドの両袖が残る。火床は真赤に焼けている。カマドの右側には平坦な敷石遺構がみられ、調理場としての利用が考えられる。柱穴 7号住 P₁、P₂、P₄、P₆の4本と思われる



第105図 H 7、9号住居址

れるが不整である。9号住 P₈、P₂、P₃、P₇の4本 遺物の出土状況 カマド周辺を中心に土師器、黒色土器の壊や椀、土師器甕などが出土している。遺物 7号住のものとして、黒色土器A 梗(27、28、29)黒色土器B 皿(30)があり、9号住のものとしては土師器壊A(31、32)がある。この他に図示できなかったが黒色土器A 梗や壊などの破片が多数出土している。時期 7号住 平安時代9世紀後半、9号住 平安時代11世紀後半

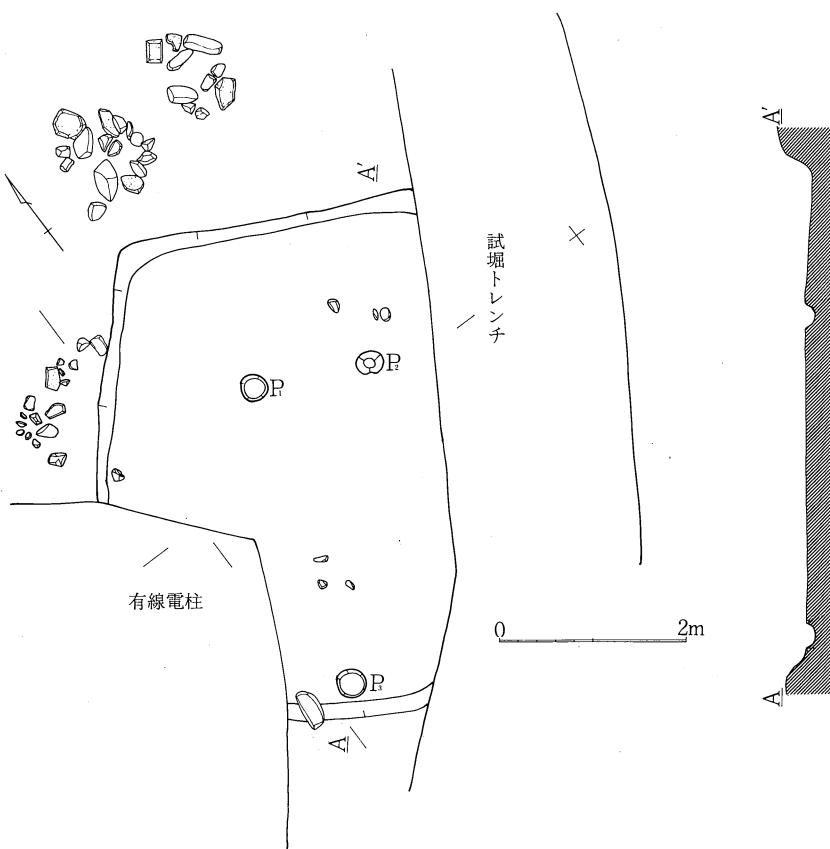


10m

第106図 H 7、9号住出土土器27~23 (1 : 4)

H 8号住（第107図）

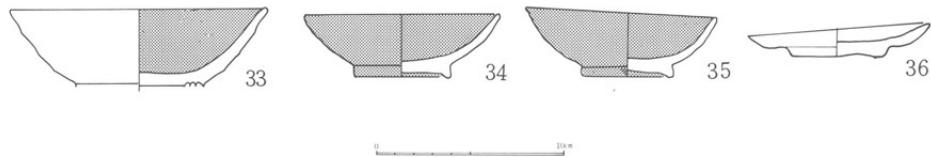
検出 E、F-6グリットにある。H 7号住のすぐ南側に位置している。西側の土層確認用のトレンチの断面に黒色土の落ち込みを認めたのでH 8号住とした。住居の東側3分の1をトレンチに切られ、南西の隅の4分の1近くは有線の電柱のため調査できなかった。規模・形状 5.4m × 4.5mの隅丸方形プランと思われる。主軸はカマドの位置がわからぬので不明だが、有線柱の下にカマドが予想されるので長軸方向を主軸と考えるとN 5° Eと考えられる。埋土 暗黒褐色土の单層 床面・壁 床は明茶褐色砂質土上に築かれる。土質のためか硬化面は確認できなかつたがわずかに粘土のブロックが見られた。壁の立ち上がりは急角度である。カマド 検出できなかつた。おそらく電柱の下の南西の隅に築かれていると考えられる。柱穴 P₁～P₃を検出した。もう1本は電柱の下と考える。遺物の出土状況 床面上に遺物が散在していた。特に集中した出土状況はない。遺物 黒色土器A碗(33) 黒色土器B碗2(34、35) 土師器皿(36)、砥石が出土したほか黑色土器、灰釉陶器片が出土している。時期 平安時代11世紀末



第107図 H 8号住居址



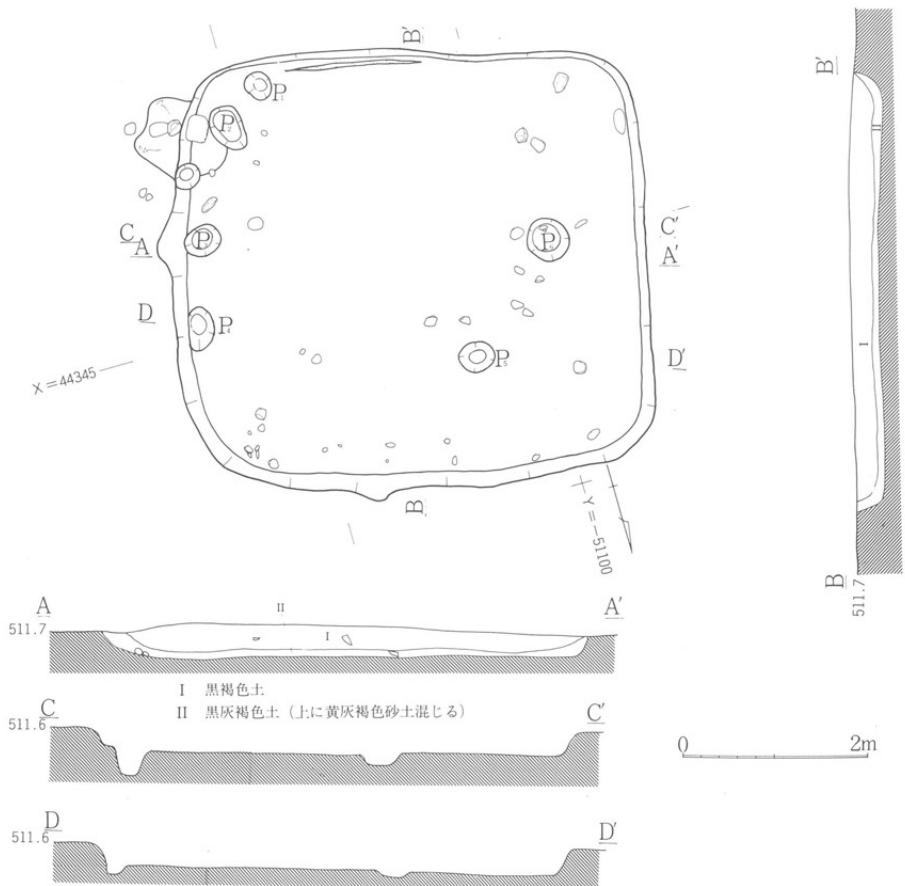
H 8号住居址



第108図 H 8号住出土土器33~36 (1:4)

H 10号住 (第109図)

検出 第2次調査区B、C-11グリットにありJ 51号住を切る。規模・形状 4.6m×5.1mの隅丸方形で、主軸はN72°W。埋土 2層に分層され、上層は黒褐色土、下層は地山の黄灰褐色砂土に上層の土が混じる。床面・壁 床は地山に築かれており、東側のカマド周辺は堅くしまっているが、北側は砂質土のため軟弱で判然としない。壁は20~30cmと残存状態は良く、垂直に近い急角度で立ち上がる。周溝は南壁に沿ってわずかに確認できるだけであり浅い。カマド 南東隅に設けられているが粘土と火床の焼土がわずかに確認できるだけである。柱穴 ピットは6ヶ所検出されたが、P₃とP₆以外は浅く、P₃、P₆の2本が主柱穴と思われる。遺物の出土状況 西壁沿いに黒色土器壺、灰釉陶器碗、鉄釘などが床面から出土している。カマド周辺からも土師器壺片が出土している。遺物 灰釉陶器碗(37)、黒色土器A碗(38)、黒色土器A壺(39)鉄製品として鉄釘 時期 平安時代末10世紀末

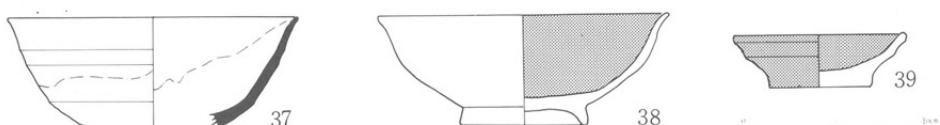


第109図 H10号住居址



H10号住居址

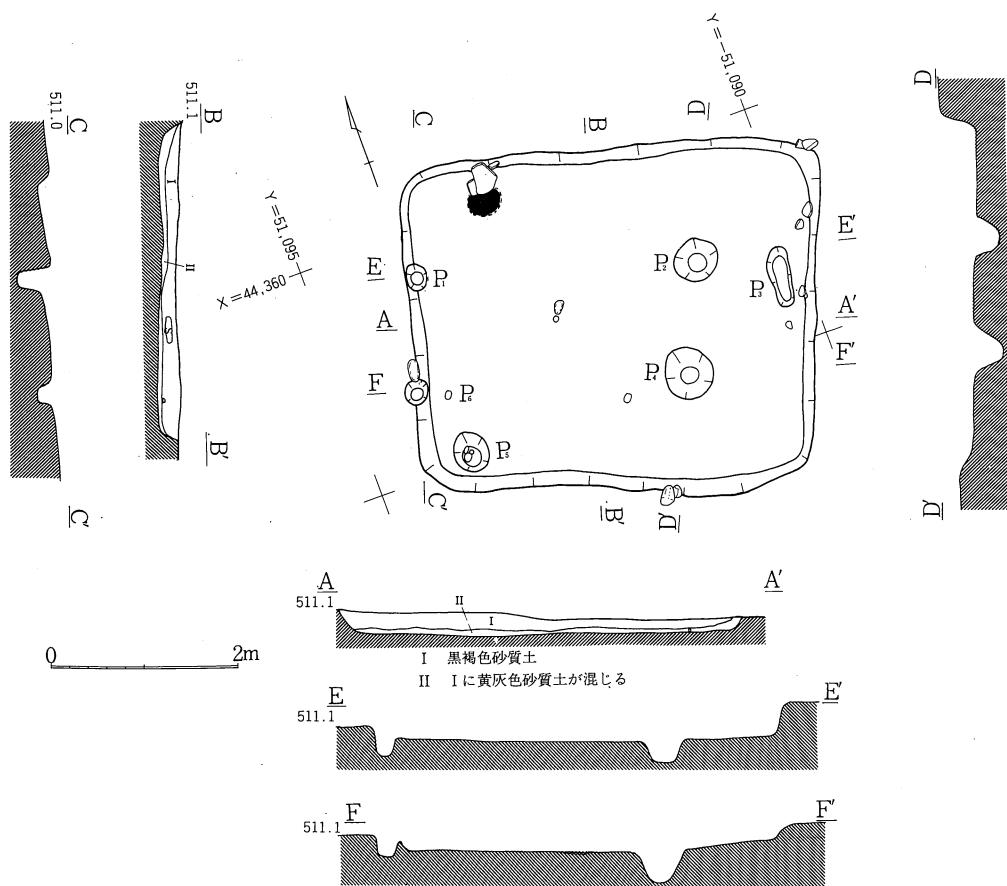
上右側がカマド



第110図 H10号住出土器37~39 (1 : 4)

H 11号住 (第111図)

検出 C、B-12、13グリットにまたがり、J 42号住、J 50号住を切る。規模・形状 3.5m × 4.2mの長方形プランで、主軸はN75° E 埋土 2層に分けられ、上層は黒褐色土、下層は上層に地山の黄灰色砂土が混じる。床面・壁 南側は砂礫層を堀り込んでいるためやや軟弱だが他は非常によくかたくしまる。壁は35~20cmと高く急角度で立ち上がる。カマド 北壁西隅に近い位置に設けられている。砂岩と焼土が若干残るのみで規模、形状は不明。柱穴 ピットは6ヶ所検出されているが、P₁、P₂、P₄、P₆の4本を柱穴としている。遺物の出土状況 床面から、鉄製紡水車、鎌、刀子、黑色土器、灰釉陶器壺などが出土している。遺物 黒色土器A壺(40)、土師器壺A(41)、灰釉陶器椀(42)図示しないが数個体分の黑色土器A椀紡水車、鎌 時期 平安時代11世紀後半



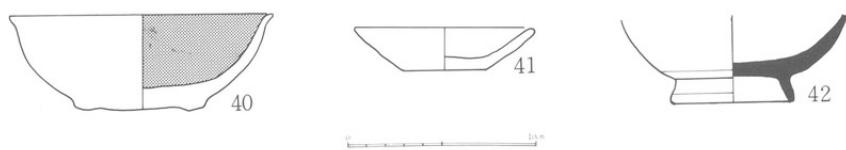
第111図 H 11号住址



H11号住居址



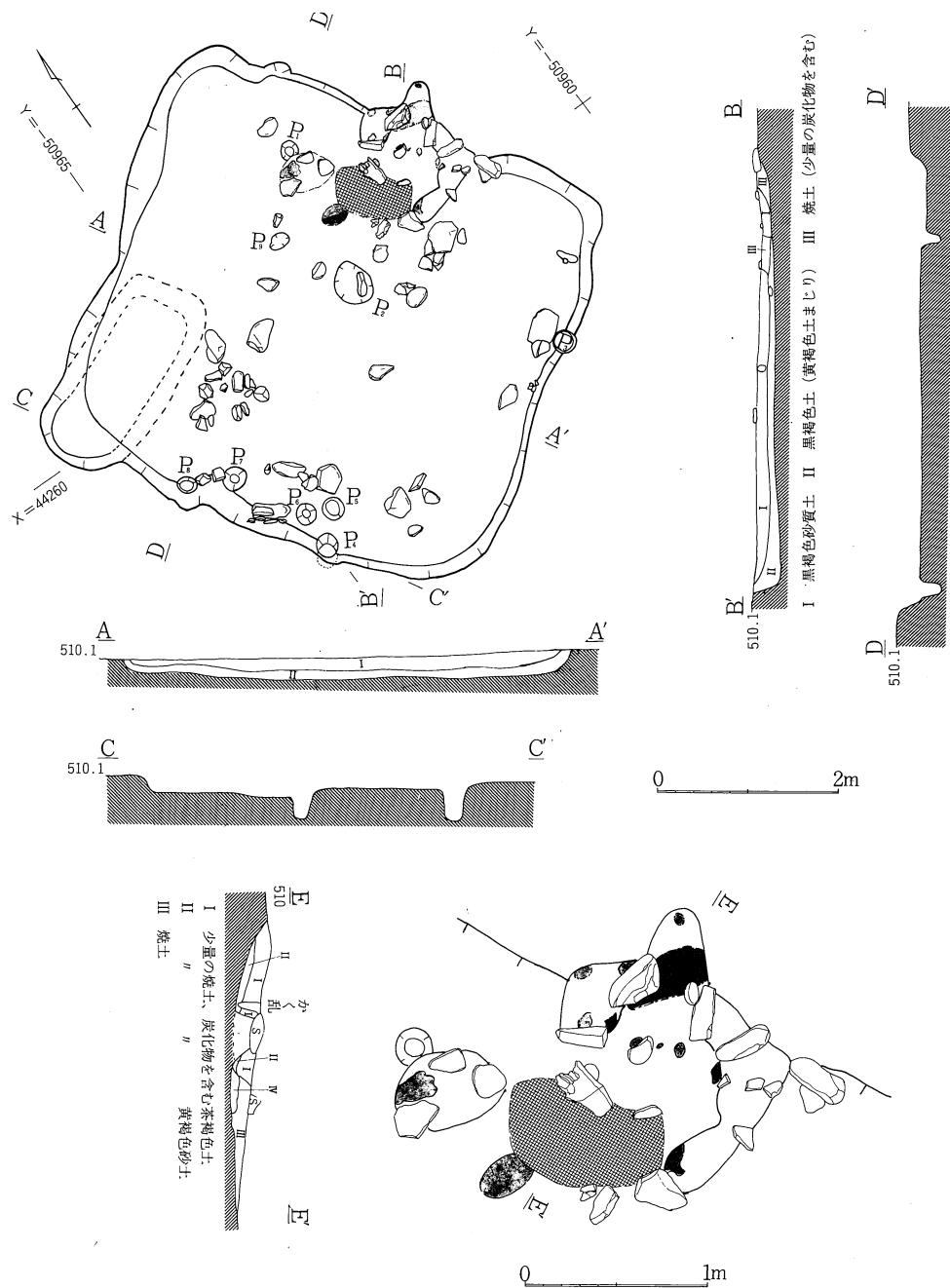
同 鉄製紡水車、鎌出土状況



第II2図 H11号住出土土器40~42 (1 : 4)

H12号住（第113図）

検出 R、S-12グリットにあり、表土削平中に明瞭に黒色の落ち込みを確認できた。南西に近接して溝状遺構がある。規模・形状 5.0m×4.8mの隅丸方形ではあるが、直線的な堀り込みではなくやや不整形である。南西隅には2.3m×1.1mのやや深い堀り込みがあり、その部分が張り出した形となっている。主軸はN63°E。埋土 2層に分層され、土層は黒褐色砂質土、下層



第113図 H12号住居址

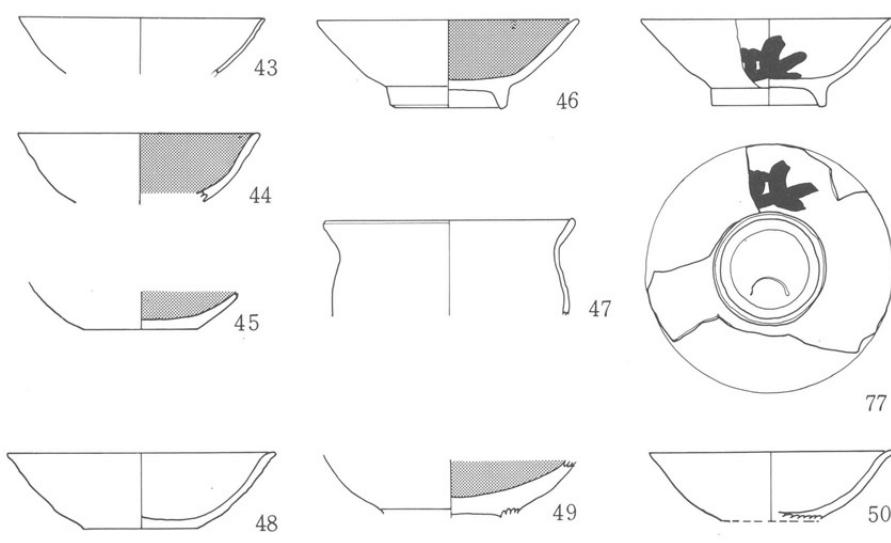
は地山の黄褐色土と上層が混じる。床面・壁　床は全体に平坦さに欠けややでこぼこがあるが、よくしまり良好である。壁は22~30cmと比較的深いが、立ち上がりはゆるやかである。カマド　北側中央部に設けられている。袖の粘土と石組が残り、周辺には灰や炭がかなり厚く見られた。柱穴　ピットは9ヶ所検出されている。主柱穴は判然としないが、P₄、P₈の2本とP₉（あるいはP₁）の3本に未検出のものがあると思われる。遺物の出土状況　比較的に多くの遺物が残されていた。カマドの周辺に多く、土師器壊、小形甕、灰釉陶器壊などが見られ、南西落ち込み付近からは、鉄製品や壊などが検出されている。遺物　土師器壊(43)、黒色土器A壊(44)、黒色土器A壊(45)、墨書きのある土師器碗(77)、黒色土器A碗(46)、土師器小形甕(47)、鉄製品、作業台、転用硯、この他に図示しないが土師器甕、黒色土器A壊などが出土している。また溝状遺構からの出土品として黒色土器A碗(48)、皿B(49)、土師器碗(50)などある。時期　住居址溝状遺構住居址とともに平安時代中期9世紀後半



H12号住居址



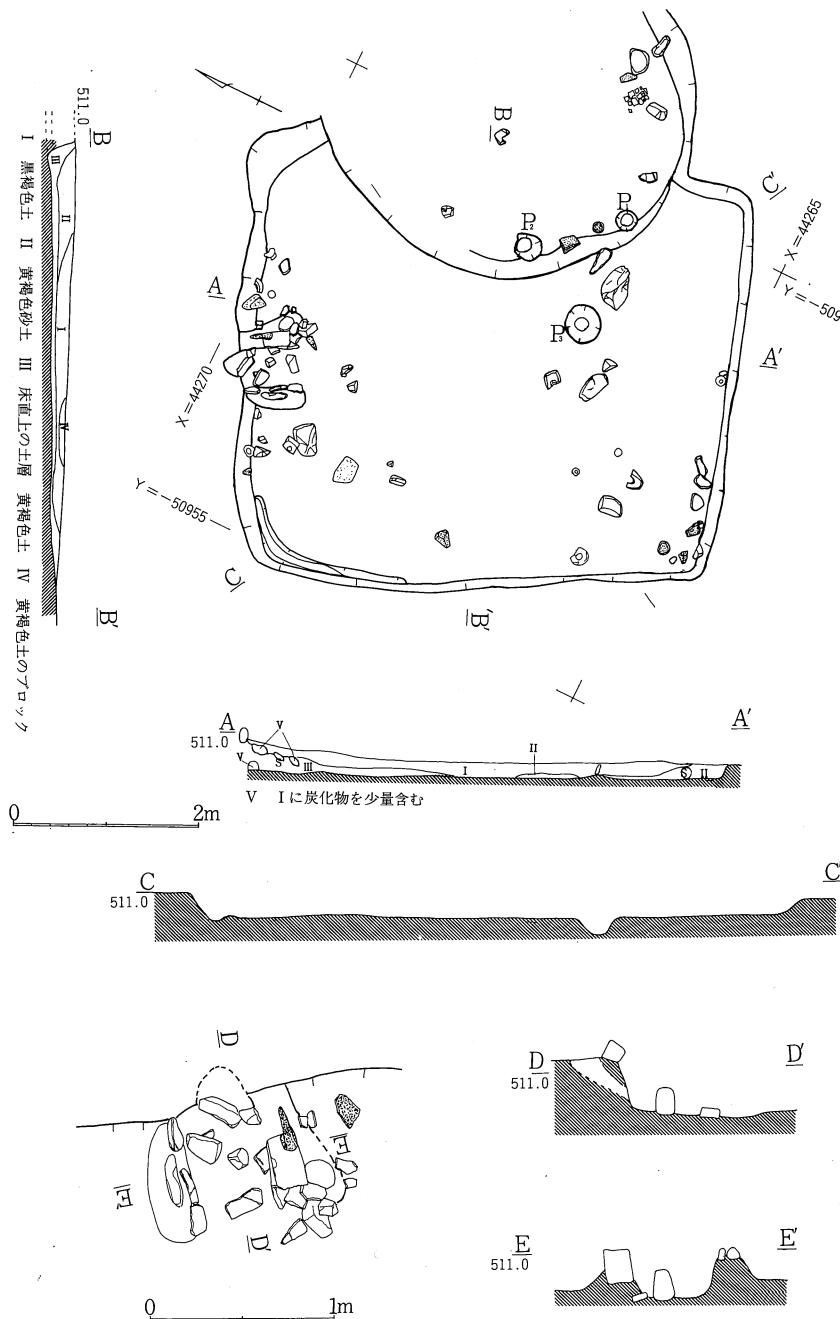
同　カマド



第114図　H12号住出土土器44~50、77 (1 : 4)

H13号住（第115図）

検出 S-13、14グリットにある。表土削平時に5m四方ほどの黒色土の落ち込みがありH13号住とし、東側へ径4mほどの張り出しがみられた。この張り出しからは弥生後期の土器がみられたのでY1号住とした。規模・形状 5.5m×4.8の隅丸長方形でやや南東の隅が張り出す。主軸はN30°W 埋土 5層に分層できるが、自然な埋設状況を示している。床面・壁 床は地山



第115図 H13号住居址

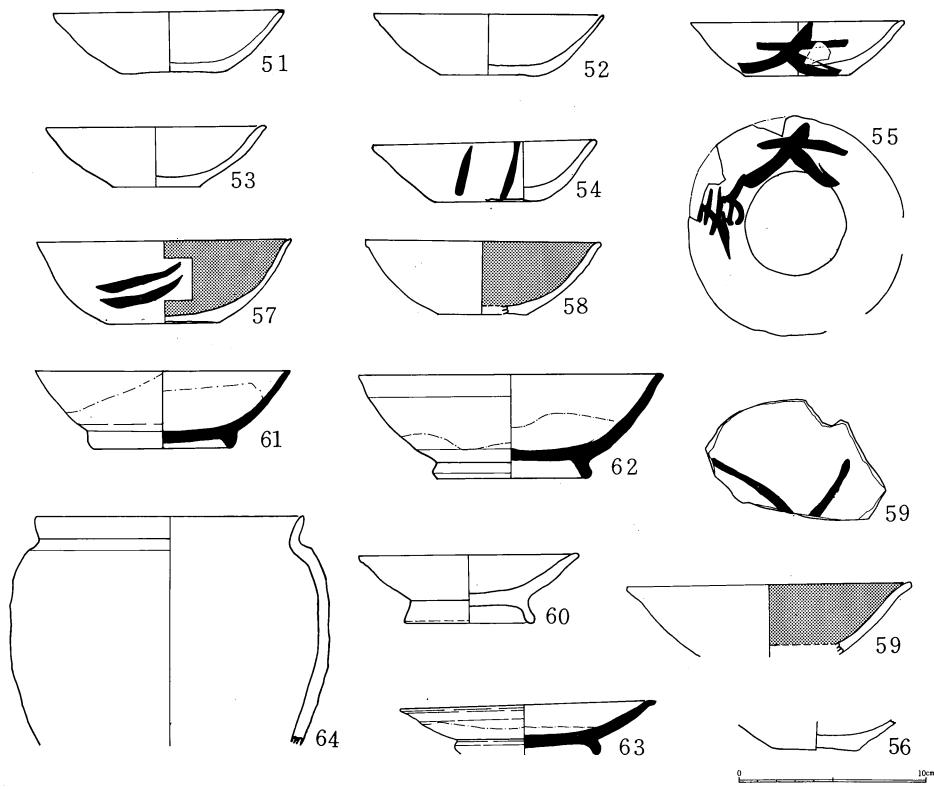
の黄褐色砂礫土上に築かれているためあまり良好とはいえないが、カマド周辺にはよく踏み固められた床面が残っている。壁は西側が削平されてはいるが、10~40cmと比較的よく残っている。周溝はカマドから壁沿いに西へ2mほどごく浅い溝が検出された。カマド 北壁ほぼ中央に築かれており比較的残存状態はよい。石組みのカマドで、両袖の粘土、石、支脚石もよく残り、煙道も確認できた。柱穴 ピットが1ヶ所見つかっているが特定できない。遺物の出土状況 カマド周辺を中心に住居北内全域で多くの土器類が検出されている。土師器壊、黒色土器碗、灰釉碗、小形甕など個体数で約30点ほどを数える。遺物 土師器壊A(51、52、53、54、55、56)黒色土器A壊(57、58、59)土師器盤B(60)灰釉陶器碗(61、62)灰釉陶器皿(63)土師器小形甕(64)図示しない破片が多数ある。なお、55には「大春」54には「//」57には「=」の墨書があり59には刻書がある。時期 平安時代10世紀前期



H13号住居址 上はY1号住居址



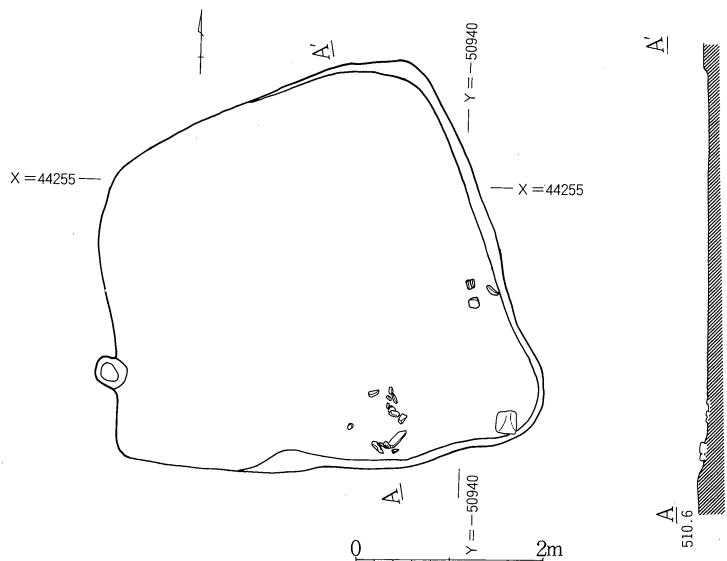
同址 カマド及びカマド周辺の遺物出土状況



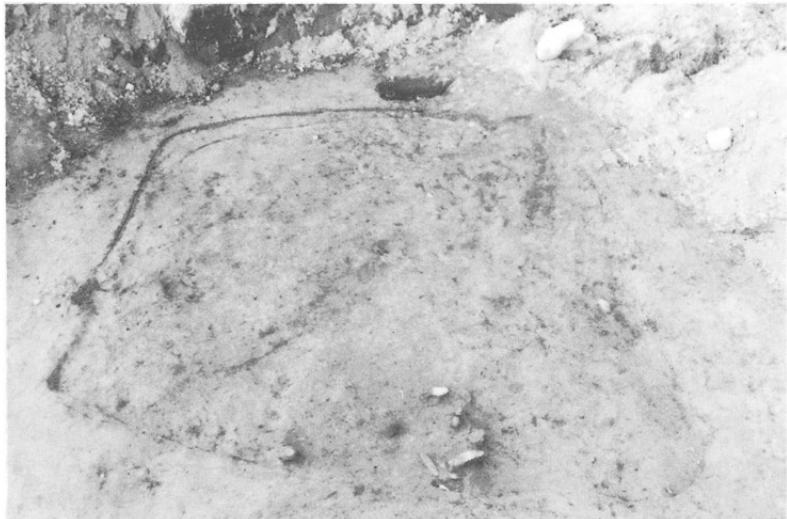
第116図 H13号住出土土器51～64 (1 : 4)

H14号住 (第117図)

検出 U-13グリットにあり、表土削平時に若干の土師器片がみられたため、周辺を精査したところ床面が検出されたのでH14号住とした。規模・形状 4.3×4.5mの隅丸方形であると思わ



第117図 H14号住居址



H14号住居址



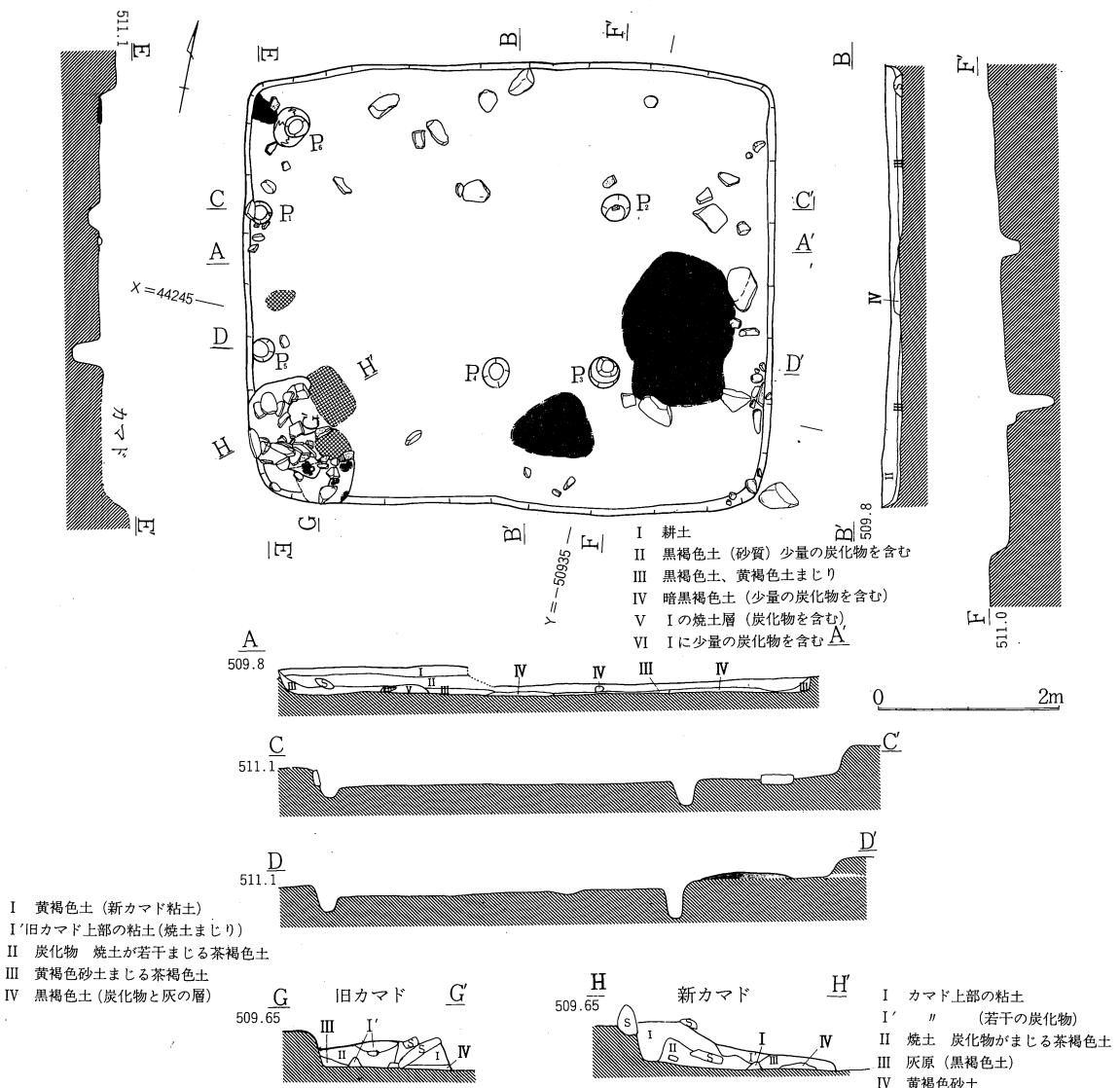
同 カマド わずかに石が残る。

れるが削平され判然とない。主軸はN20°W 埋土 不明 床面・壁 床面は全体に良く堅くしまり極めて良好である。壁は削平によりほとんど残っていない。カマド 東壁の中央にわずかに痕跡が残る。柱穴 なし 遺物の出土状況 床面から土師器甕、須恵器片、鉄鎌が出土している。遺物 図示できないが須恵器甕胴部破片2、土師器坏A破片、鉄鎌 時期 平安時代11世紀後半

H15号住（第118図）

検出 U、V-12、13グリットにあり、今回の調査区では最も東に位置する。規模・形状 4.9m×5.8mの隅丸長方形。主軸はN75°E 埋土 3層に分層できるが住居廃絶後の堆積は自然堆積である。床面・壁 床は地山の黄褐色砂質土上に築かれているが、住居址全体によく固められ極めて良好であり、長期間の住居の使用をうかがわせる。住居址の東側には1.5×1.3mと径0.8mほどの大きさで焼土が2ヶ所みられた。壁は20cm前後の高さで垂直に近い急角度で立ち上がる。

カマド カマドは西南の隅に2ヶ所検出された。古い方は南壁の西隅に新しい方は西壁の南隅に築かれている。残存状態は良好で新旧いずれのカマドも袖の粘土石組みとともに残っている。煙道は検出されていない。柱穴 ピットは6ヶ所あるが、P₁、P₂、P₃、P₅の4本が主柱穴と考えら



第118図 H15号住居址

れる。遺物の出土状況 東側の焼土付近から北側にかけて床面に刀子や釘などの鉄製品や鉄片などが39点検出され、焼土のまわりに作業台が4つ置かれていた。野鍛冶の住居と考えられる。遺物 鉄製品39点、黒色土器A坏(65、66、67)灰釉陶器皿(68)、土師器坏A(69)土師器鍋把手(70)この他に図示しないが、黒色土器A坏、椀がある。時期 平安時代9世紀後半（旧カマド）11世紀後半（新カマド）



H15号住居址
右側の山になっているのが焼土のブロック



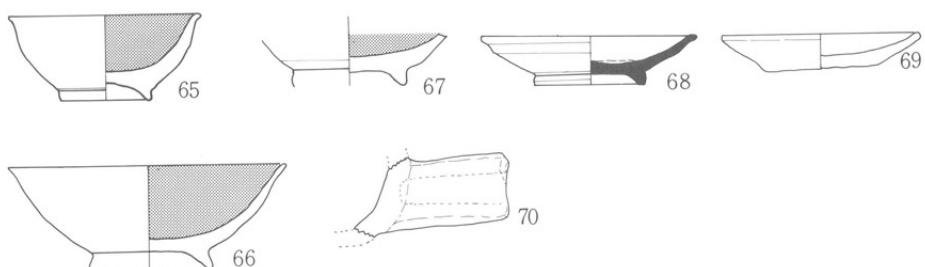
同 焼土ブロック



H15号住居址 挖り上り



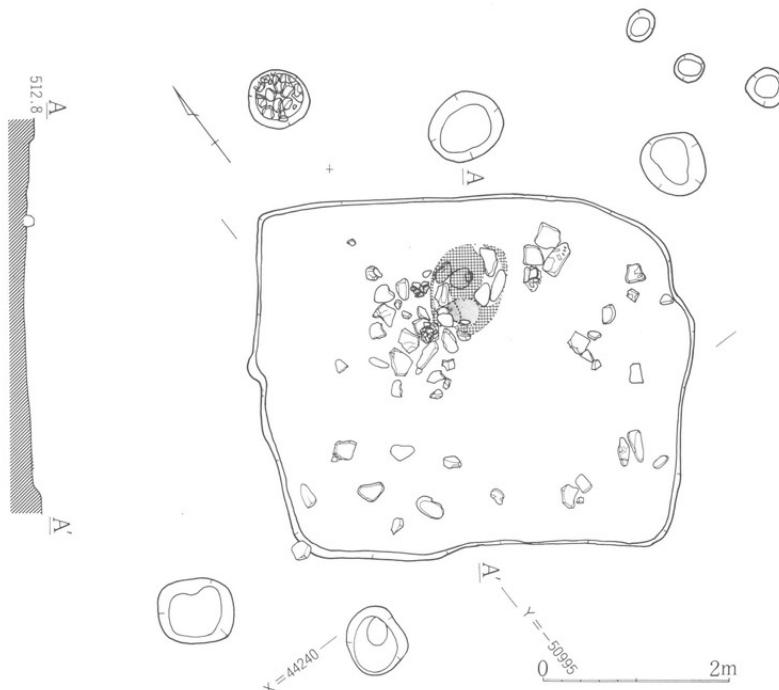
同址 カマド 右新、左旧



第119図 H15号住出土土器65~70 (1 : 4)

H16号住（第120図）

検出 Q-9 グリットにあり、建物址1号の中に入る。当初建物址に付随するものと考えたがカマドがあり、遺物からも平安期の住居と考えH16号住とした。規模・形状 3.7m×4.5mのやや不整の長方形、主軸はN36°E。埋土 暗茶褐色土の単層 床面・壁 床面は地山の黄褐色砂質土上に築かれておりカマド付近以外は判然としない。壁は表土削平時に削られ5~13cm残るだけである。カマド 住居のほぼ中央北壁寄りに築かれているが、石組みのみが残る。50cm×70cmの長方形と思われ、煙道は見られない。柱穴 検出されない。遺物の出土状況 カマドを中心に敷石が見られ、敷石上に土師器長胴甕、土師器壺、黒色土器A壺などが検出された。遺物 土師器長胴甕(71)図示できないが土師器壺A、黒色土器A壺がある。時期 平安時代9世紀後半



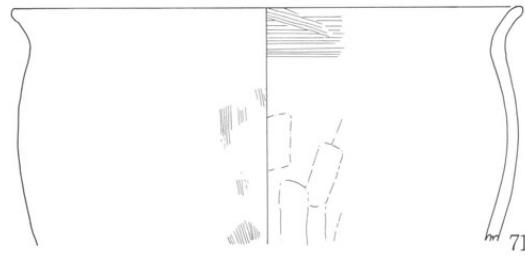
第120図 H16号住居址



H16号住 上の柱穴列は
中近世1号建物址



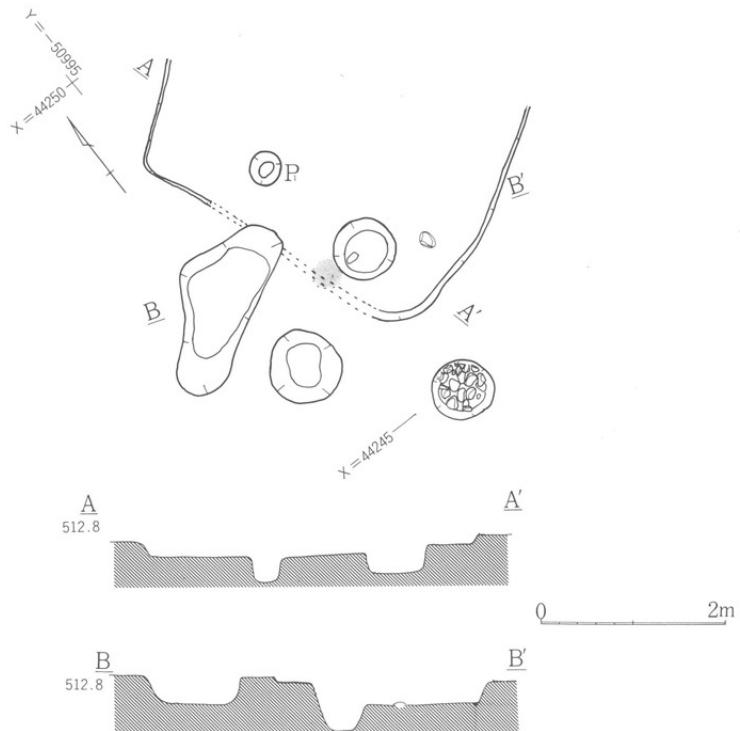
H16号住 カマド 支脚石がよく残っている。



第121図 H16号住出土土師器甕71

H17号住（第122図）

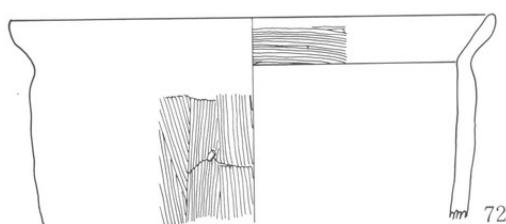
検出 Q-9 グリットにある。建物址 2 号検出中に床面と焼土及び土師器甕を検出。平安時代の住居と考え H18号住とした。東側半分は搅乱により検出できない。規模・形状 3.8×? の方形プランと思われるが東側は搅乱により検出不可能。埋土 暗茶褐色土の単層 床面・壁 床は地山の黄褐色砂礫土上に築かれ、粘土の貼床が全面に残るが、部分的に地山が出ている。壁は削平されわずかに残るだけである。カマド 西壁中央よりやや南寄りに築かれているがわずかに焼土が残るのみである。柱穴 ピットは 1ヶ所検出されたが柱穴とは断定できない。遺物の出土状況 カマド周辺に土師器長胴甕、黒色土器A 壱片、須恵器甕片などが検出された。遺物 土師器長胴甕(72)図示できないが黒色土器A 壱、土師器壺Aなどの破片がある。時期 平安時代 9世紀後半



第122図 H17号住居址



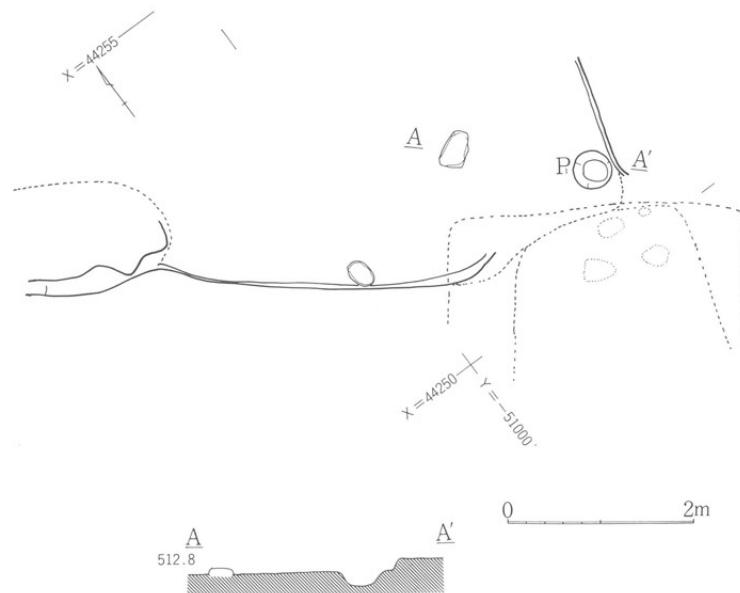
H17号住居址 手前側は搅乱



第123図 H17号住出土土師器甕72 (1 : 4)

H18号住（第124図）

検出 D-9、10グリットにあり、建物址2号検出時に焼土や炭化物の見られる落ち込みがあり、住居址と判断しH18号住とする。建物址2号に大部分を切られる。規模・形状 方形プランと思われる。埋土 全体に焼土や炭化物がうすく堆積している。床面・壁 床は地山の黄褐色砂礫土上に築かれ部分的に粘土の貼床がみられる。壁は搅乱が著しくわずかに残るだけである。カマド 検出されない。柱穴 P₁があるが柱穴となるかは不明 遺物の出土状況 床面より土師器壊か椀の破片、住居中央南よりに作業台が検出された。遺物 図示できないが土師器壊A破片、作業台がある。時期 平安時代11世紀後半



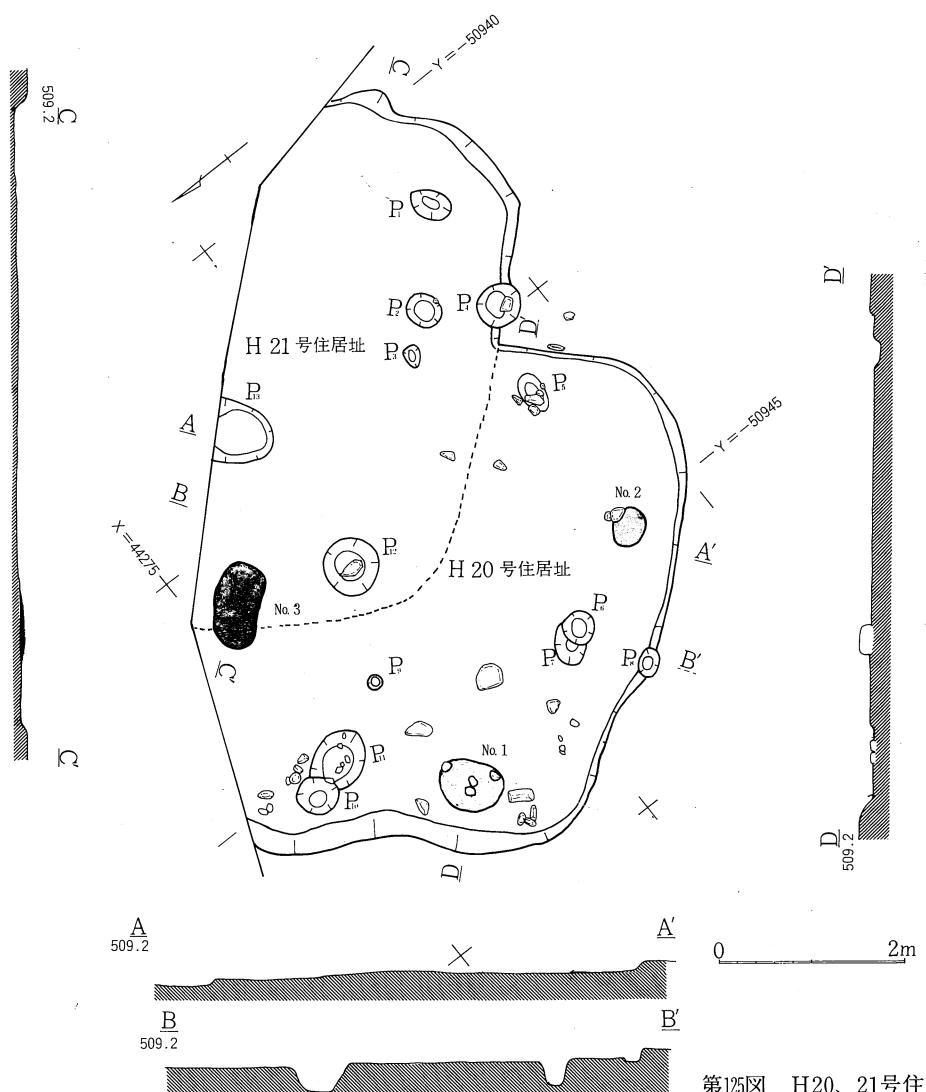
第124図 H18号住居址



H18号住居址
柱穴列は中近世2号建物址

H20、21号住（第125図）

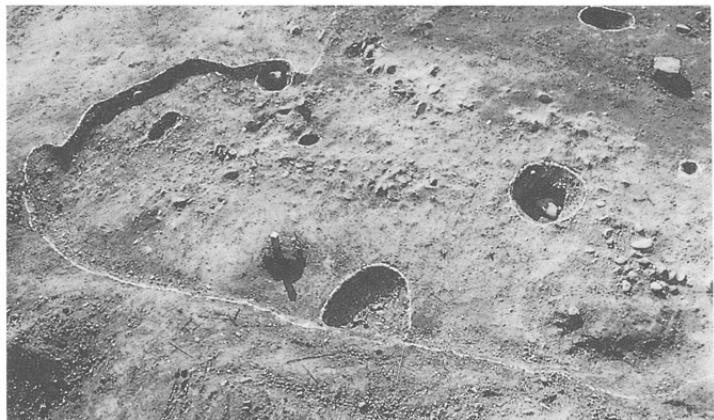
検出 ST-14、15グリットにあり、北側はすぐに犀川の段丘崖となっている。表土削平時に黒色土器が出土したため精査したところ焼土とわずかな落ち込みがあり住居址と判断し、H20号住とした。床面からプランを追ったところ、さらに北に落ち込みがつづき別に焼土も検出されたことからこれをH21号住とした。H20号住には2ヶ所の焼土がみられるので、建替えや別の住居の可能性も考えられるがほとんどが耕作による搅乱で判然としない。規模・形状 H20住、H21号住ともほぼ同規模で5.5m×5mほどの不整な方形プランと思われる。主軸はH20号住は焼土No.1でN42°W、No.2でS50°W、H21号はN45°W 埋土 黒茶褐色土の单層 床面・壁 耕作による搅乱を受けておりH20号住に部分的に堅い床面が残るのみであり、H21号住は地山の砂礫層が出ている。壁もわずか10cmほどが残るのみである。カマド H20号住には、西壁の南隅近



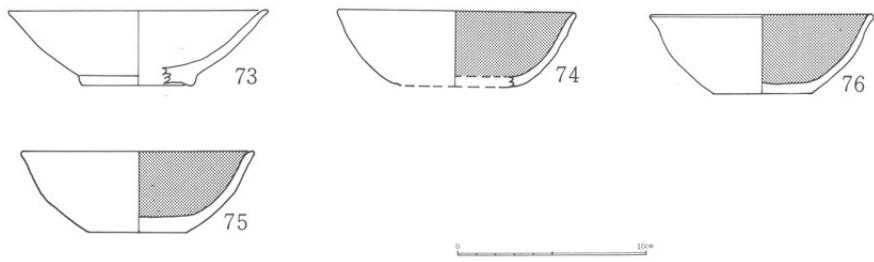
第125図 H20、21号住居址



H20号住居址 左側はH21号住居址



H21号住居址



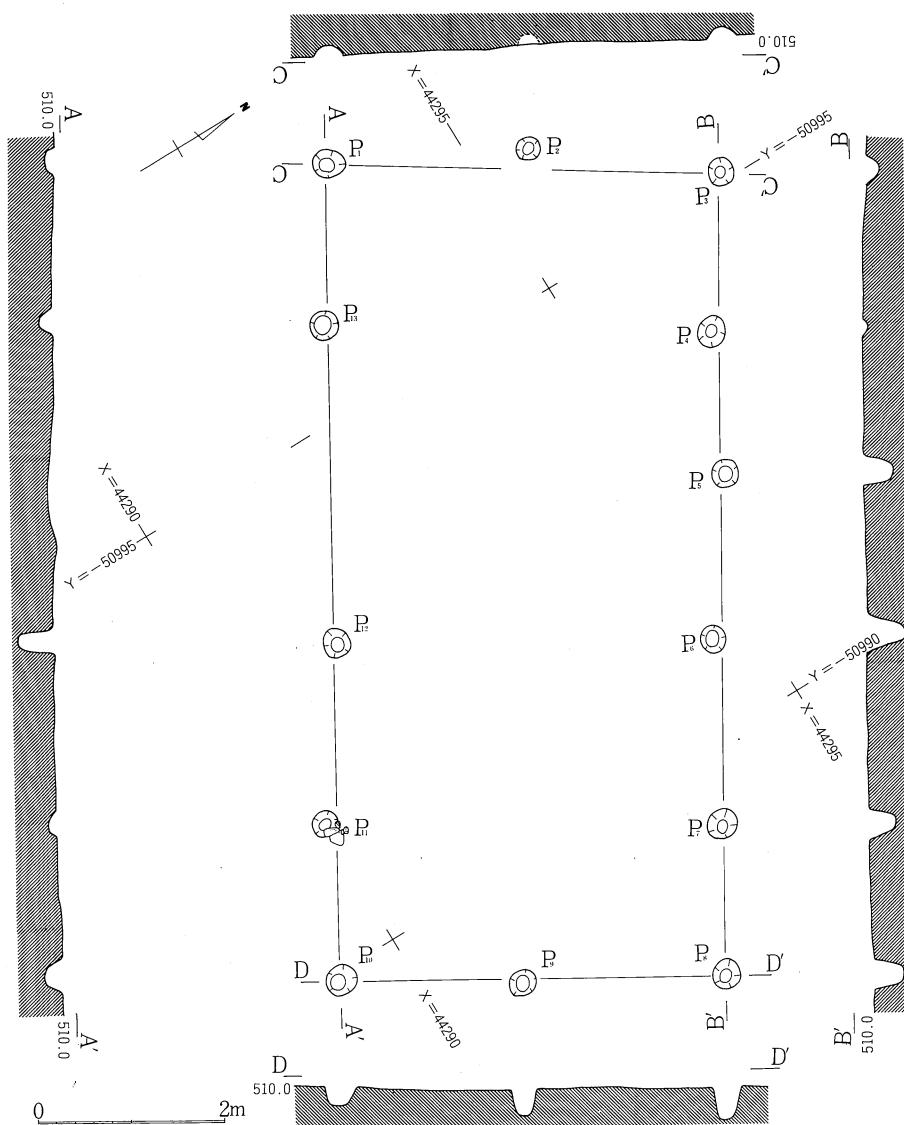
第126図 H20、21号住出土土器73~76 (1 : 4)

くを南壁の東壁寄りの2ヶ所に焼土が残っている。H21号住は西壁のほぼ中央に焼土が残る。柱穴 ピットが数ヶ所検出されるも柱穴とは断定できない。遺物の出土状況 H20号住のNo.2 焼土付近から黒色土器A壺などが出土している。遺物 土師器碗(73) 黒色土器A壺3(74、75、76)図示しないが、灰釉陶器碗、黒色土器壺などの破片が出土している。時期 焼土No.2付近出土土器がら平安時代9世紀後半、最も新しいNo.3焼土が平安時代11世紀後半

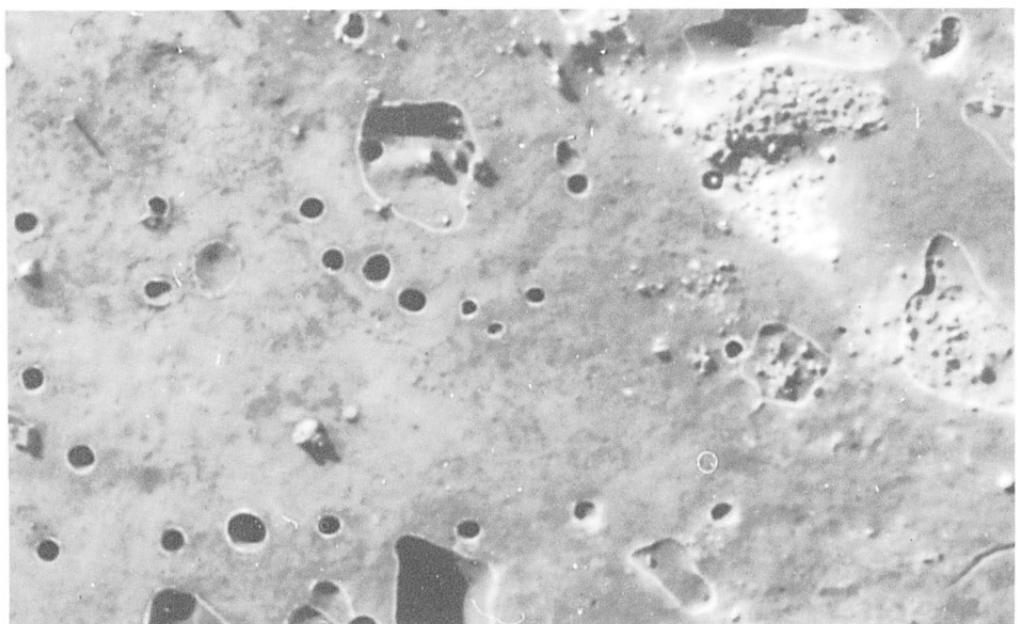
(2) 建物址

掘立建物址（第127図）

検出 第2次調査でN、O-13グリットから検出された。調査時点では2間×2間の建物址として把握していたが、整理段階で航空写真等で検出した結果、さらに西側に3間ほど遺構が延長することがわかった。規模・形状 直径30cm前後、深さは10~40cm程の柱穴13本によって構築されたと思われ、東西8.6m、南北4.1mの5間×2間の長方形の掘立柱建物址である。柱穴は南側の中央部の一本を欠くが、縄文時代の土壌が予想される柱穴位置にあるため検出できなかった可能性もある。遺物の出土状況 P₈から土師器の長胴甕の口縁部の破片が出土しているのみで他にはない。時期 P₈出土の土師器小片を目安に平安時代9世紀後半



第127図 平安時代掘立建物址



平安時代掘立建物址

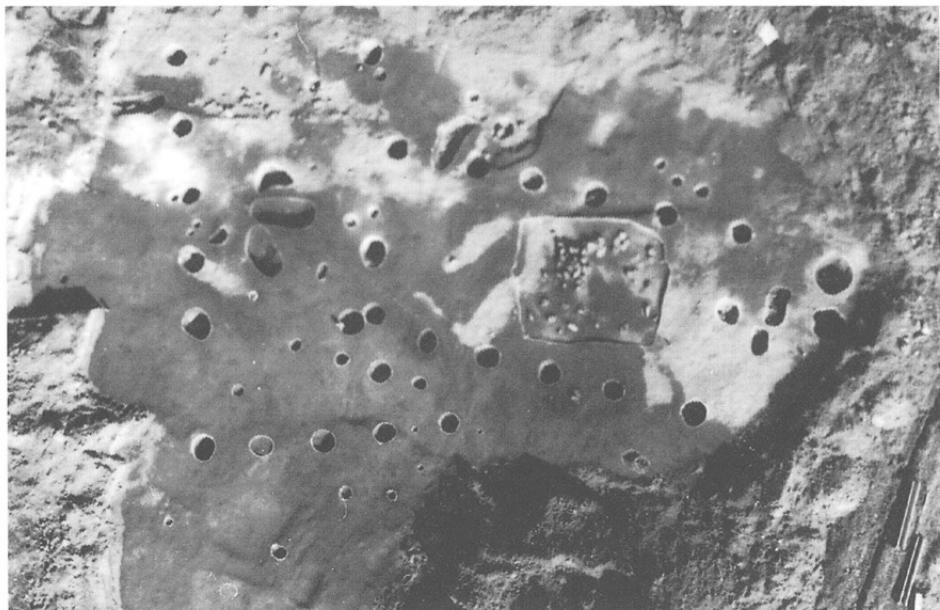
第5節 中近世の遺構と遺物

建物址

掘立建物址が2棟ある。第2次調査区第IV地区にあり、P、Q、R-8、9グリットにあたる。表土削平時に径70cmくらいの柱穴が並ぶのを確認し、中、近世の堀建物址とし長軸が東南→北西にあるのを1号、南北方向に長軸があるのを2号とした。

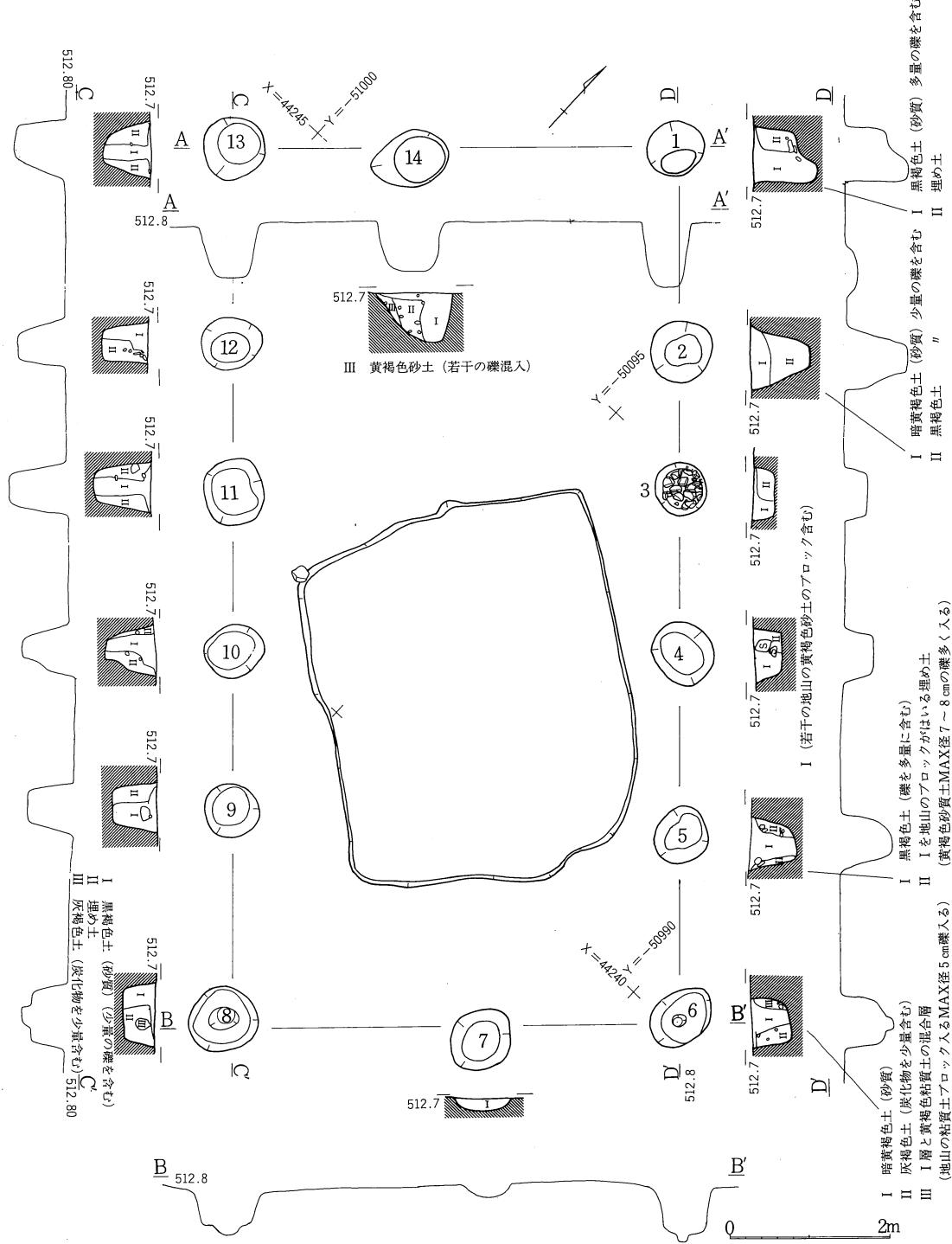
1号建物址

3間×5間の建物址で、2.0m～1.8mの間隔で長方形に14本の柱が並ぶ。中央やや東よりにH16号住居址が入る。主軸はN45°W。柱間寸法は梁間5.5m、桁行10.5mで、桁行が梁間の約2倍となっている。柱穴はすべてほぼ円形で径70cmほどと大きく、地山の黄褐色砂礫層へ深さ30～70cmほど堀り込んでいる。柱痕14本中11本に見られ、裏込め石も見られた。遺物は、P₂からハケ目についていた土師器の甕の破片が出土しているが、これはP₂と切り合うH17号住のものと考える。

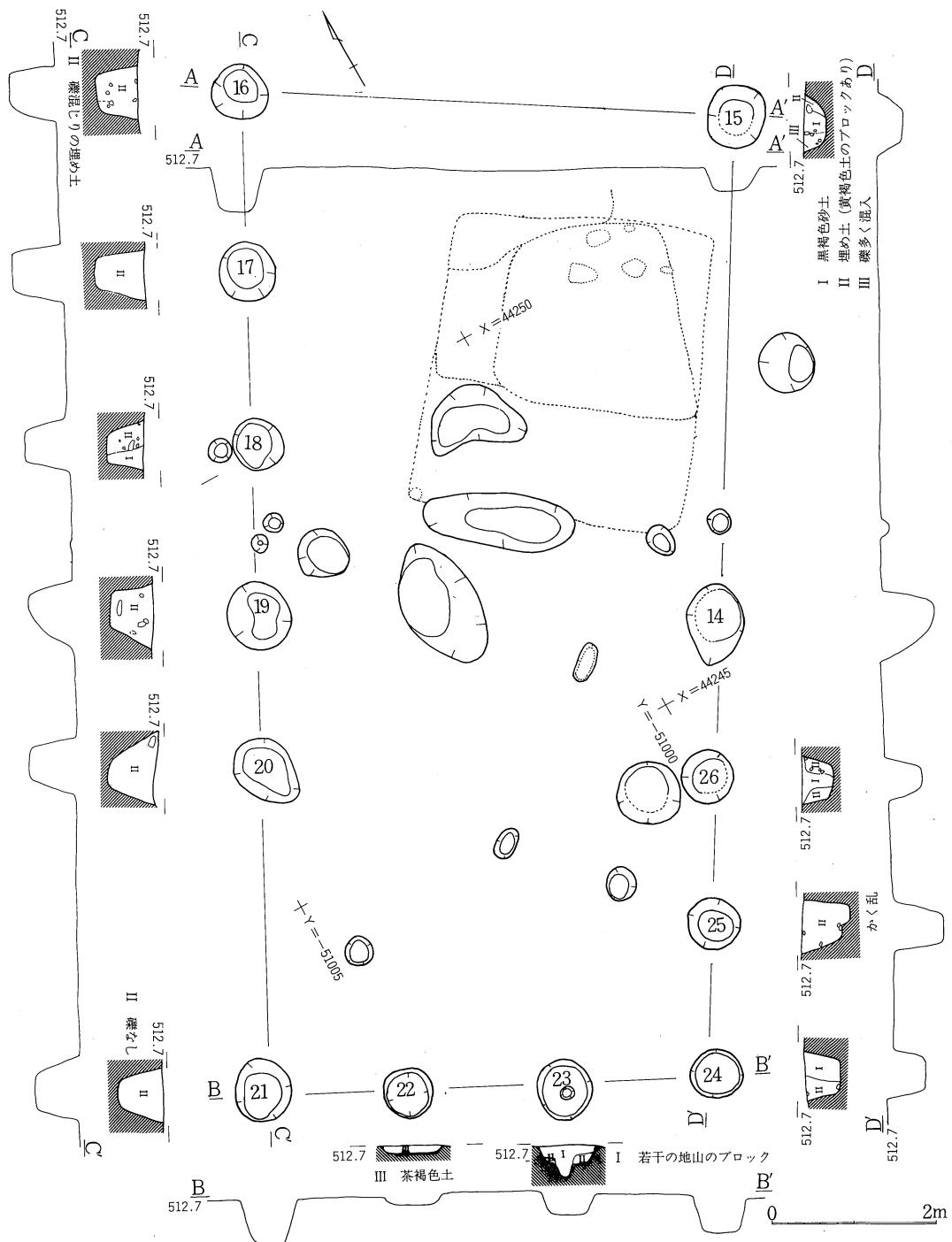


右側左右方向が1号建物址、中央にH16号住がある。

左側上下に長く2号建物址、中央に縄文時代の土壙がある。



第128図 中近世1号建物址



第129図 中近世2号建物址



1号建物址（西方から）



1号建物址（南方から）



1号建物址 P₁₃ 断面、柱痕がよく観察される。

2号建物址

北側は搅乱で検出しきれていないが、ほぼ6間×4間の建物址と考えられる。西側に6本、東側は5本の柱が確認できる。このうち東側のP₁₄は1号址と共用する。南側は柱が4本並ぶが北側は確認されていないのでさらに大形の建物址の可能性もある。柱間寸法は梁間5.5目、桁行12目を計る。柱穴は1号建物址と同様に径70cmほどの円形で、深さも同様である。柱間はかなり不規則で1.8m～6mとかなりまばらである。P₁₄とP₁₅にかけて中央やや東よりに土間らしい3.6×3.2mの長方形の貼床の硬化面がある。北側にはH18号住の貼床も見られたのでこれとの関係を追及したが、この硬化面は建物址に付属するものと考えたい。遺物はP₁₉より土師質のほうろく片が出土している。

これら2棟の建物址の時期であるが、建物址中よりは特定できる遺物の出土はなく、決め手に欠くが、1号址東側には4か所の肥だめと思われる粘土貼りの土壙が検出され、中から18C以後の陶器片が出土しているが、建物址との関係は明らかではない。一応柱穴の形態から中世の可能性もあるが、時期の決定は困難である。



2号建物址（北方から）



近世肥だめ

第6節 その他の遺物

土製品

1、土偶

総数67点を数え、縄文時代中期に属するもの13点、同後期52点、弥生時代の有髪土偶2点の出土をみた。中期の土偶は、土器捨て場を中心に出土し、後期のものは配石面より出土している。

中期の土偶は、いわゆる出尻土偶とよばれるものであり中期後葉に位置づけられるものである。後期のものは、西日本で消化器土偶といわれ、口から股にかけて貫通孔が達するもの、北関東や東北地方に類例が見い出されるものもあり興味深い。主としては、堀之内式期に該当してくるものであろう。

2、ミニチュア土器

21点出土。粗雑な作りのものが多く、余った粘土を少し凹めただけのものも2点ある。乾きはじめた時に作ったのか亀裂を生じ、円側には爪の跡が明確に残っている。2点は近い位置から出土しており同一人物が同時期に作ったと想像できる。しかしながらには精製品もあり一対の貫通孔が穿たれ、ひもで吊るして使用されたのではないかと思える。

また作りは粗雑であるが、円面がオレンジ色を呈したものがあり、赤色顔料をといたのではないかと思われるものも出土している。

3、顔面把手、人面付土器

それぞれ一点ずつ出土している。顔面把手は胎土も精選され焼成も大変良い。ともに井戸尻式期に該当すると思われる。

4、土製スプーン

4点出土。匙部の縁を若干欠くが、ほぼ完形のもの2点、他の2点も3分の2程度残存しており、4点ともつまみ部の形態が異なる。興味深い好資料が提供されたと言えよう。

5、土笛

4点出土。うち土鈴を兼ねるものが一点ある。それぞれ精巧に作られている。土鈴については孔が2孔穿たれ、ヒモを通して吊るしたとも考えられるが、1孔を指でふさぐことによって音を発するので土笛兼用ではないかと考えた。

6、獣面把手、動物形土製品

トリを表現したと思われる後期に属するものが2点出土。また、中空の動物形土製品が出土している。サルと思われるが、類例が見当たらない。顔はハート型で、目、口は、中空部に貫通する。頸部後方にも貫通孔がある。耳は粘土塊を貼付し、そこを刺突して表現している。鼻は2本の沈線によっている。

7、その他

有孔球状土製品 2 点、スタンプ型土製品 1 点が出土している。スタンプ型土製品は大町市一津遺跡にも類例がある。板状土製品は、現厚 5 cm と測り、表面はよく磨かれている。器台とも考えられるが、平面形が方形であるため、板状土製品とした。また耳飾が 4 点出土している。三角墳状土製品は、側面に貫通孔が穿たれており、3 分の 2 程度欠損している。



土偶の頭及び胴部。
ほとんどは縄文後期
の山形土偶か？ 下
段中央は弥生時代の
有髪土偶



土偶の頭及び胴部。
下段左は消化器土偶
と呼ばれるもの

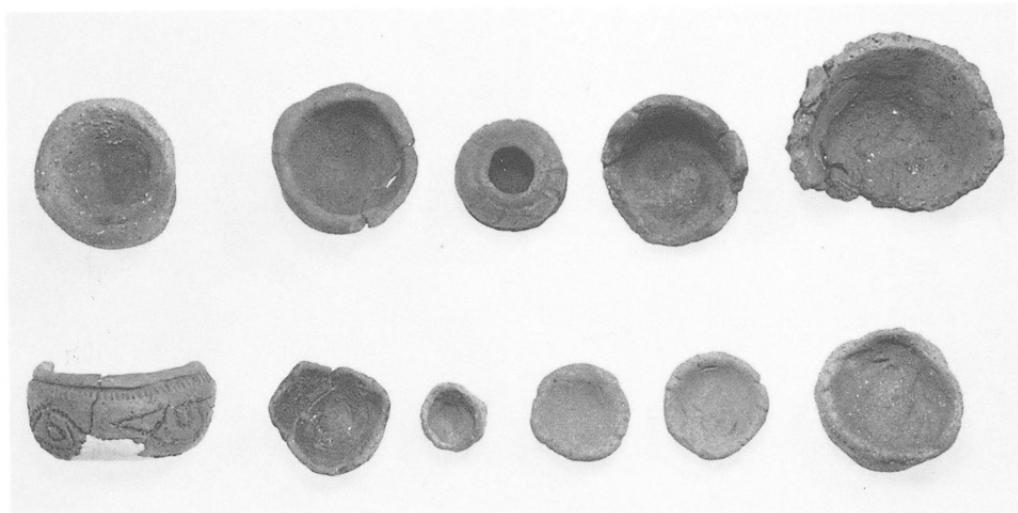


中土偶の脚、手、胴部 上段左から2つ目が手
下土偶の胴と脚



大型土偶の脚。右側は現高が10.5cmあり、全高は30cmを超えるかという大きなもの

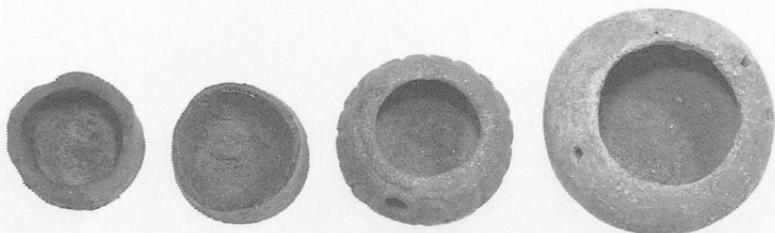
さまざまな脚部。下段左端は手。上段左端は指もよくわかる



ミニチュア土器。上段中央は土笛としてもよい。吹くと非常に甲高い音がする。

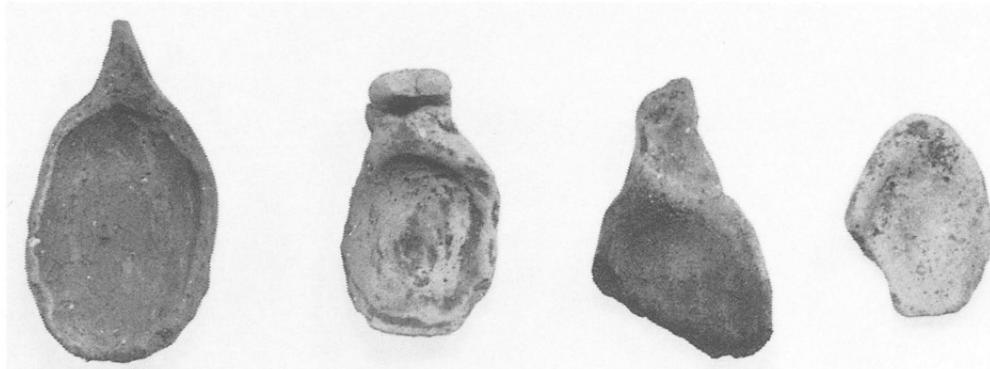
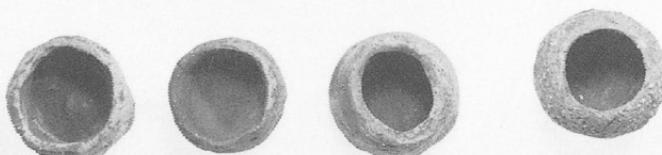
上ミニチュア土器。

上段右端には把手
か吊しのための穴
が2ヶ所ある。上
段右から2番目は
注口土器

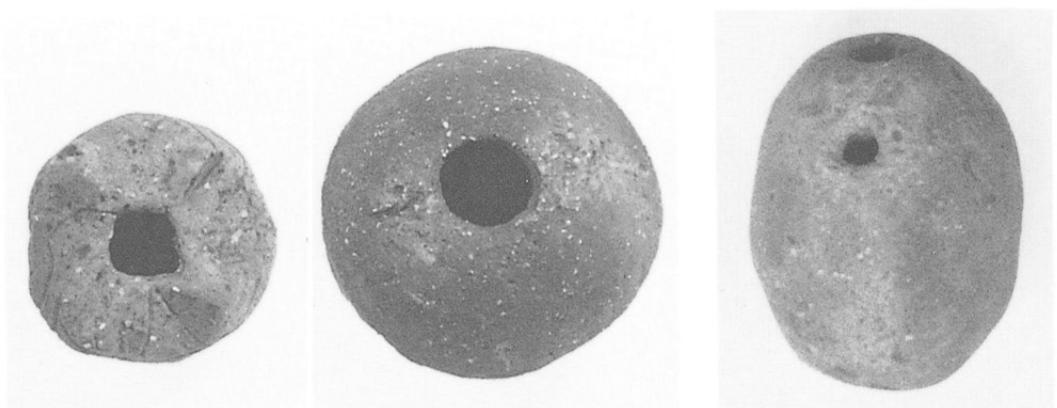


中左顔面把手。把手
は内側を向く。焼
成は極めて良好で
ある

中右人面付土器。顔
面の左側を欠く。
焼成は良好、顔面
把手と同時期か？



土製スプーン。4つとも少しずつ形態が違う。左側の2つはほぼ完形。



土笛。いずれも小型の良品、焼成も良好。左側は非常に高い音。中央はキジの鳴き声のような比較的高い音が出る。右側はフクロウのような低い音がする。

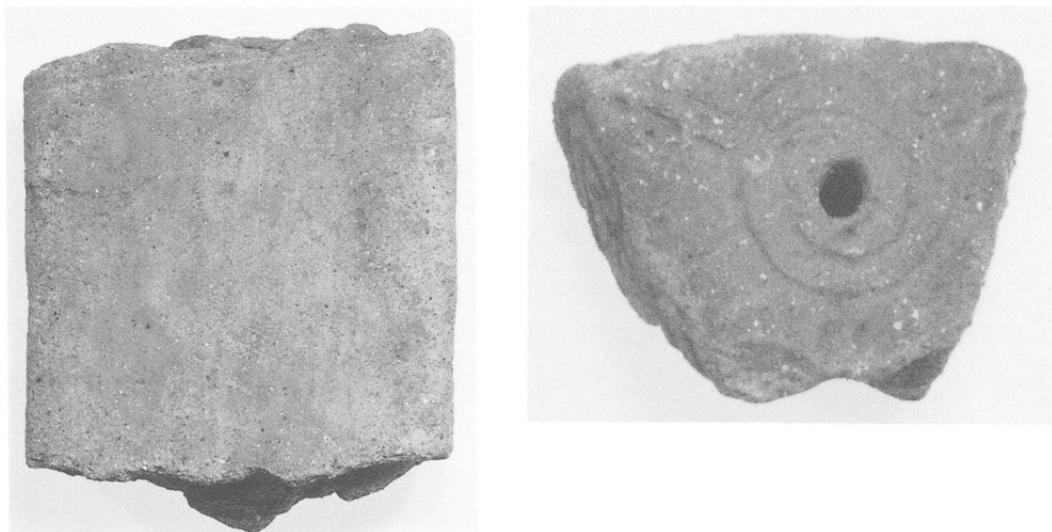


動物形土製品。一見してサルを思わせる。中は中空になり、目、口ともに貫通している。首から下は欠くが、どのような形態となるかは類例がなく想像できない。右側の耳は欠損。後頭部に貫通孔のある突起があり、あるいは持ちはこびのためヒモをかけた可能性もあり使途や形態を推測する手がかりとなるかもしれない。



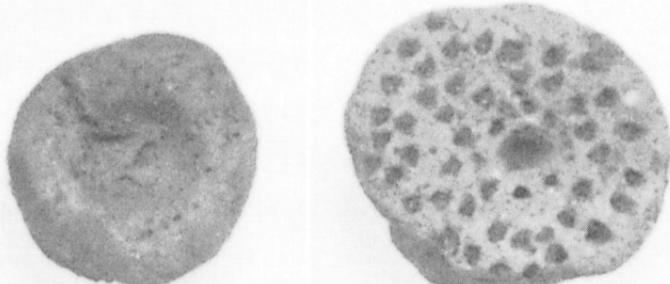
獸面把手、右側は鳥を、左側は鳥あるいは蛇を思わせる。いずれも縄文時代後期の土器の把手と考えられる。

スタンプ形土製品、
長さ7.5cm幅4.5cm
を測る。ツマミ部
分を欠くが、焼成
胎土ともに極めて
良好



左は板状土製品、幅13cmあるが、両端を欠くため大きさはわからない。厚さも推定すると7
～8cmとなる。右は三角墻形土製品。平面は一辺が5.5cmの三角形。

耳栓。左は無文でつ
くりも雑、右は表に
刺突が全面にみられ
るが形は不整で、つ
くりはやや雑、両方
ともに焼成は良好。



第4章　まとめ

ほうろく屋敷遺跡は、明科町最北端に位置しており、明科町の北の玄関口にあたり、善光寺平と松本平との人やモノの交流の要所でもある。今回の調査では、はからずもこのことを証明する多くの遺物に恵まれた。縄文時代中期の龐大な土器群中には、多くの北陸新崎式系統や東北大木式系統の土器がみられ、弥生時代中期初等の再葬墓出土の土器群中には在地系の土器を中心に、東北～北関東の土器や東海系統の土器がみられたのである。しかしながら、限られた期間内の調査であり、担当者1人という劣悪な条件下での調査ということで充分な調査とはいはず、遺跡総面積の半分強しか調査ができず、しかもかなり荒い調査であり、成果を充分に引き出すことはできなかった。また、出土遺物の量が、一遺跡としては極めて龐大な量であり、限られた期間内には整理が終了しえなかった。本報告書刊行までに終了した作業はわずかであり、多くは今後さらに検討をすすめ、数年後にあらためて報告の機会を持ちたいと思う。本報告では、今までに明らかになった成果と問題点をいくつか掲示して中間のまとめとしたい。

第1には、弥生時代初期の配石を持つ再葬墓の検出である。4群16基の土器を伴うものほか土器を伴わない配石墓が2基確認されている。該期の再葬墓は県下においても検出例は少なく、下伊那郡喬木村林里遺跡、松本市針塚遺跡などが知られるのみであるが、上部に配石を持つものは報告されていない。本遺跡でのC群の再葬墓の例は、再葬墓という縄文時代の葬制の流れからすれば、縄文時代の葬制である配石墓としての形態をとることはありえることといえようが、今後の研究のための貴重な資料となった。また、本遺跡での該期の遺構には、にぎり拳大から指頭ほどの小礫や砂利を用いた、配石や礫床が用いられておりこれも新たな資料提供となった。本文にも若干ふれたが、石棺墓とした遺構も、この砂利を敷いた底となっており、例からすると弥生時代の可能性もあるが、今後の類例を待ちたい。

再葬墓に伴う土器群は、復元ができたものが25個体あり、さらに副葬品的な小型土器が4個体あり、該期の完形品の土器出土量としては県内でも最も多い。時期は中期初頭に位置づけられるが、松本市針塚遺跡よりは若干新しい時期と考えられる。詳細については今後の課題としたい。

第2には、約7,000点以上の極めて多量の石器の存在である。石器は、打製石斧が2935点、横刃形石器351点、凹石磨石類2029点、石鏃1082点、石匙103点、石錐149点など1遺跡の出土量としては類例のないほどの多さである。特に3000点近い打製石斧の存在は、住居址数が、70軒ほどであり、未掘部分を考慮しても100軒を若干超える程度の集落としては異例であろう。何のための打製石斧であるのか、あるいは、石器の製造地の可能性もあるのか、5,000m²もの集石、配石群との関連など今後に多くの課題を残した。

石器の存在とあわせて、80点近い石棒、石剣類や第3章6節で触れた特殊な土製品類など、呪術的色彩の強い遺物が非常に多く出土し、さながら遺物の品評会のようであった。これらの遺物

は、約5,000m²の集石・配石の間からほとんどが検出されており、集石下層ではほとんど検出されていないことから、集石・配石遺構に伴う祭祀の存在が想像されるが、詳細は今後の課題したい。

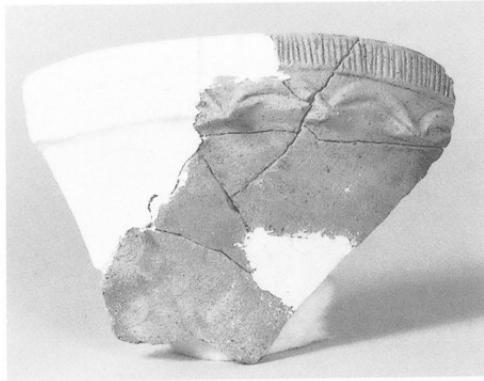
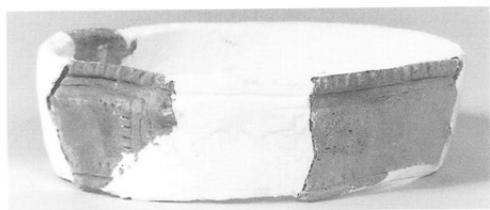
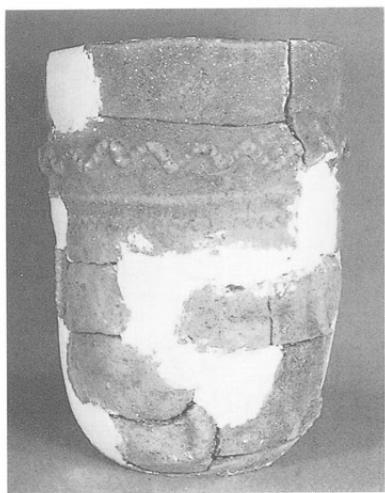
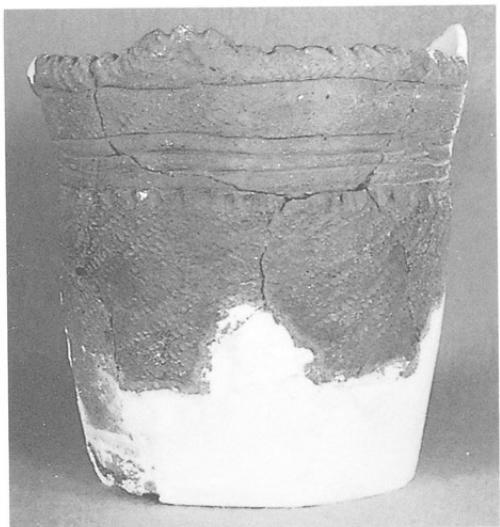
第3に古代の集落の成立についてである。平安時代の住居址は20軒検出されている。配置からすれば、未掘で終った地域にさらに多くの該期の集落が予想され、9世紀後半～10世紀前半と、11世紀後半～12世紀にかけての2時期の集落が10～20軒ほどで営まれていたものと考えられる。ことに、11世紀後半は、第2章でもふれたように、大穴庄が成立した時期にあたる。大穴庄の郷寺は、金井沢地区にある泉福寺であり、大穴の地名を持つ神社か中村地区に存在していることからすれば、これらの地区と隣接する遺跡付近も、大穴庄の中心地に近い。大穴庄の範囲が、明科町荻原地区を南に、南陸郷地区、さらに池田町南部を含む中山丘陵を中心とした広い地域と考えられているが、この地域での本格的な調査はされておらず、本遺跡での該期の遺構が初検出であった。野鍛冶の住居址や、掘立建物もあり、整った集落址として貴重な資料となった。

最後に、3年間もの長期間にわたり、担当者1人という貧弱な調査体制であるにもかかわらず本報告にこぎつけることができたのも、多くの皆さんの御協力のたまものと心から感謝の意を表したい。御指導・御協力をいただいた方々の御芳名を銘記し御礼としたい。

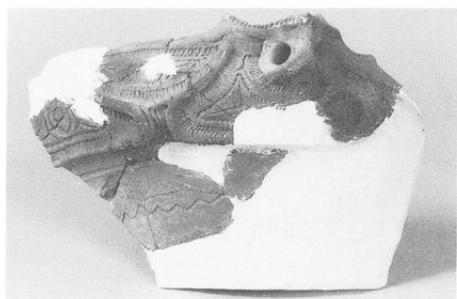
なお、成果の多くは未整理である。今後さらに整理をすすめながら数年後に再度報告をしたいと考えている。さらに多くの皆さんの御指導と御助言を賜りたい。

指導者、協力者（敬称略）

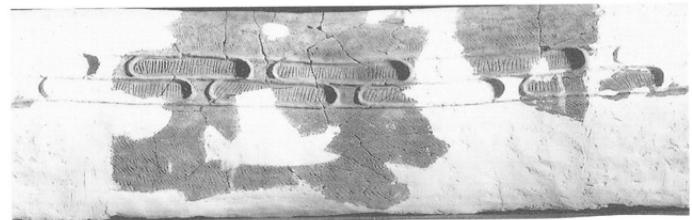
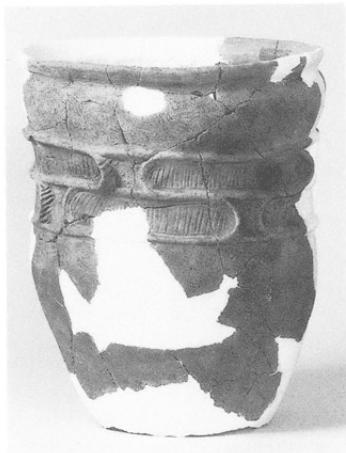
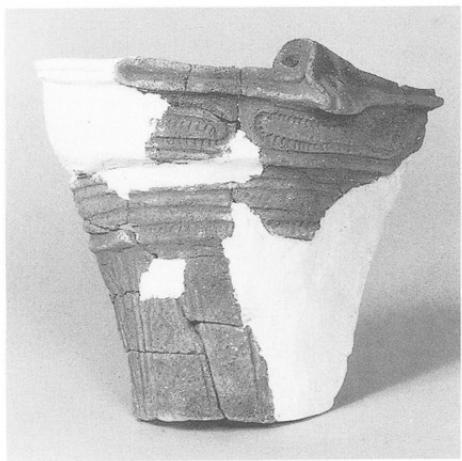
設栄博巳、島田哲男、平林彰、原明芳、中沢道彦、西沢寿晃、森義直、百瀬新治、樋口昇一、百瀬長秀、竹内稔、神沢昌二郎、直井雅尚、関沢聰、新谷和孝、高桑俊雄、野村一寿、町田勝則、山田真一、山下泰永、小林康男、鳥羽嘉彦、宮下健司、桐原健、青沼博之、笹沢浩、寺島孝典



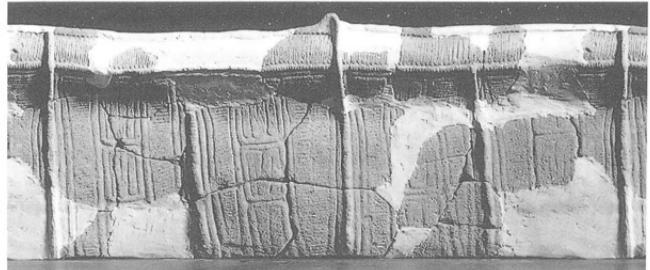
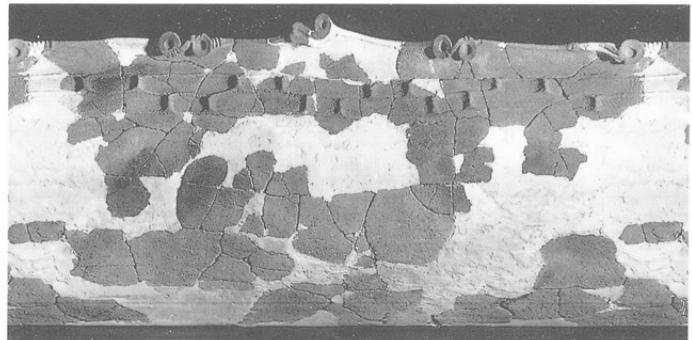
G～I-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期初頭）



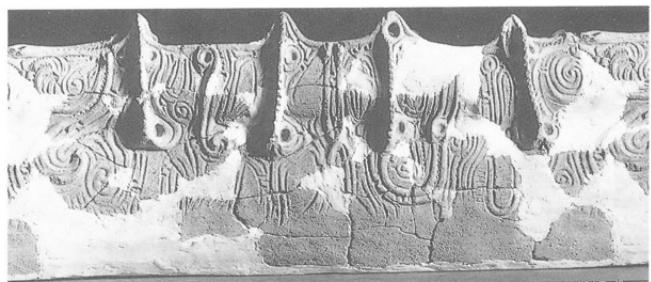
G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



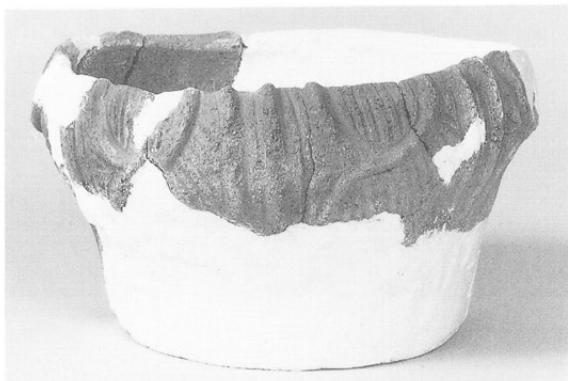
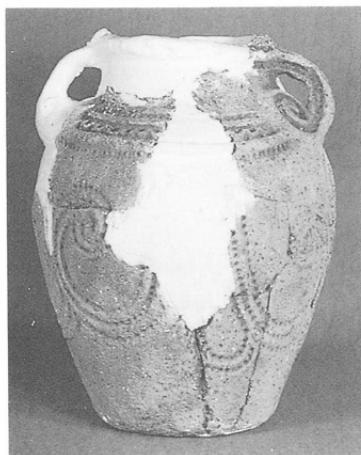
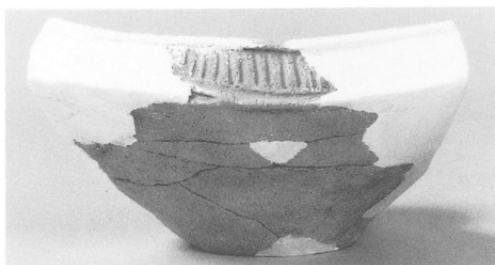
G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



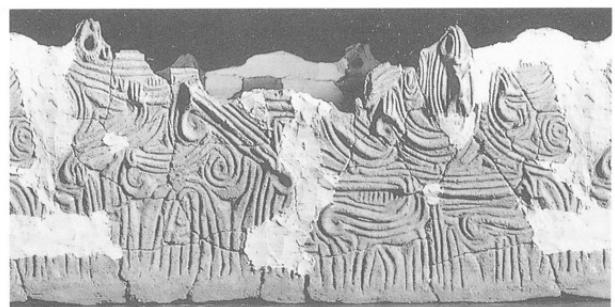
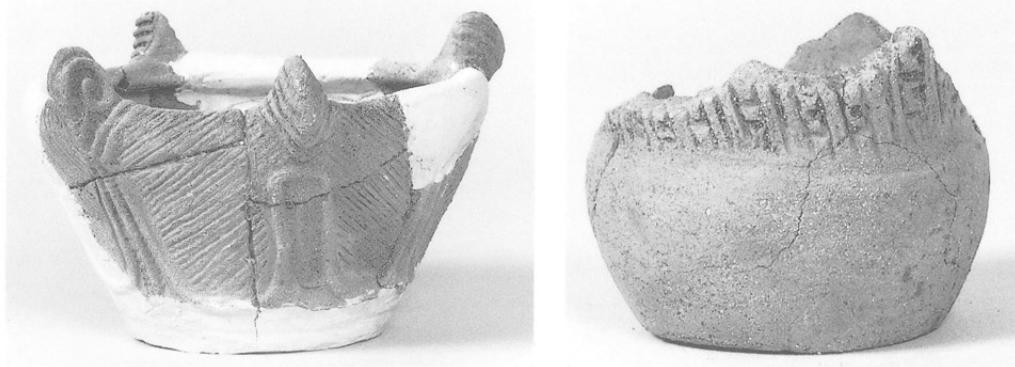
G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



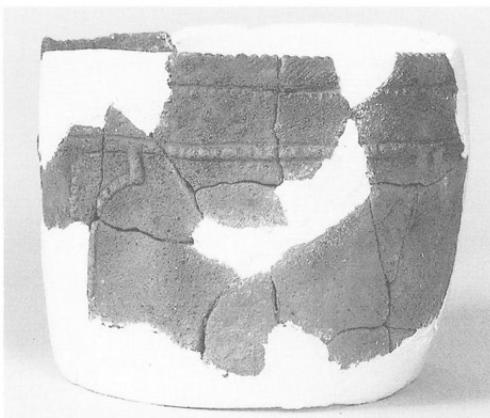
G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



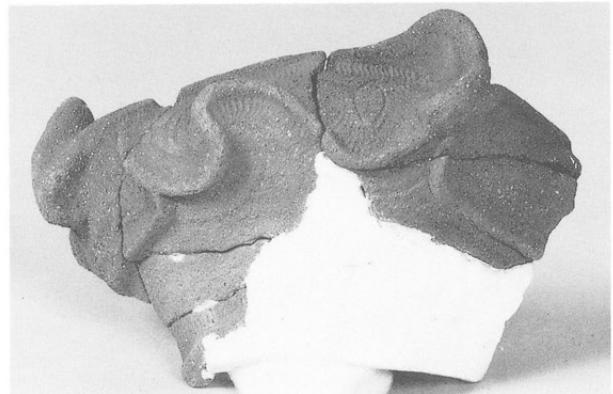
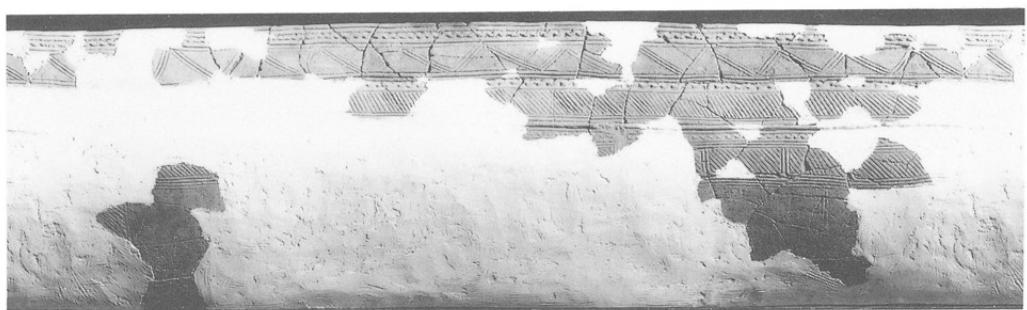
G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期後葉）



G～H-1、2 グリット土器集中区出土土器（中期後葉、焼町式土器）



B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期初頭～中葉）



B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期初頭～中葉）



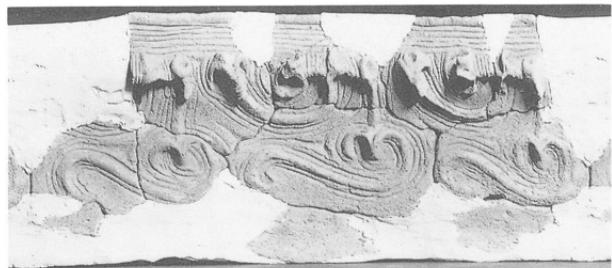
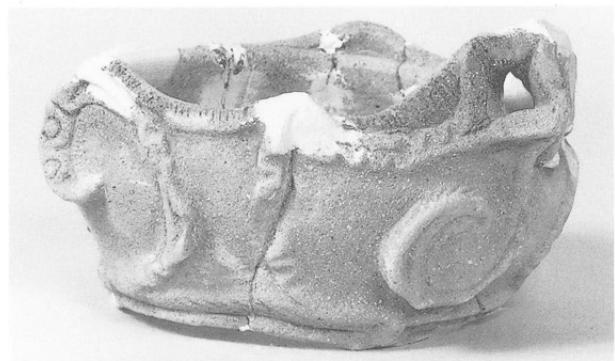
B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期中葉～後葉）



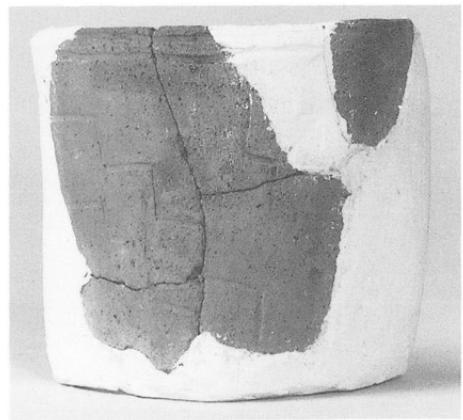
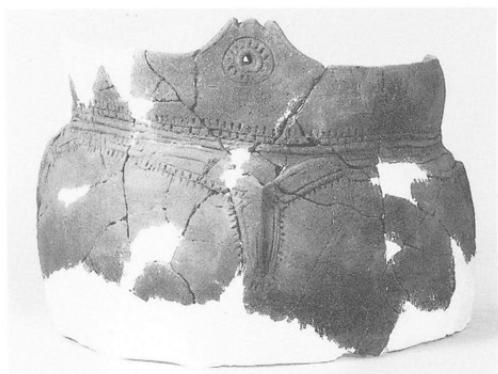
B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期中葉～後葉）



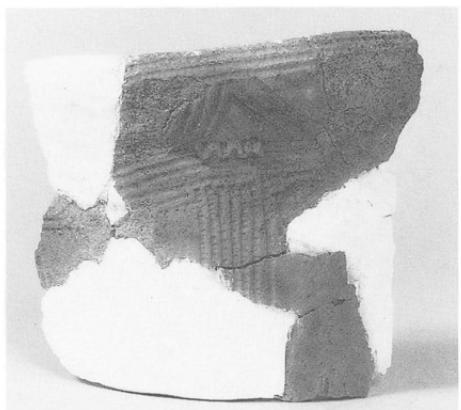
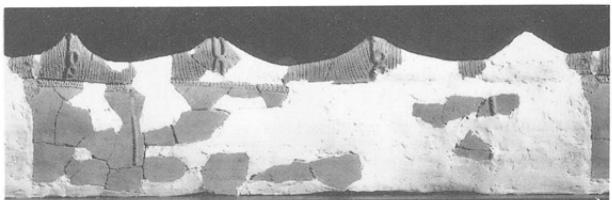
B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期後葉）



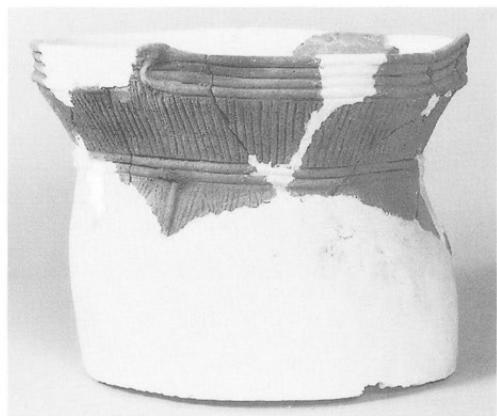
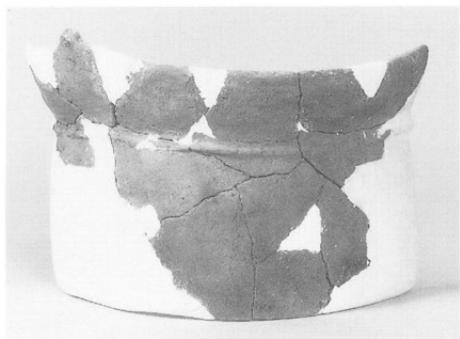
B～F-01、00、1 グリット土器集中区出土土器（中期後葉）



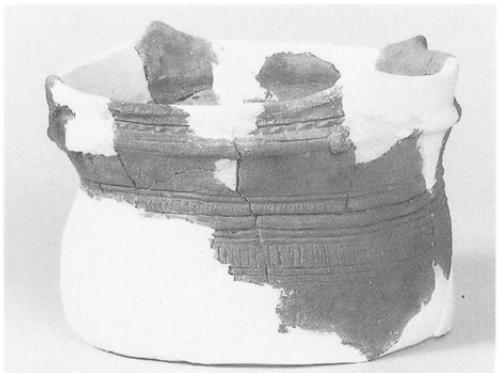
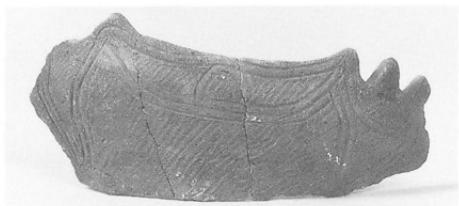
X、Y、Z-6、7 グリット土器集中区出土土器（中期初頭）



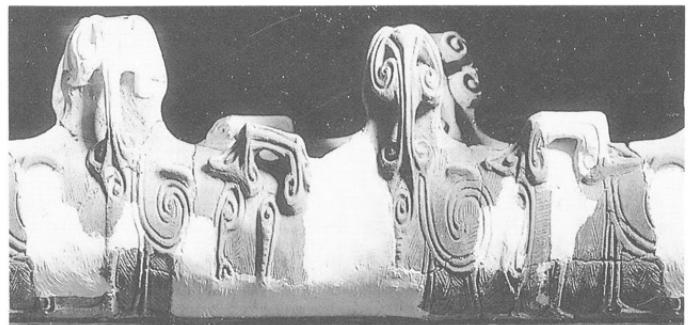
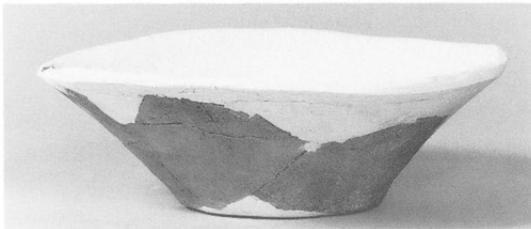
X、Y、Z-6、7 グリット土器集中区出土土器（中期初頭）



X、Y、Z-6、7 グリット土器集中区出土土器（中期初頭）



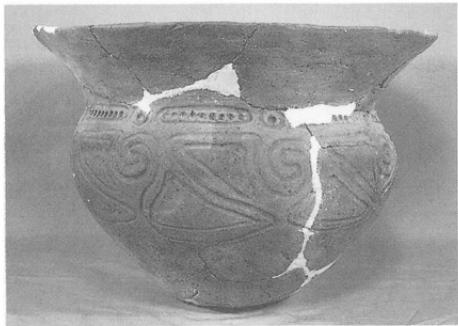
X、Y、Z-6、7 グリット土器集中区出土土器（中期初頭）



X、Y、Z-6、7グリット土器集中区出土土器（中期初頭～後葉）



X、Y、Z-6、7 グリット土器集中区出土土器（中期後葉～後期前葉）



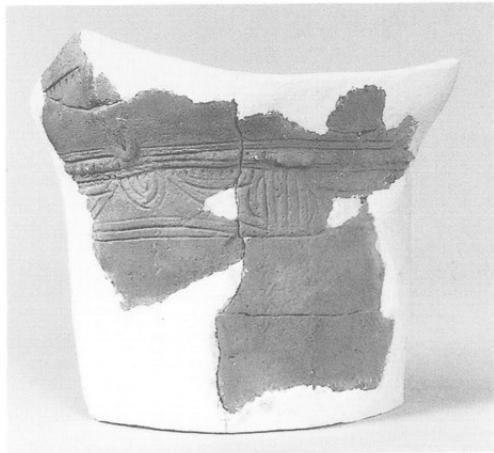
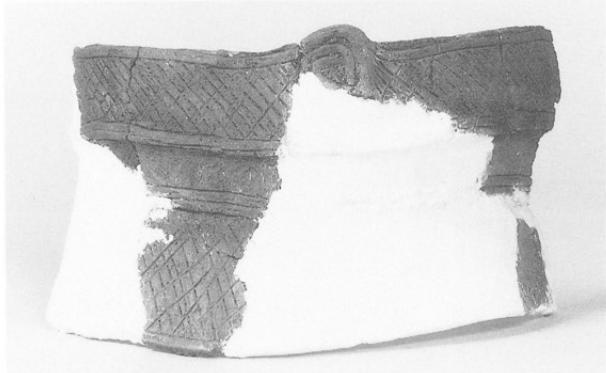
X、Y、Z-6、7 グリット土器集中区出土土器（後期前頭）



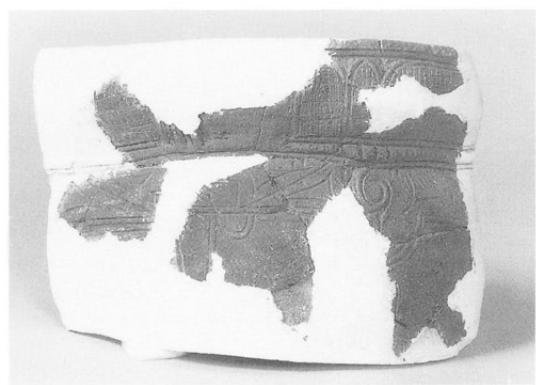
A-8、9 グリット土器集中区出土土器（中期中葉）



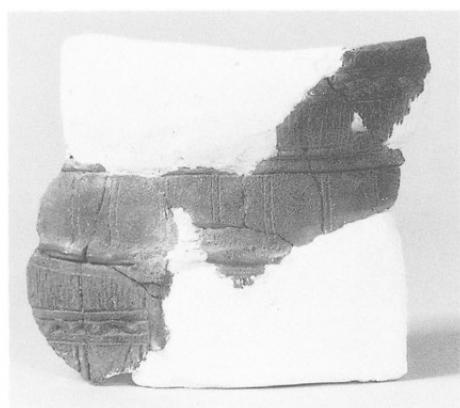
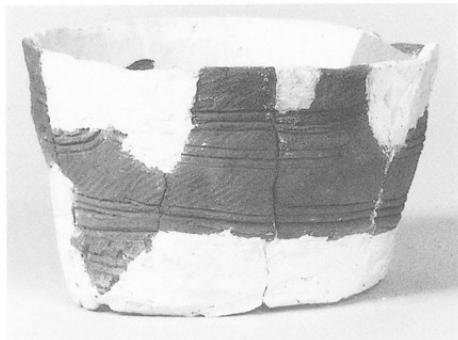
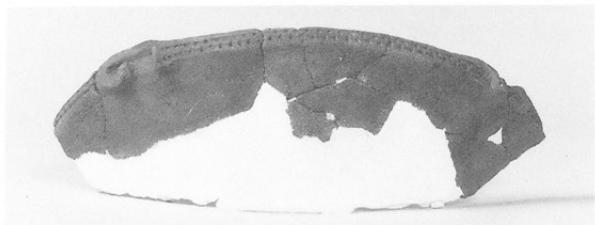
A-8、9 グリット土器集中区出土土器（中期後葉）



集石、配石群などの出土土器（前期～中期初頭）



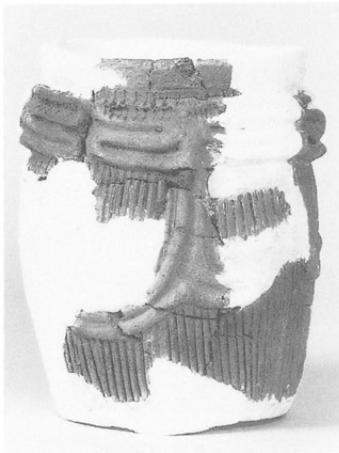
集石、配石群などの出土土器（中期初頭）



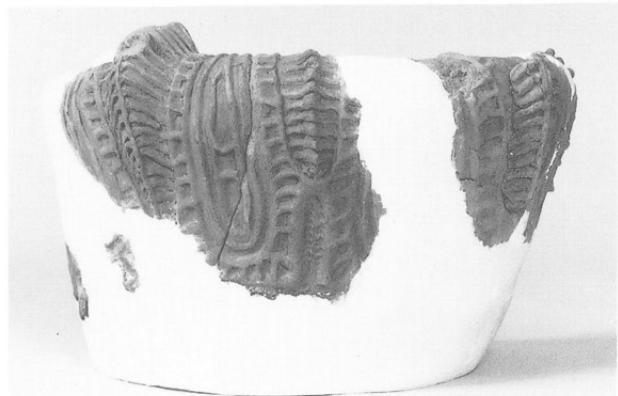
集石、配石群などの出土土器（中期初頭）



集石、配石群などの出土土器（中期初頭～中葉）



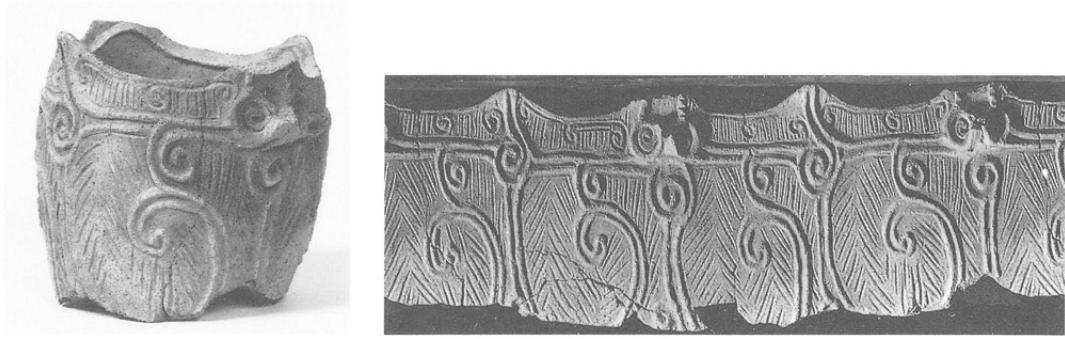
集石、配石群などの出土土器（中期中葉～後葉）



集石、配石群などの出土土器（中期後葉）



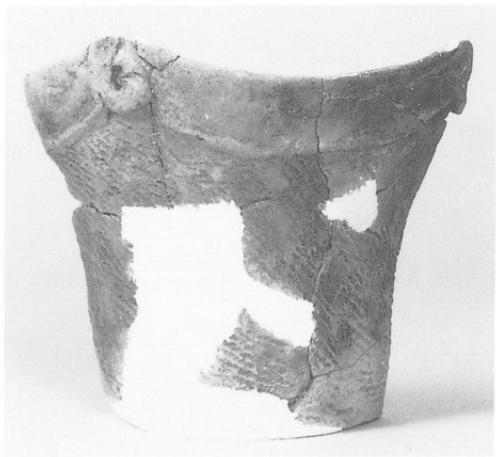
集石、配石群などの出土土器（中期後葉）



集石、配石群などの出土土器（中期後葉～末）



集石、配石群などの出土土器（中期末）



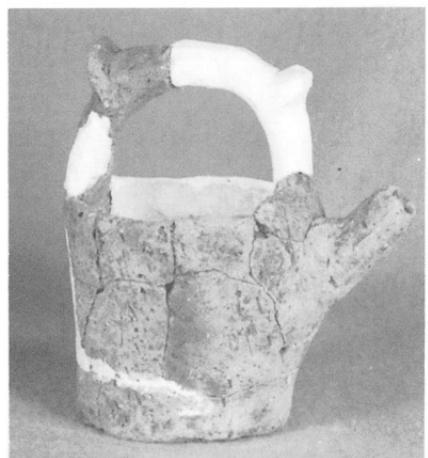
集石、配石群などの出土土器（中期末）



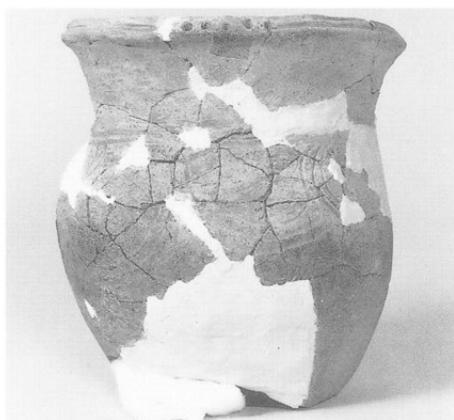
集石、配石群などの出土土器（中期末）



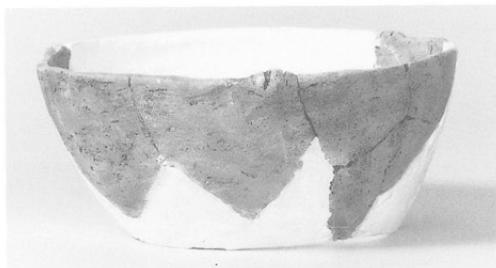
集石、配石群などの出土土器（中期末～後期初頭）



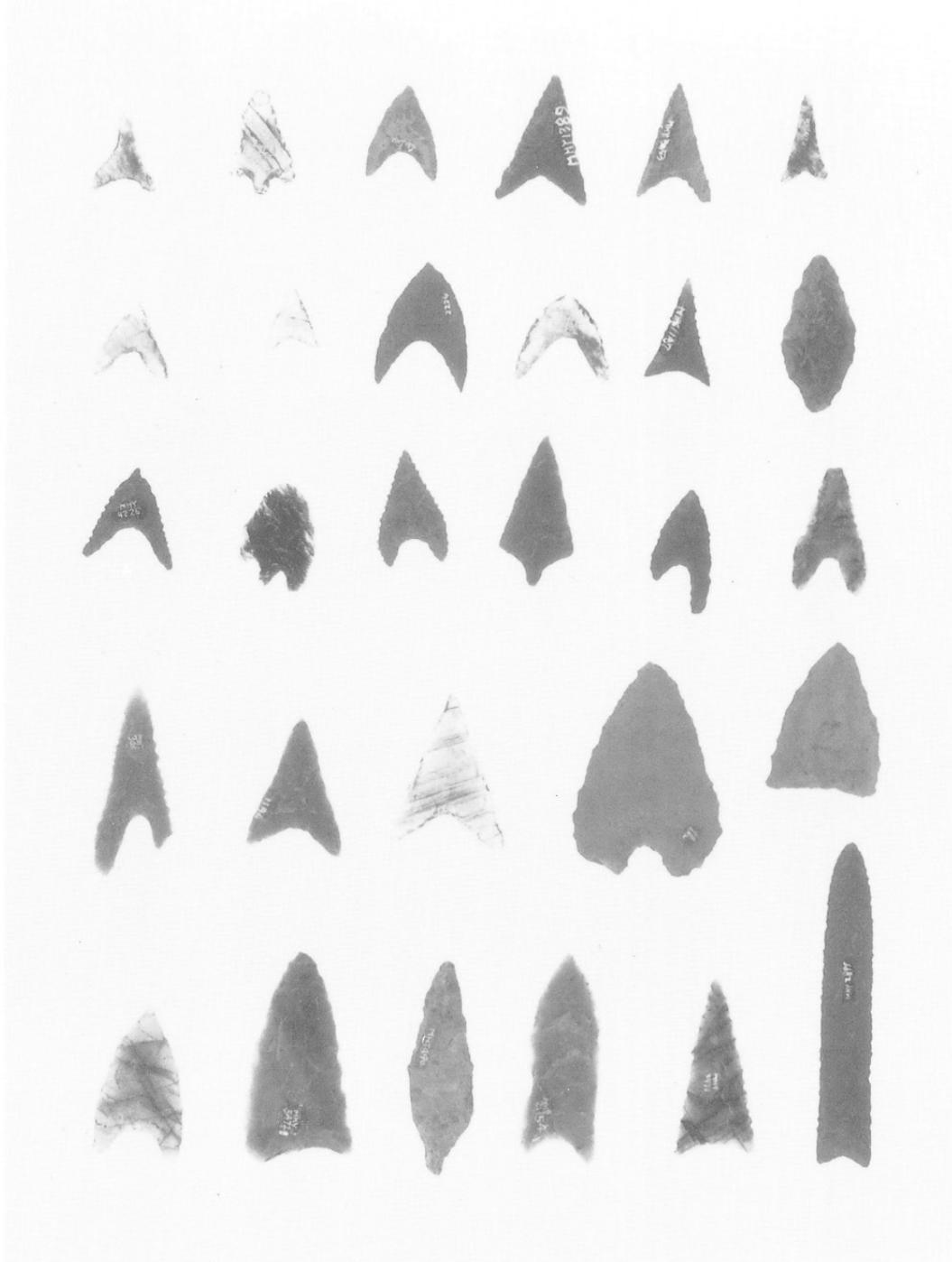
集石、配石群などの出土土器（後期初頭～前葉）



集石、配石群などの出土土器（後期前葉）



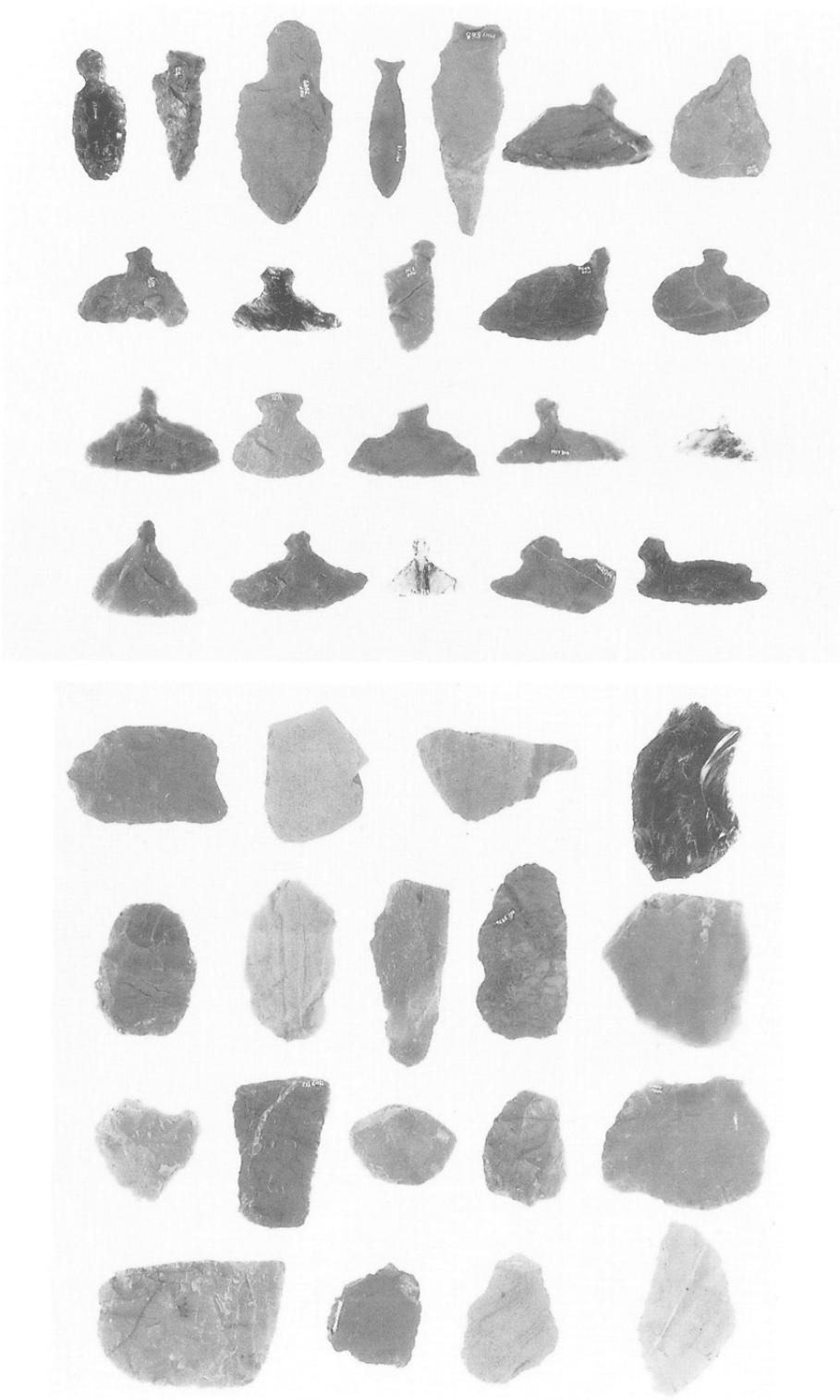
集石、配石群などの出土土器（後期中葉、注口土器）



石鏃



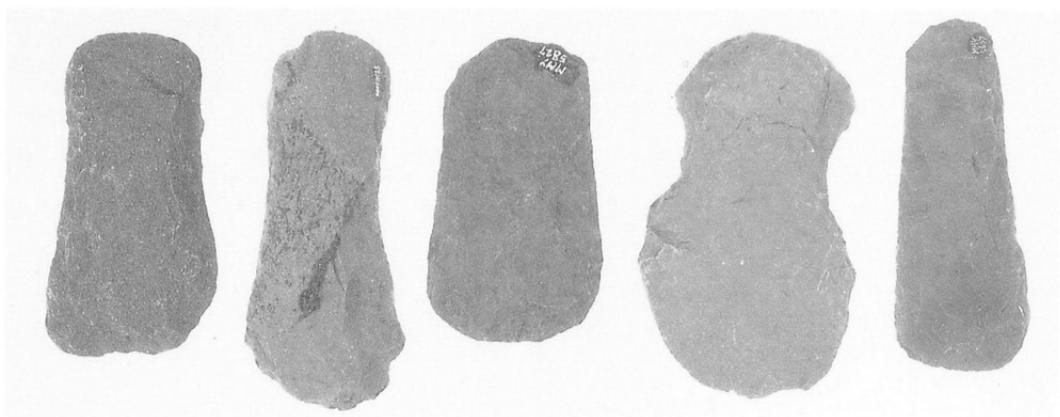
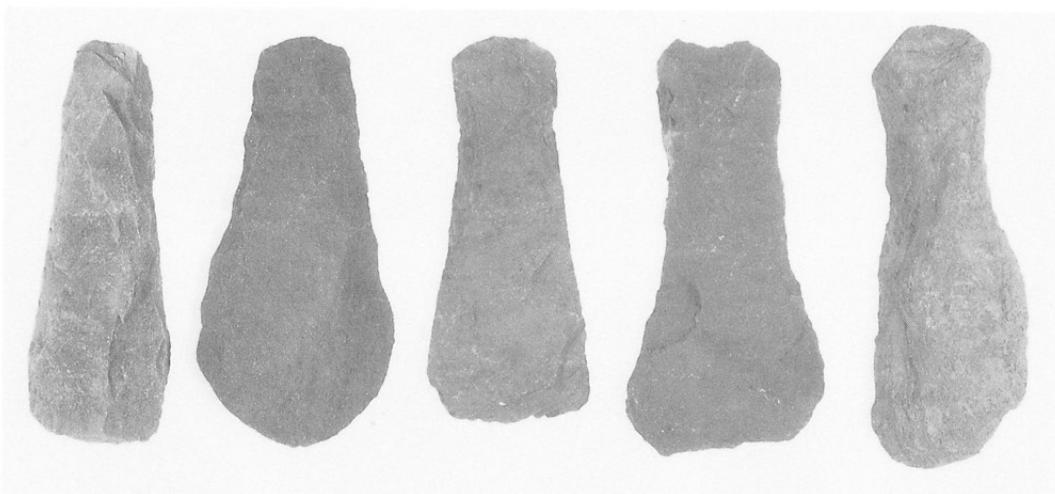
石錐



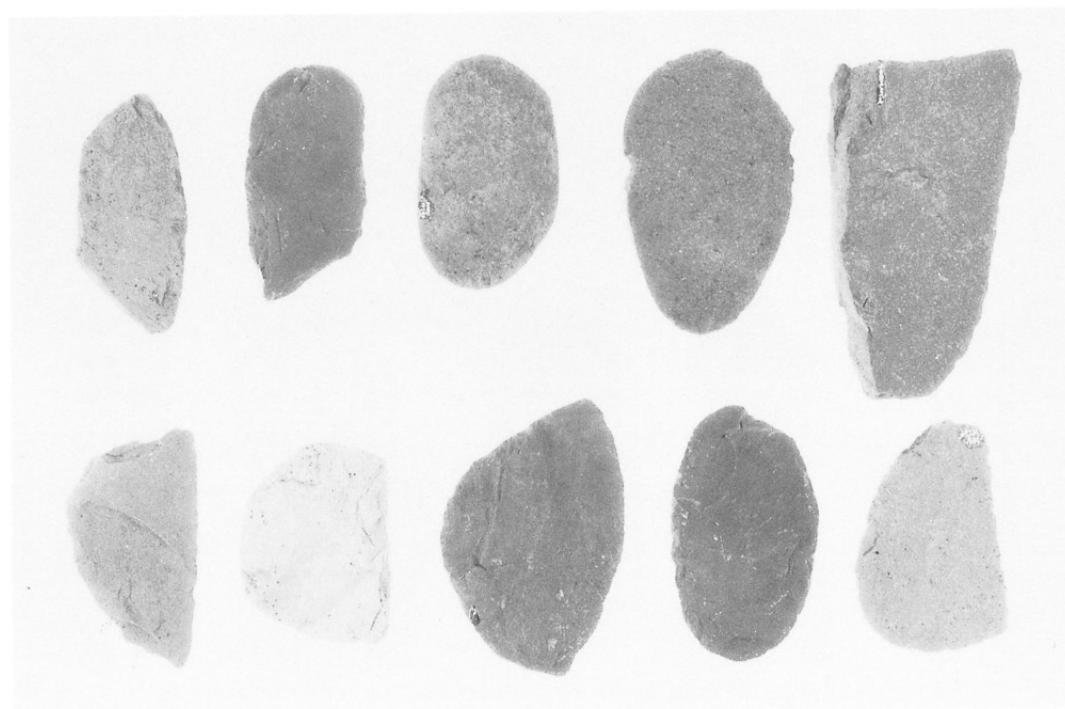
上 石匙 下 スクレイパー



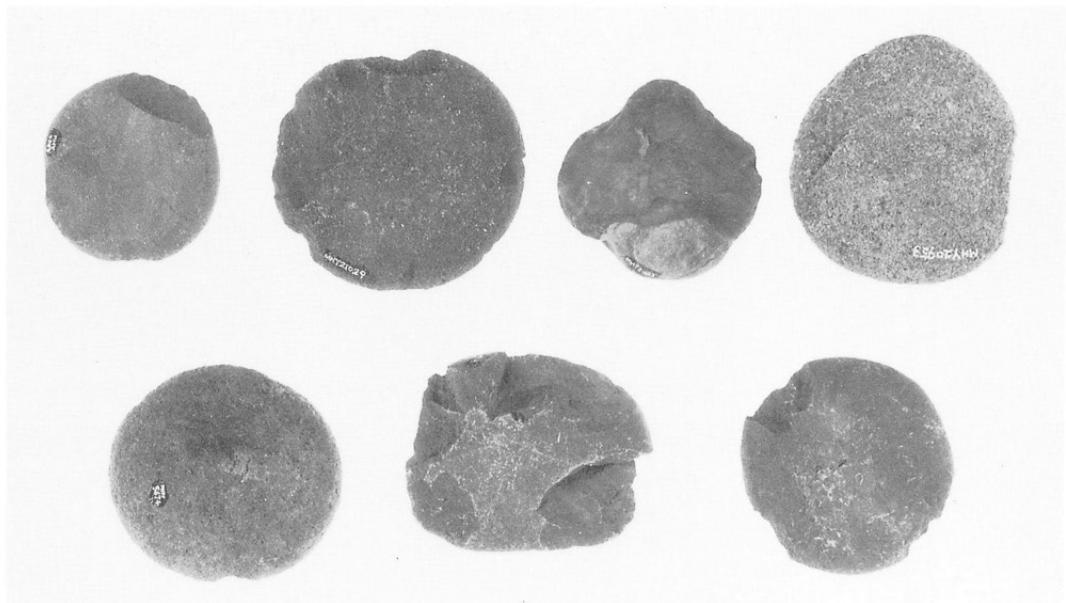
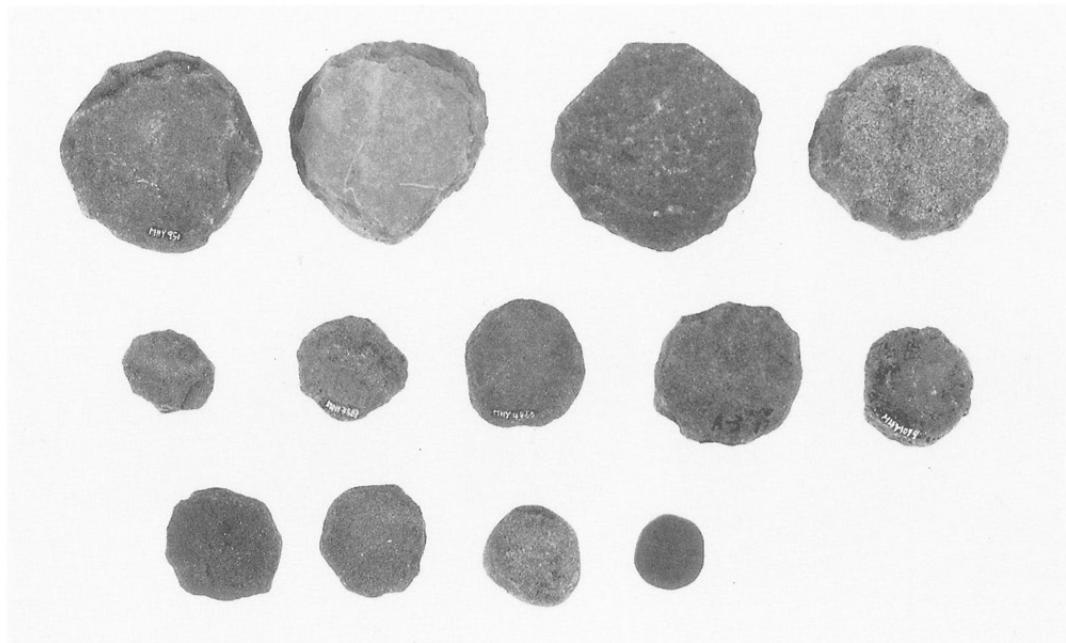
上 石核 下 石器製造具



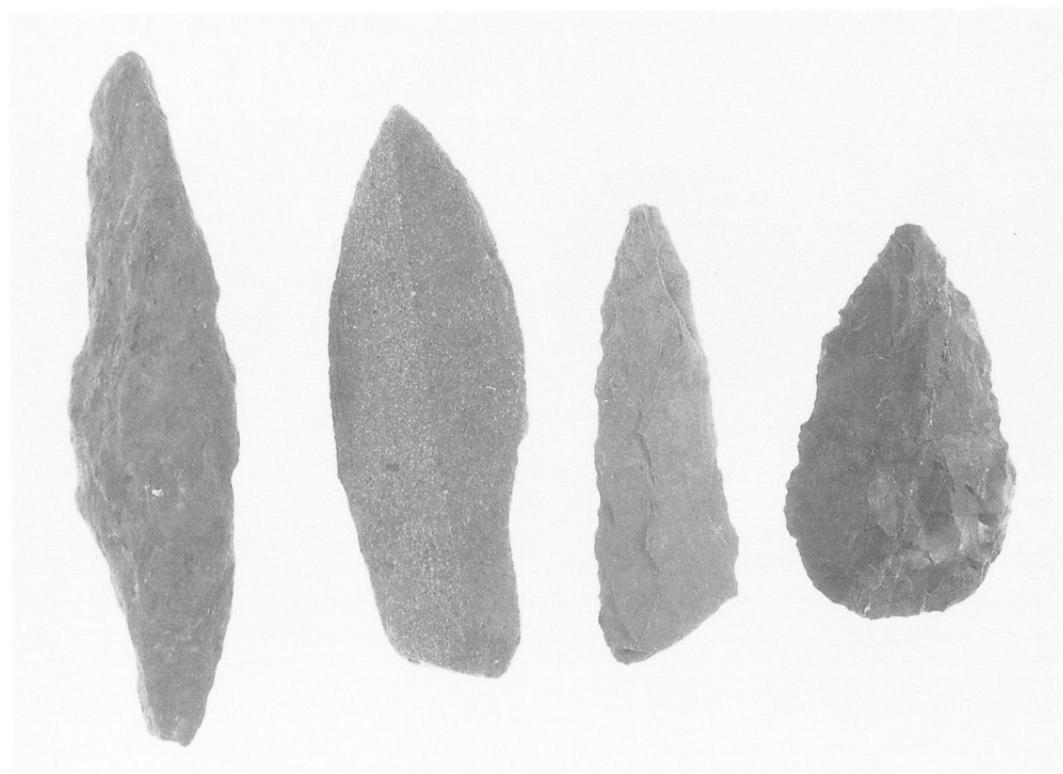
打製石斧



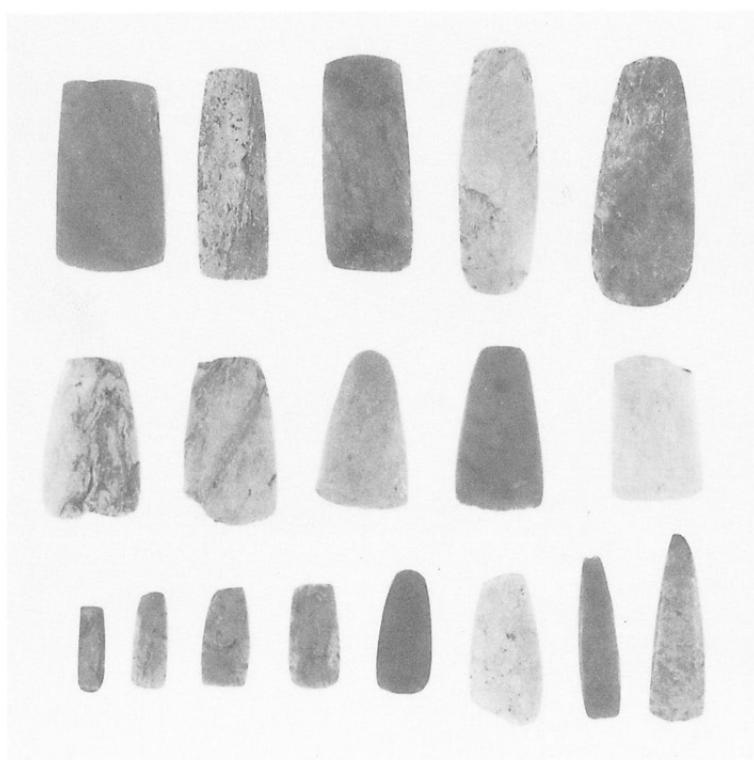
上 石鍬 下 橫刃形石器



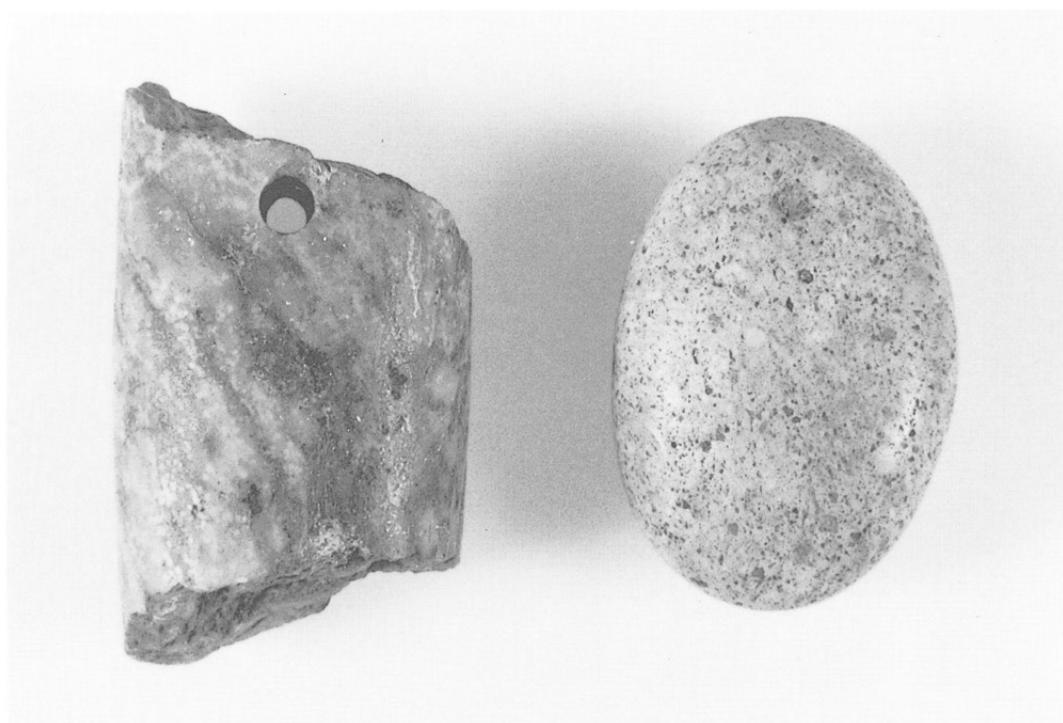
上 石錘 下 石製圓盤



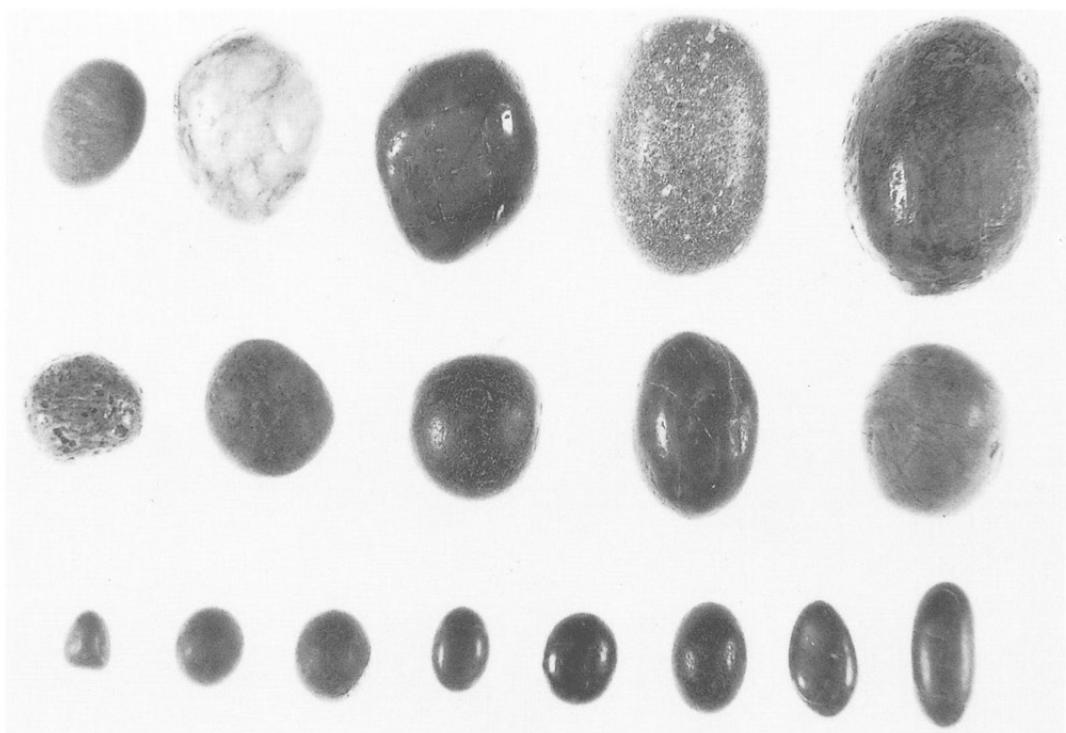
上 石包丁（中央は磨製） 下 尖頭器状石器



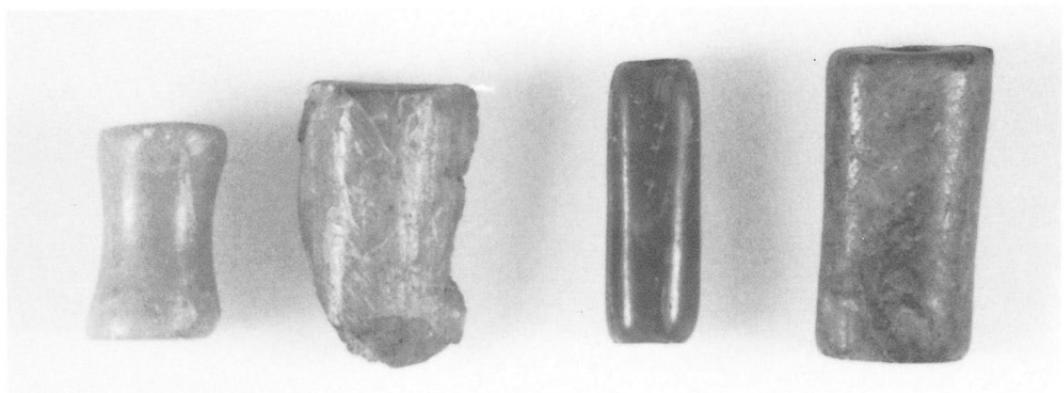
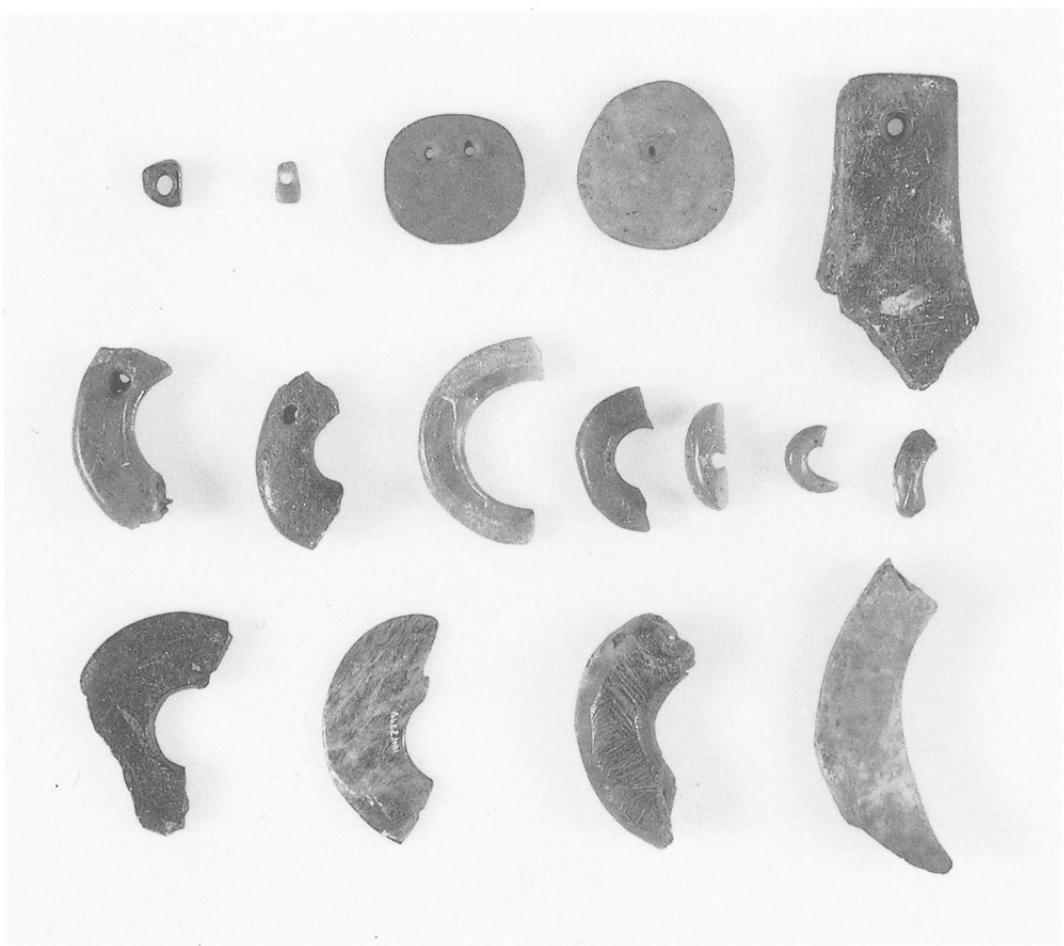
磨製石斧 下は小型磨製石斧



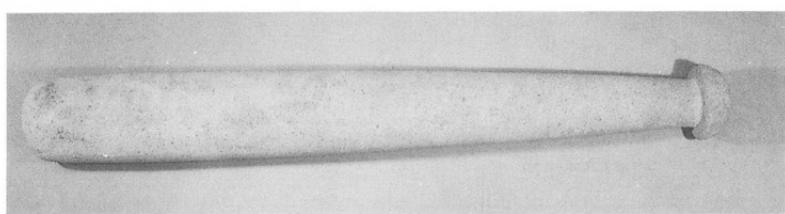
装飾品 上 大珠 下 磨いた玉類（ひすい質）



上 よく磨かれたチャートなどの玉 下 玉砥石



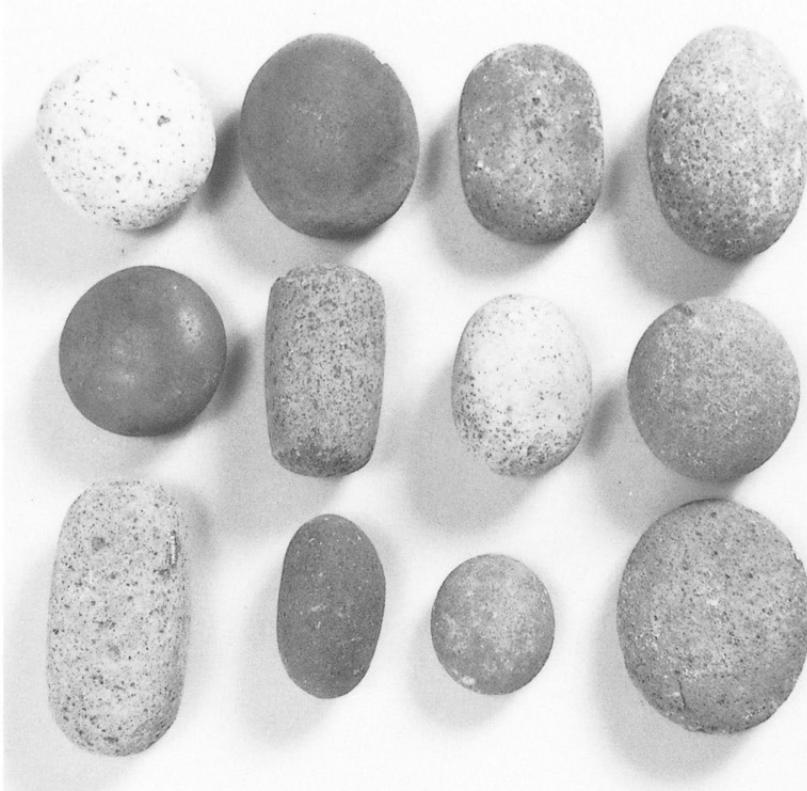
滑石製裝飾品 上 垂飾 下 管玉



上 石剣類 中 長さ110cmの大石棒 下 緑泥片岩製の大石棒



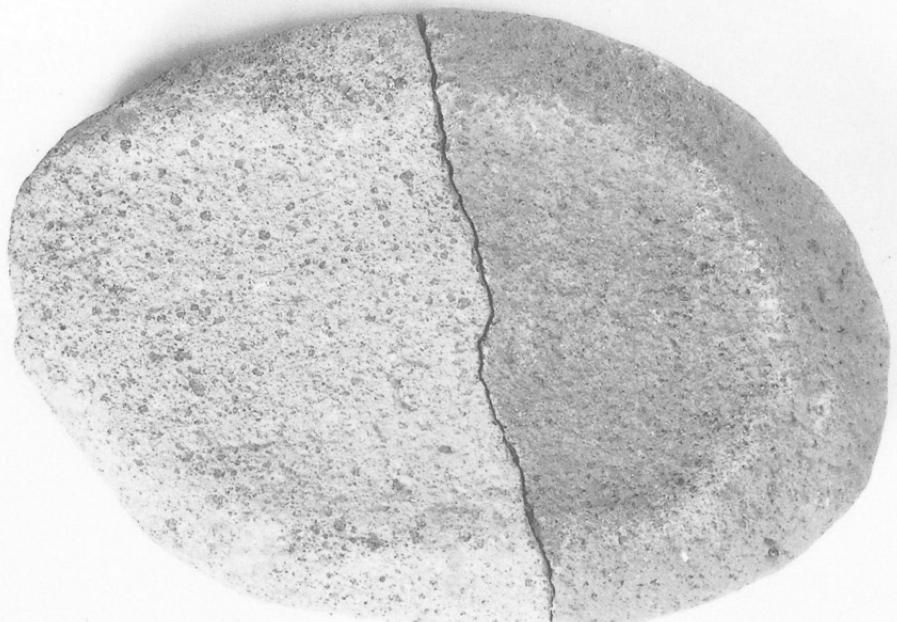
凹石



上 磨石 下 丸く磨かれた磨石



上 蜂ノ巣石 下 石皿



上 石皿の接合例 下 住居址に据えられた大きな石皿

明科町の埋蔵文化財第3集

ほうろく屋敷遺跡

—川西地区県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

平成3年3月30日 発行

発行 明科町教育委員会

印刷 ほおづき書籍(株)

長野市中越293柴崎第一ビル
